

(三纏半)一枚、白絹少々、金紙少々、オレンジ色リリヤーイン五寸(十五纏)茶色リリヤーイン少々、まづ最初に手足を白リボンで作る。手は、半インチ巾一寸五分の白リボンを、巾三つ折りにして貼り合せ、手先になる方を三角に切つておく。

足は三寸五分のリボンを(11)圖のやうに、巾の兩端を裏へ折り返して貼りつけておくのであるが、腿のふくらみをつけるために、折代を加減して丸味をつけ、足の先の方は兩方の折代が重なつて、巾三つ折りになるやうにする。さうして足の先を金紙で包んで靴の感じを出す。

次は一インチ巾のリボンを丈眞二つに折り折り峯のところを中側へ三角に折り込んで肩の感じにし、二枚の間に兩手を挟んで縫ひ止めておく。次にオレンジ色リリヤーイン五寸を四本に切り分けこれを洋服の肩吊りの感じに肩の兩側二本づゝ渡してとめる。次に(13)圖のやうにオレンジ色リボン二寸の分をまいて、後で貼り合せておくと、これで胴から上は出来上つたから、つゞいてスカートをつける。

はじめオレンジ色九寸と、半インチ巾の緑色リボン九寸との巾をはぎ合せて一インチ半の巾にする。(オレンジ色の上に緑色を重ねて糊で貼りつける)次にオレンジ色の巾の端をぶつゝ縫つて糸

をひきしめると、ピエロの首廻りと同じくギャダがよつて大きな輪になり(13)圖のスカートが出来上るから、(14)圖のやうにスカートの中心に出来上つてゐる胴をとぢつけておく。次には足を二本揃へ、上部を半インチ巾のオレンジ色一寸五分のリボンで巻く。さうしてオレンジ色で巻いたところをスカートの縫ひちぢめた中心の裏へとちつると、足がつくと共にスカートの裏側が綺麗になる。

あとは顔を作つて胴につければ全部出来上るのである。即ち古葉書を直径七分の圓に切り、白絹をそれより一分廻り大きく切り、紙の上に綿をあて、その上から白絹をあて、廻りを折り返して裏で貼る。これで顔はできたから、顔のまはりから裏側全部へ、茶色のリリヤーインの熱を戻して貼りつけ、頭髮の感じにする。さうして胴に貼りつけ、頭のうしろまで開いてゐるスカートの端を後頭部に一針縫ひとめ、掛紐をつけておく。顔は目を大きく唇を眞赤に描き、頬を紅くしておく、ダンサーの感じがよく出る。

二度使用 リボンの油染みたのは揮發油できれいにし、石鹼液か、或は硬水の場合には硼酸液で、絹物等と同じ様に刷毛で洗ふ、この時刷毛を縦なりに使はず布の横なりに使ふと、大抵のリボ

ンは横糸に人造絹糸が織込んであるので地が傷む、かうして洗つたら、よく濯ぎあげて乾いた手拭の間に伸ばして軽く押付けて水気を取り、乾き上つた所で、ゼラチン糊に浸して、半乾きの頃、鏝を當てると、地合に十分の張りが出て、色光澤もよく仕上り、新しい品同様になる。

次に、リボンとして役立たなくなつたのは、豆腐屋から豆の煮汁を貰つて、これに蜂蜜を少し加へて、洗ふと清浄となる。その上で以下の方法によつていろ／＼に利用するがよい。

信玄袋 古リボンを澤山集めておいて、きれいに洗上げ、いろ／＼の色に染直したり、或は色の配合をよく組合はせて、子供の遠足用の信玄袋に作ると、面白いのが出来る。

帶留 綺麗なものはそのまゝ縫つて、綿の芯を入れて、丸い帶留になる、角に箱縫ひをして金具をつければ一層上品になる。無地のものだつたら、刺繍を加へると更にいゝ。又、箱縫にして綿を芯に入ると子供用が立派に出来る。

鼻緒・紐類 古いリボンで鼻緒を拵へると、仲々氣の利いたものが出来る。又、つぎ足して一寸芯を入れ、樺や細紐にすると之又大へん體裁がよい。子供の羽織の紐等も古リボン利用で結構出来る。どうにも利用出来ない様なものはハタキにすると丈夫で體裁もいゝ。

乘 古リボンを前のやうにきれいに洗つて、手頃の長さで切り、下の方は横糸の順に抜き、堅糸丈にして總の様に垂らしておくか、或はこゝを網の様に組む丈でも立派な乘となる。又、幅の廣すぎるのは、左右の堅糸を抜いて下と同じ様にして、ミシンをかけるか、或は手縫でも鎖縫にでもしておけば一層きれいだである、この他その布地によつて、それ相應に工夫すればいゝ乘になる。

其他、リボンは半襟、子供の服の飾り等にもなる。

古カーテンの利用法

袋 華美なメリンスの布地等を表にして、袋を拵へ、これへ透し織のカーテンをかけると、下の布地の色合や模様等が透いて見えて品いゝ袋が出来る。其他、何か他の思ひ付の品の表へこの透し織のカーテンをかけると、ハイカラなものとなる。

夏座布團 カーテンの廢物は傷まない部分を切取つて、袋に拵へて、冬の座布團へ被せると、下の布が透いて見えて、いかにも涼しさうで結構夏座布團の代用となる。メリンスの美しい座布團や、メリンスや絹の小布をつぎ合せて作つた座布團等だと、殊に映りがよろしい。白い金巾のカー

テンだつたら、石鹼でよく洗ひ、漂白粉でよくさらす事は言ふ迄もない。

蠅帳 透し織のカートンの古布をよく洗つて晒し、少し糊をつけて竹又は針金を骨として思ひのまゝの形に組み立て、之に貼りつけると、夏の食卓に覆ふ立派な蠅帳が出来る。

女兒服 女の夏の平生洋服には、古カーテンを利用して仕立てると結構役に立つ。又、このカーテンで涎掛けや前掛の縁等に利用しても仲々ハイカラなものである。

前掛け 白いカーテンの古くなつたのを利用して、ごく簡単な子供の前掛けを作ることが出来る。袖下の両脇を縫ひ、裾にレースをつけ、袖のところと首のところは、細く三折にしてミシンをかけ肩のところをとめる。

アイロン掛けの下敷 女兒服にする事もできやうし、物によつては刺繡又はクレヨン染應用によつてテーブル掛にもならう。白の天竺などで、もう古くて仕様の無いものなどは、墨位の大ききの布團に縫つて、中に厚さ七八分に綿を入れ、火斗だのアイロン掛の時の下敷にすると重寶である。

古手袋の利用法

炭取扱用

炭俵から炭を出すのに一つ／＼火箸で扱んでゐては忙がしい時など面倒である。さりとして手で掴んでは手があれて困る。この時には手袋の古くなつて使へないもの、又は片手を紛失して一つしかないもの等を炭俵の傍へ備へつけておき、炭を出す度に之をはめると手を汚さず、早く出せる。

指拔

革手袋の使へなくなつたのは、これで裁縫用の指抜きを作るがよい、但し、薄い革だつたら二重か三重にし、強い糸で縫ひつける。

壘の口覆

揮発油やベンゼン又はアルコールの様に、蒸発する薬品の入つた壘や、水気を嫌ふ薬品を入れてある壘の栓にはコルクを用ひるが、更にその上にこの革を堅く被せて縛つておくと、絶對的に効目がある。

鍋おろし

炊事手袋の、指先が破れて使へなくなつたのが、幾つか溜つたならば、その丈夫なところを切り取り、鍋やお釜の、熱いを持つときに、鍋おろしに使ふことができる。作り方といつても、それは簡単な物であるから雑作はなく、たゞ、いゝ加減の大きさに楕圓形に切つたものを二つ折りに曲げ、その真中に源平紐を通して、二つを繋ぎ合せたものである。

お鍋やお釜を持つとき、ちかにつくと熱いし、手近かに何もなくて困ることがよくあり勝であるかうして、焔爐の近くに掛けておくと、入用のときすぐ役立つ。ゴムであるから、見た目にも感じはよいし、どんな熱いものでも平氣である。但し、ゴムは薄い手袋ではなく、裏ネルの厚いのに限る。

古帽子の利用法

カラー入れ 麥稈帽の古ばかりは一年こつきりなので、その儘廢物とするより仕方ないが、これをカラー入れにすると仲々重寶である。その作り方は、古麥稈帽子の鏝を切り、その切口の周圍へ幅三寸程の布をすつかりかぶりつけ、その上の方に小紐を入れて括る様にし、どこへなり吊しておき、そこへカラーを入ると、可成澤山入れておく事が出来る。

土瓶敷 古麥稈帽子はその底丈抜き取り、縁を丈夫な糸でかどつて土瓶敷きに拵へるとよい。

ペン拭・石磐拭き 學生帽の古いのは、之を花形かハート形に切つてペン拭きに使用される。又、周圍の細長い部分を二分位の幅に長く切つて、端から巻くか、單に大きい所を程よく切つて、

中へ古綿を詰め、木栓等をあて、堅く縛りつけて、石磐拭き、黒板拭にする事も出来る。

繼當て 小學生や中學生はよく洋服に穴を明けたりかき裂きをする。かうした場合、これを繕ふ爲に、古學帽の布地を取つておいて、繼當てすると、他の布でしたより、見かけも大へんにいゝ

指拔 學生帽子頤紐は指の太さに切り取り、その厚さに依つて一重又は二重にして堅く縫ひつけると、丈夫な指抜きができる。

スリツバ 古くなつた中折帽子は、一足のスリツバになる。先づ、つばを切り離して、それでスリツバの底を拵らへ、頭に被るところを、二つに切つて爪先被ひにするのである。

頸環と花飾 材料はフェルト帽子の古いのと、ビーズである。先づフェルトを丸く同じ大きさに切る。そして中央に穴をあけたら、五枚づつビーズを中に挟んで糸を通せばよいのである。

フェルトの色が餘り褪せてゐたら、染め直す必要がある。色はビーズの白にフェルトの黒がよいと思ふが、洋服の色に調和するやう、他の色にしても結構である。要は薄色と濃色との配合にあるので、それと同じ丸いフェルトで花を作る。

花の芯は小さな鉤でも、ビーズでも宜しい。

第二の方法としては、大型のボタンを腹合せにして四つづつ、小型のビーズ二つと交互に糸へ通した頸環で、この場合の花は、フェルトの代りに大型のボタンを使ふのである。それに小型のビーズを一つ宛通して芯とする。

其 他

毛布を布團に 赤や白、鼠色等の毛布が、色がさめたり破れたりして用ひられなくなつたら、之を二枚又は三枚位に重ねて、所々を綴ぢ、その上に白キヤラコや白天竺木綿等を被せると、布團の代用となり、軽くて暖くて布團より却つて氣持がいい。

ズボン下を猿股 大人ものでも子供ものでも、兎角ズボン下は膝の所から切れ易い、この切れ所から切取つて、上の方の丈夫な所丈を修理して猿股に拵へるがよい。

古セーターをカバーに 子供達の不用な古セーターがあつたならば、衿を切つて横に真中から切り離し、形よく丸味をつけて（短靴のやうに）縫ひ合せると、恰度子供たちに穿かれる靴下カバーを、ごく簡単に體裁よく作ることができる。

和服類の部

古単衣の利用法

單衣の利用法はいろいろあるから、その人々によつて、銘仙とかお召とかいふ種類だつたら、古くなつたのを羽織にする人もあり、又、半コート、衿 細入といろ／＼形を變へて用ゐる人もあるが、茲には目新しい利用法を紹介しよう。

古セルの着物で男兒服 母のセルの着物が少々派手になり、又ところ／＼を虫に食はれて小孔が明いた、といったやうなものを利用して、七八才向の男兒用合服を一揃作つて見る。

寸法は上着の身丈一尺一寸五分、衿、一尺二寸五分、ズボンは丈約一尺に、股下四寸の出来上りである。（鯨尺）

尚ほ古物の材料は、別項でも多くの實例を以て示してあるやうに、婦人コート、大人の背廣服、

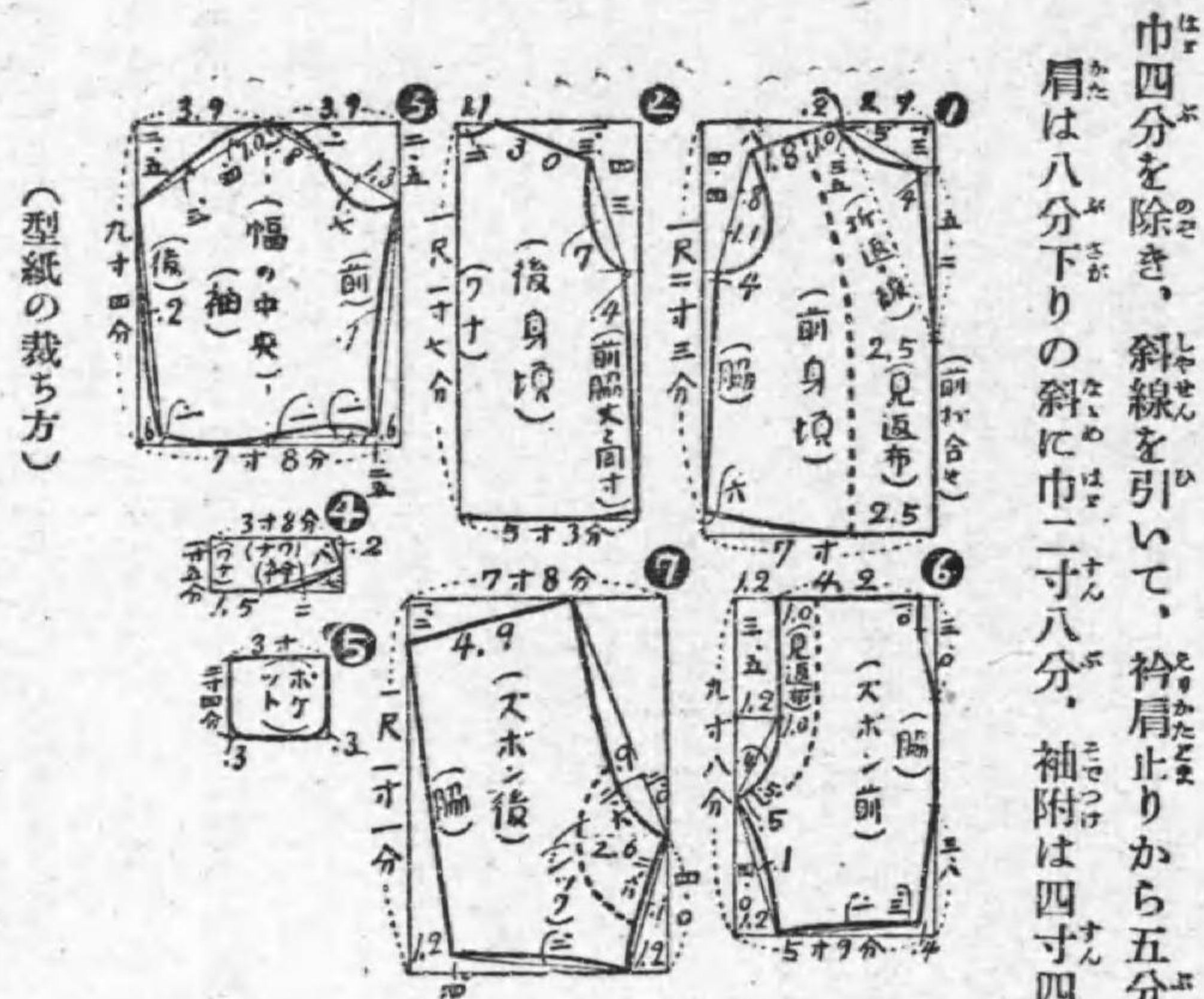
オーヴァー、インパネスなどで、角が切れたり裏返しのできるものを、何なりと利用し得ることは言ふまでもない。大きいものを小さく仕立て替へるのであるから、大抵は容易く出来るのである。また物によつては、上着とズボンを別々の布地で作るもよからうし、端布の新しいのと配り合せても面白く仕立替へられるであらうことも、他に多くの實例で示しておいたところである。

▲材料……利用するものゝいたみ工合によつて、一樣には言へないが、この實例では、本裁セルの着物(大巾物)の、身頃だけで間に合ふこととなる。若し他のものを利用する場合には、やはり初めに型紙を裁つて、布地の上に當てて見るのが、最も簡単な見積り方であらう。

また、古物であるから、解いて洗張なりクリーニングをして、地をびつたり整へておき、他にズボンの腰裏布を巾二寸、丈二尺位に一枚、布地との配色を見て、四つ孔の飾釦を五分丸四箇、三分丸四箇、スナップ七組等を用意する。

▲型紙の裁方 例の如く、出来上りの寸法で「型紙の裁方圖」通りに裁つのであるが、(1)から(5)までは上着で(6)(7)はズボンの型紙である。

▲前身頃……紙を巾七寸、丈一尺二寸三分に切つて擴げ、衿肩明二寸九分を、顎剣一寸三分下りに



巾四分を除き、斜線を引いて、衿肩止りから五分入りに三分五厘の割で落す。

肩は八分下りの斜に巾二寸八分、袖附は四寸四分下りに巾四分を除いて、肩から斜線をひき、三等分して八分、一寸一分と割り、脇は裾口で六分上げて斜に落し、裾口は恰好よく膨みをつけ胸辯を五寸二分下りの斜にしるして裁つ。

そして胸の折返り線を、肩から衿肩明の方へ二分入れて、胸辯止りへ斜にしるしておき、見返布の位置を裾口から胸辯止りまでは巾二寸五分、上方は肩で巾一寸として少々曲線に割り、

▲後身頃……紙を巾一尺〇六分、丈一尺一寸七分に切つて巾真二つに折り、輪の上方で衿肩明一寸一分を背で二分に割り、肩は一寸三分下り

分、上方は肩で巾一寸として少々曲線に割り、

の斜に巾三寸、袖附は四寸三分下りに巾四分を除いて、肩から斜線を引き、真中で七分に切る。脇は斜に前脇丈と同寸にし、残りを裾口で切り上げて裁つ。

▲袖……紙を巾七寸八分、丈九寸四分に切つて擴げ、紙巾の中央を點線のやうに定めて、前と後とを圖のやうにしるす。

袖附を、前後とも二寸五分下りに中央から斜線を引いて、前側は一寸三分上りに七分の割と、山の方は一寸八分の真中で一分の膨みをつけ、後側は山の方から一寸下りに四分と、下方は真中で三分の膨みを各々つける。

袖口は、前口下で巾六分と丈二分五厘を除いて、中央(點線)で丈一分上りに斜線をひき、口下から一寸一分寄りに一分の割をつけ、後側は口下で巾六分と丈一分を除いて、巾の真中で恰好よく膨みをつける。袖下は、前後とも斜線をひき、前は真中で一分の割、後は真中で二分の膨みをつけて、各々裁つ。

▲衿……紙を巾三寸、丈七寸六分に切つて、巾も丈も真二つに折り、圖の下方を衿附側として、輪から一寸五分を眞直、先で七分を除いて斜線を引き、真中で二分の膨みをつける。衿先の巾は、二

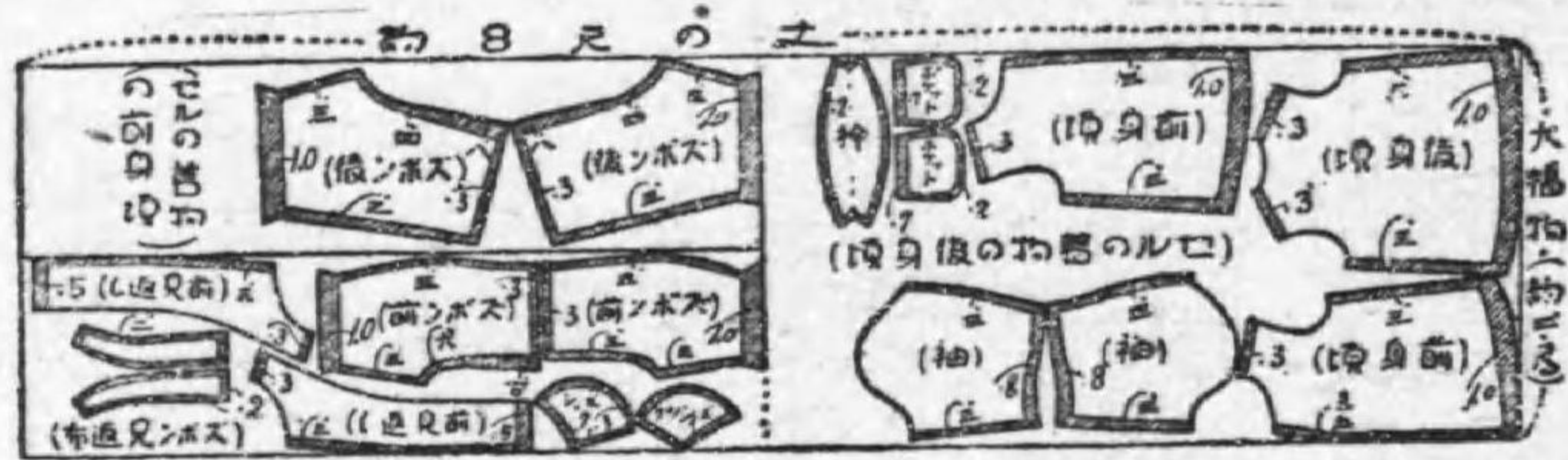
分を除いて斜に落すのである。

▲ボケット……紙を巾三寸、丈二寸四分に切つて、底の兩隅を三分の丸味に落す。

▲ズボン前……紙を巾五寸九分、丈九寸八分に切つて擴げ、股下を裾口で巾一寸二分除いて四寸上りに斜線を引き、真中で一分の割に落す。股上は上方で巾一寸二分を除いて三寸五分を眞直にし、股止りへ斜線を引いて中央四分の割をつけ、腰巾四寸二分、脇は上方で丈一寸を眞直に、紙丈を上方で三寸、下方で三寸八分とし、おいて、裾口で巾四分と丈三分を除いて太線のやうにしるす。裾口は斜線をひいて、真中で一分の割をつけて裁つ。そして見返布の位置を上方で巾一寸、股止りから五分上に巾五分をとつて、點線のやうにしるし、標通りに見返布の型紙を別に裁つておくのである。

▲ズボン後……紙を巾七寸七分、丈一尺一寸一分に切つて擴げ、股下を前と同じにしるし、腰を脇の上端で、一寸二分下げて巾四寸九分の斜にしるし、股上の斜線をひいて、二寸上りに九分の割で落す。裾口は、脇で巾一寸二分と丈四分を除いて斜線をひき、真中で二分の割をつけ、脇は斜に落す。シツクは點線のやうに股止りを中心として、巾も丈も二寸六分づゝにぐるつとしるし、別に型

(方ち裁の布用)



下前の下方六分に上方一寸を、圖のやうにつけ、上前の股上は三分をつける。残りで上着の前見返布を裾口五分、肩と打合せに三分の縫代をつけて二枚と、ズボンのシツク二枚を、周圍に三分の縫代をつけ、前股上の見返布を周圍に二分の縫代をつけて二枚を裁ち、圖のほかに、ズボンのバンド通しの紐を、巾七八分、丈二寸位に五本を裁つておく。

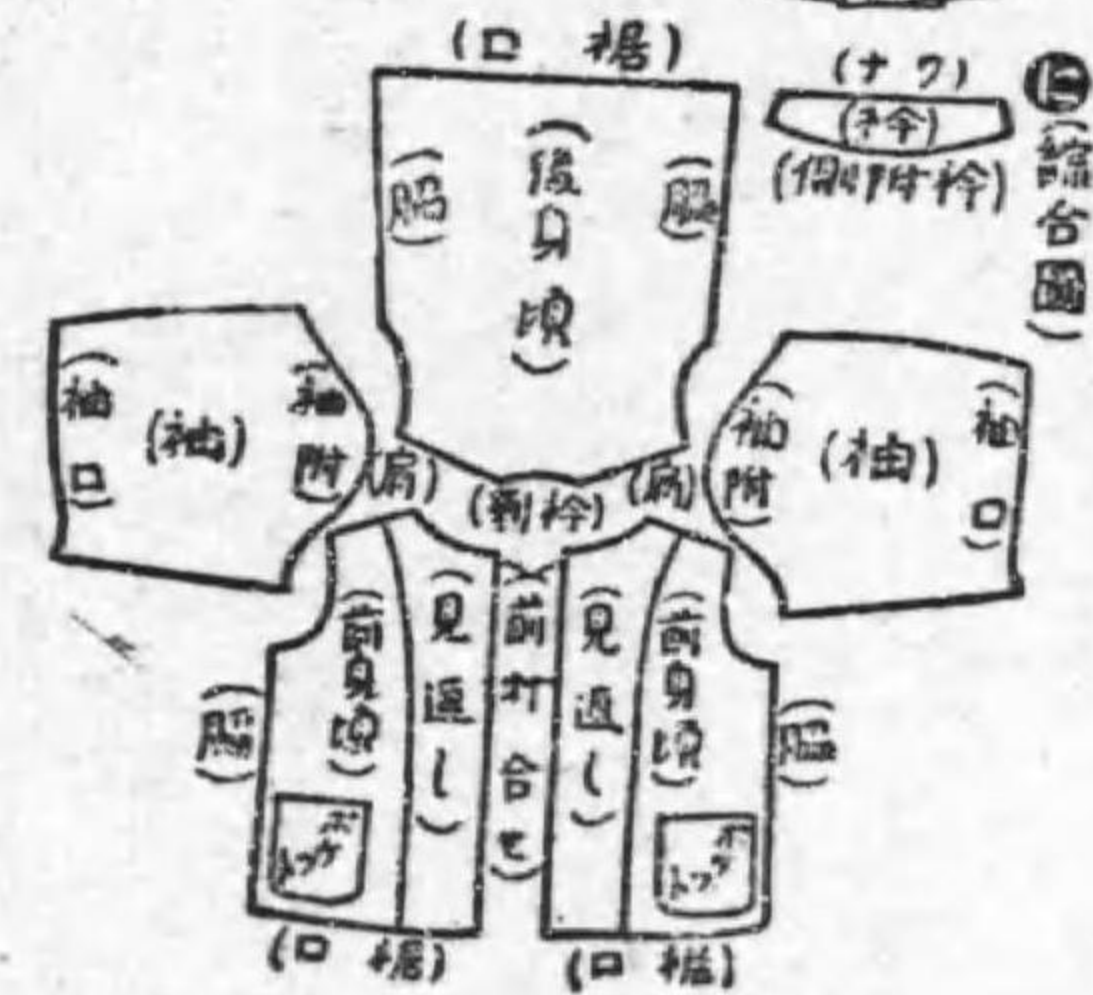
▲縫方 上着……袖は袖下を縫ひ合せて前側へ折り、縫代を二枚一緒にかゞつておき、袖口を二分に六分の三つ折に、裏側へ折つてまつるのである。「出來上り圖」参照のこと。袖下で後側の長い分は肱でつまむと恰好がよい。

身頃は前身の見返布を、兩前打合せの裏面へ毛抜き合せて縫ひ合せて肩と脇を左右とも縫つて後身側へ折り（肩は後の廣い分で恰好よく膨みがつく）縫代を二枚一緒にかゞる。

次に衿を巾二つに折り、兩衿先を毛抜き合せて縫ひ合せて返し、身頃

縫代をつける。

ズボンは、前も後も二枚づつを、裾口一寸脇と腰と股下に三分、股上は後の下方四分に上方八分



紙を裁つておく。

▲用布の裁方 「用布の裁方圖」のごとく、これはセルの大巾物單衣の身頃を一枚に擴げて、型紙をのせ、縫代をつけて裁ち合せたものであるが、用布が違つてもやはり、この要領で裁つのである。

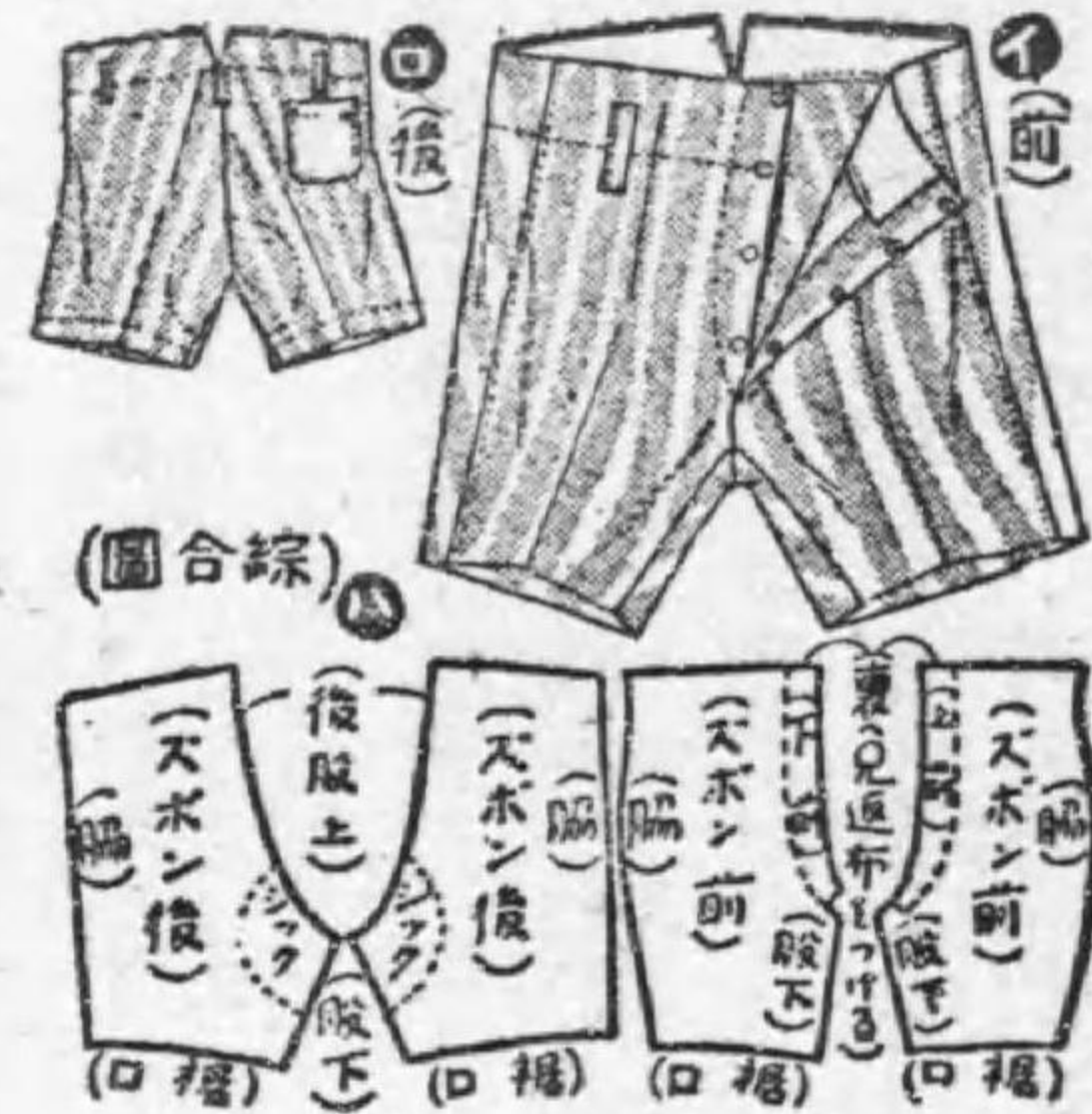
身頃は後一枚に前二枚を、縫代は肩と脇と前身打合せに三分、裾口一寸とつけ、袖は二枚を口八分、袖下三分をつけ、衿は一枚に擴げて周圍に二分の縫代をつけ、ポケットは二枚を口七分、その他二分の

の衿附へ裏衿側の附を合せて縫ひ（衿先の形は（イ）（ロ）の圖を見よ）表衿附を衿先の方から見返布と縫ひ合せて割り、その奥の三つ衿の分は、衿附の縫目へ折つてまつりつける。裾口を折り上げてまつり、見返布の裾口を毛抜合せに縫ひ合せて表に返し、見返布の奥をまつり紵ける。袖附は袖下と脇の縫目を合せて、二分の縫代で縫ひ、袖側へ折つて、縫代を脇と同じにかゝつておく。

ポケットは、口を裏側へ二分に五分の三つ折紵にして周囲を折り伏せ、兩前とも裾口から三寸四分五分上げて脇から六七分入りに口を据え、飾りミシンをかけるか、しつかりとまつるのである。

そして、衿を後で縁から中九分、前は型紙のしるし通りに折り返して、前打合せを二寸五分ほど重ね、（左が上前）大きい方の釦を上前の折止りと、一寸八九方下りに一寸七八分を開けて、四箇をダブルにつけ、重なりは（ハ）の圖のやうに、三組のスナップをつけて掛け合せる。袖口につける小さい方の釦は、袖下の縫目から後側へ二寸寄せて、袖口から一寸入りに、恰好を見て二箇づゝをつける。

▲ズボン……「出来上り圖」を参照）まづ前股上の下方を一寸残して、上方へ左右とも見返布を、裏側へ毛抜合せにつけ、残した一寸と、後股上とを各々割縫にするのであるが、後は上方の一寸を



縫ひ残して、圖のやうに割つておくと、着工合がよろしいのである。次に、脇を縫つて前側へ折り、股下を左右つゞけて、布を伸し加減に縫つて割り、シツクの股の上下を割縫にして、裏側から型紙の位置に當て、周囲をまつり紵ける。

裾口は二分に八分の三つ折紵にし、腰廻りへ別布の裏を毛抜合せにぐるつとつけて、バンド通しの紐を細く紵けて作り。

(イ)(ロ)の圖を参照して、腰廻りへ五本とも縫ひつけ、穿いた時には皮バンドでも通すのである。

前股上の明は、型紙の股上線通りに重ねて、四組のスナップを（イ）圖のやうにつけて掛け合せる以上で、一揃が出来上つた。例のやうにアイロンをかけて仕上げをするのである。尚ほズボンには、上着よりも少々小さいポケットを作つて、右腰へ（ロ）圖のやうにつけてもいゝであらう。

新案の優美な部屋着 セルの和服が、派手になつてしまつて着られないので、何か好もしいものに仕立替へてみる。次のやうな新案の部屋着など、なか／＼重寶でもあり着心持ちもよい。

もとく和服の改造のことであるから、生地にかんりの無駄が出る。もし、之を洋服地に求めるとしたら、丈にもよるが、非常に長くしない限り、ニヤール前後で出来る。日本人は、汚い着物のことを、よく一口に寝衣のやうな着物だといふが、外人は皆その時々を生活を美化して、例へ他人が見ないものでも、自分自身を楽しませるために、寝衣なども美しいものを使ふのである。この部屋着は、一寸起きた時とか、化粧をするときなど、寝衣の上に着るものである。であるから氣候によつては、服地の絹物で作つてもよいが、美しい和服の模様物では、型がスポーツ過ぎるから、その時はボタンをなくして、襟をへちま型にして、帯も巾を広く、前で結ぶやうにする。

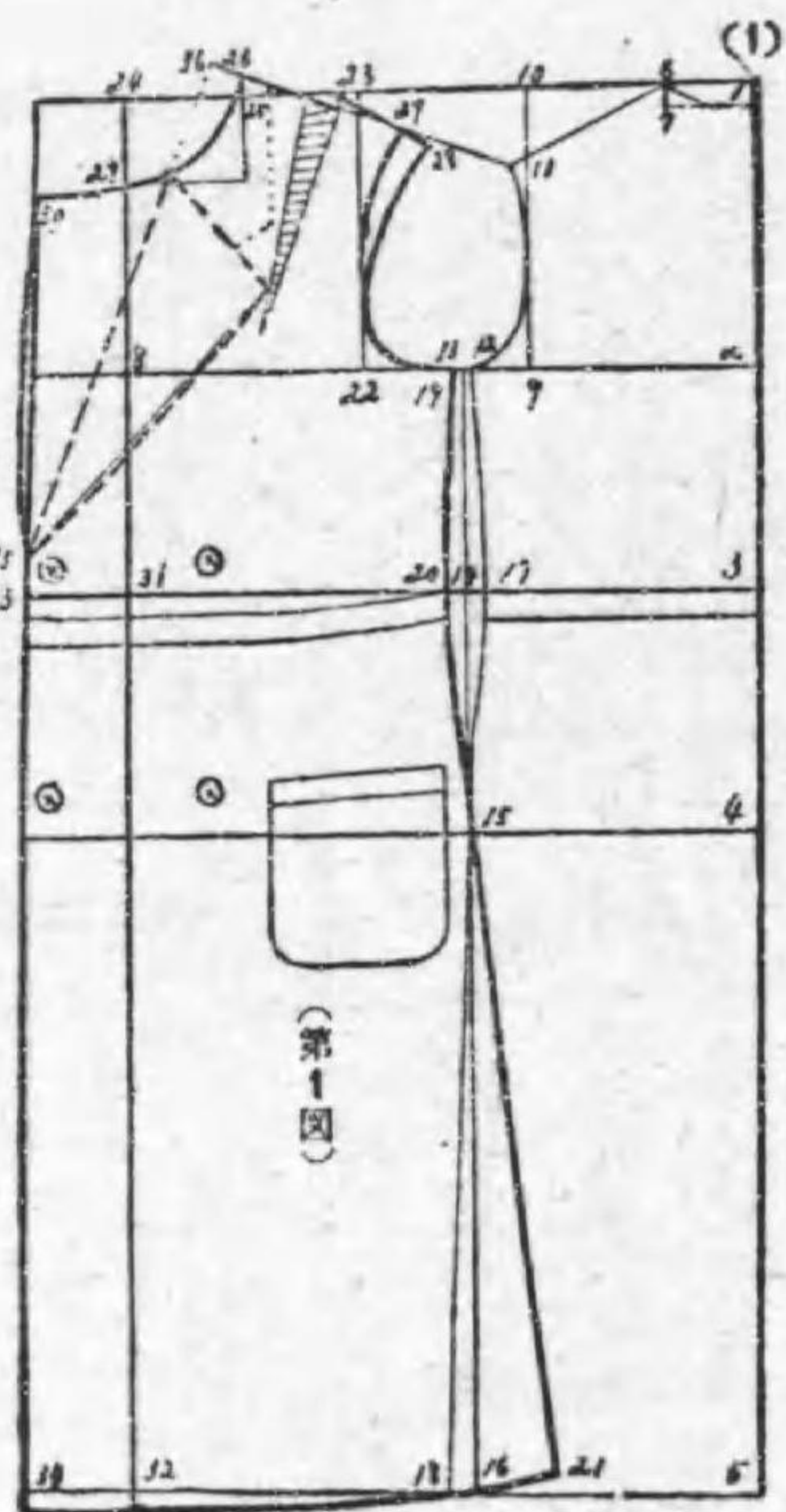
▲作り方 圖の寸法により、作るのであるが、左に簡單に説明する。

上胴：三二吋、背丈：一四吋、下胴：二六吋、腰丈：二二吋、腰圍：三六吋、袖丈：二二吋、總丈：四〇吋。

一、後身頃作圖(1圖参照)

1 起點で縦と左へ直角線を引く。

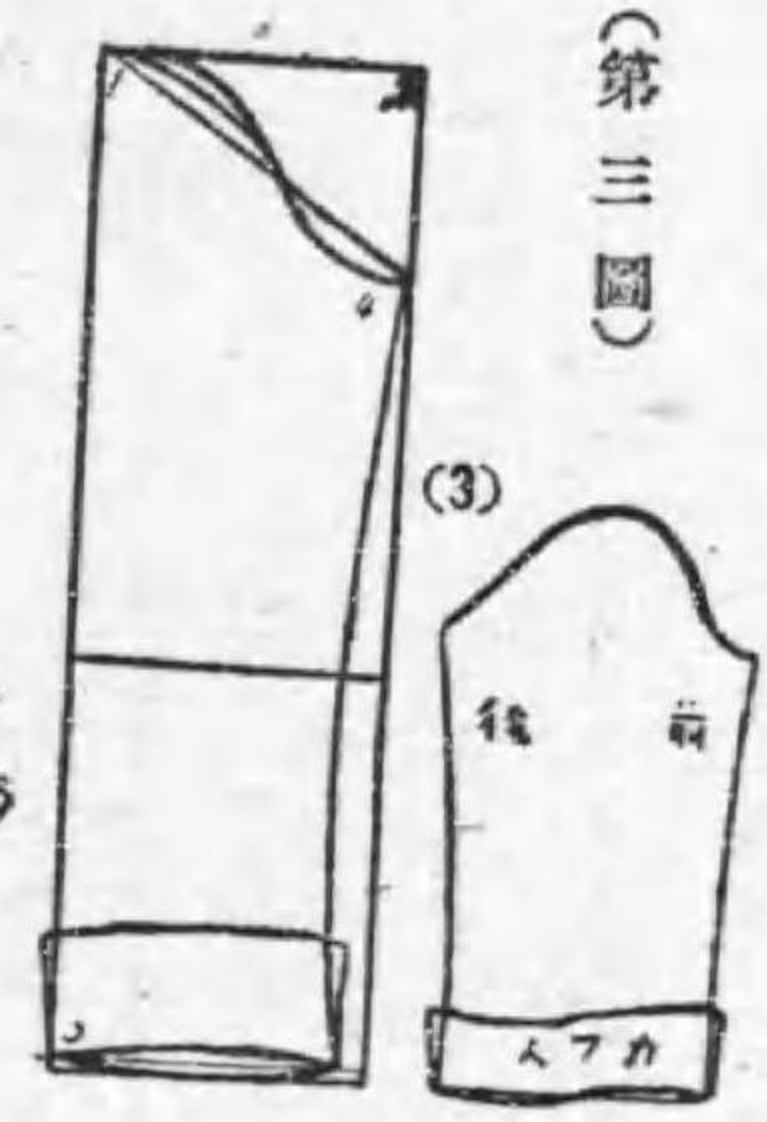
(第一圖)



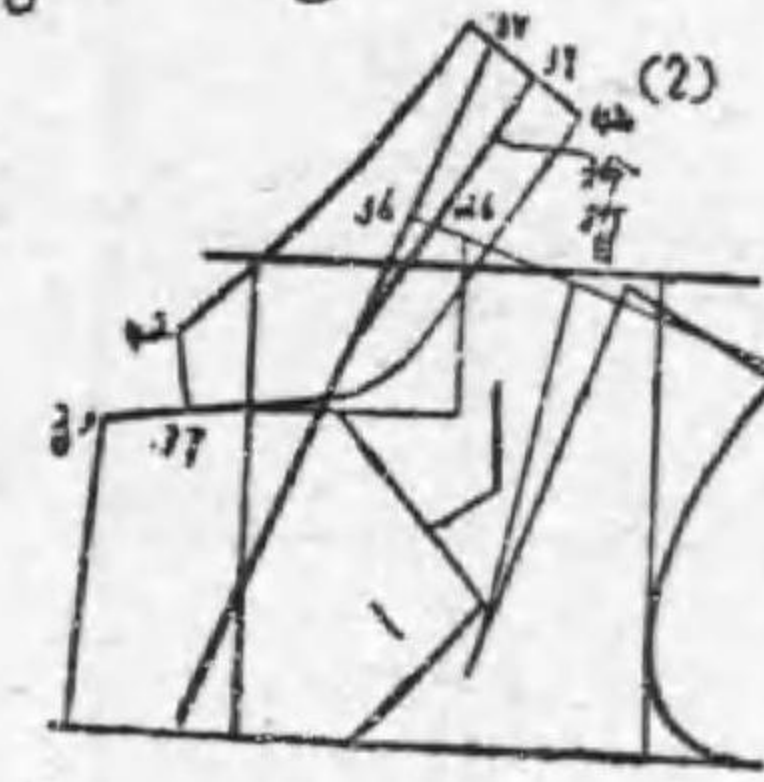
2 8 は一八吋半(半胸圍に二吋半のゆとり)
 2 9 は六吋四分の三。9より直角線を立てる。
 10 11 は吋。11 6吋を結び11の左へ四分の一時。
 9 12 は二吋。後袖割線を引く。
 12 13 は四分の一時。13より直角線を下し、14 15 16を標す。

1 2 は八吋。
 1 3 は一四吋半(背丈に衿割の深さを加ふ)
 1 4 は二二吋半(腰丈に半吋)
 1 5 は四〇吋半(總丈に半吋)
 各點より左へ直角線。
 1 6 は二吋四分の三。
 6 7 は半吋(圖のやうに衿割線を引く)

17 14 は四分の三吋。18 16 も同様。後身頃側線を仕上ぐ。
二、前身頃作圖(1圖参照)



(第三圖)



(第二圖)

29 24 は二吋半。

19 18 は四分の一吋。20 14 は四分の三吋。
21 16 は二吋四分の三(これ以上多くても宜し)
前身頃側線を仕上ぐ。但し12 18間と19 21間は同寸のこと
22 8 は七吋。22 より直角線を立てる。
8 の上下に直角線をひく。25 は23 24の中央。
26 20 は半吋。26 と11の左四分の一吋と結ぶ。
27 26 は後肩の6 11に四分の一吋加へたのと同じ。前身袖
割を引く。圖のやうに前の肩の途中で一時の開きにして、
三角形に胸の張りを出すため、くせを取る。28 27は一吋
でくせを取り去るだけ、袖割を引き直す。

30 29 は二吋四分の三で、30 26間を、圖のやうに引く。31 33 は三吋。32 34 は三吋。
35 33 は一時或は一時半。35 34間を結ぶ。
30 35間も結び、圖のやうに外に張らせて仕上ぐ。ボタンの間隔は六吋四分の三或は七吋程。
36 26間は一時。36 35を結び、衿の型を見るため左右均等に、身頃の上に折つた處を描き、各自好
みの型に描き直す。ポケットの位置は、流行によつて上り氣味。型はお好み。外のポケットの方が
加工も樂でよいやうである。ボタン穴は、玉縁穴或ひは手がかり。ボタンは貝が宜しい。

三、上衿作圖(2圖参照)

圖のやうに、下衿の折目の線を36の上延す。
37 30 は一時半。
38 36 は後身頃の衿割の丸い部分の長さに同じ。
39 32 は一時で38を此處に移す。
40 39 は一時で衿腰の高さ。41 39 は一時半。
42 37 は一時四分の一。41 42間を結ぶ。

これは脊廣服の上衿を参考にせよ。

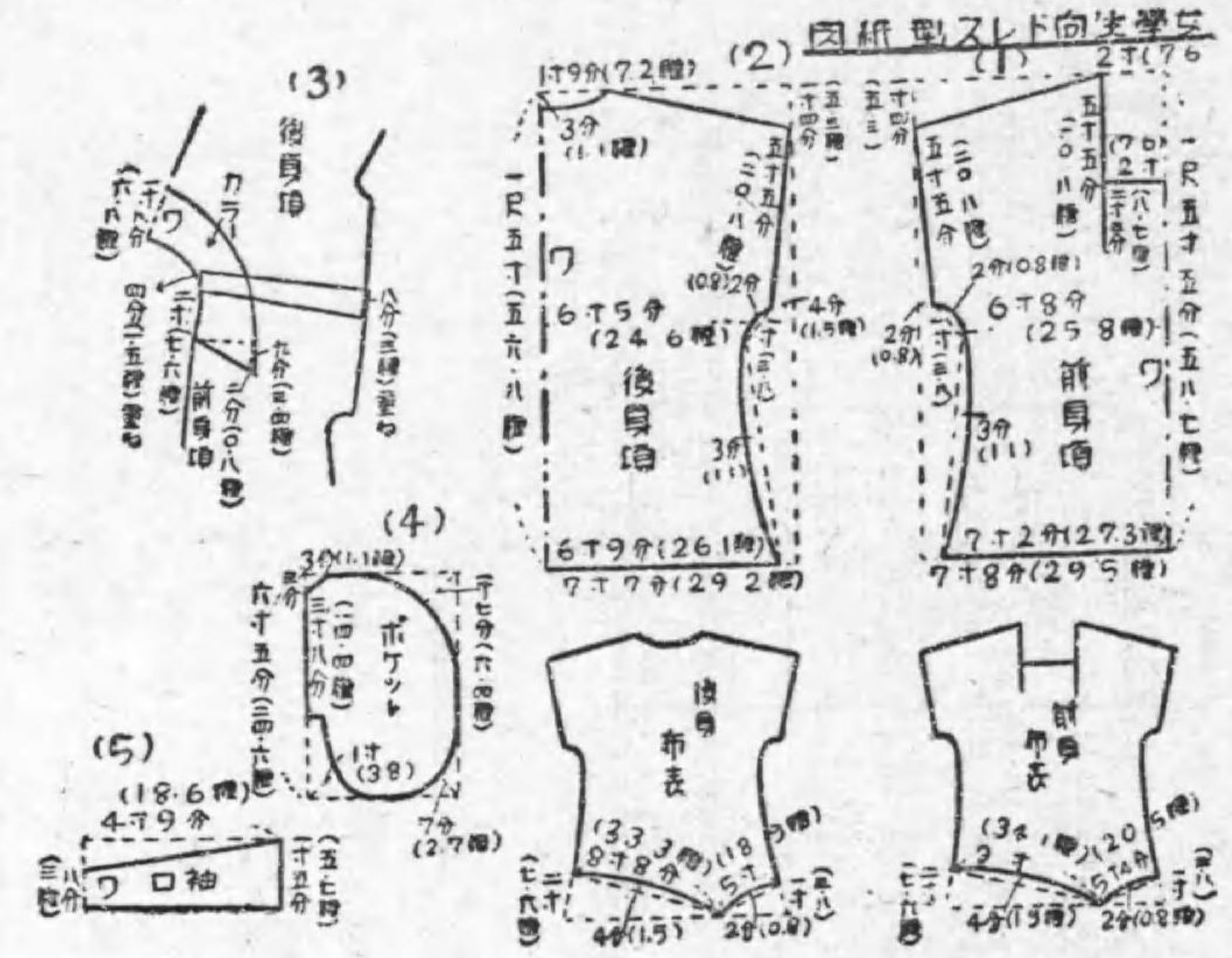
四、袖作圖 (3 圖参照)

- 1 起點。1 2 は六吋四分の三。
- 1 3 は袖山丈で二吋。4 2 は四吋半。
- 1 4 を結び圖のやうに、袖の山と谷の曲線を引く。(圖参照)
- 3 より直角線を下す。袖口は任意であるが、圖は六吋。袖先と袖下の線を仕上げる。
- カフスは圖のやうに、袖口より大きく、曲線なりとする。

(注意) この部屋着は裏無しである。之を仕立てるには生地にも依るが、前身の耳へ、キャラコのテープを入れて、見返しを縫ふ時、一緒に縫ひ込む。芯は一切要らない。従つて男物のやうに上衿も刺さないが、返りをよくするためゆるみの注意を要する。

ベルトは共地で作くり、ボタンがけでも、結んで宜しいが、バックルをつけてはいけない。

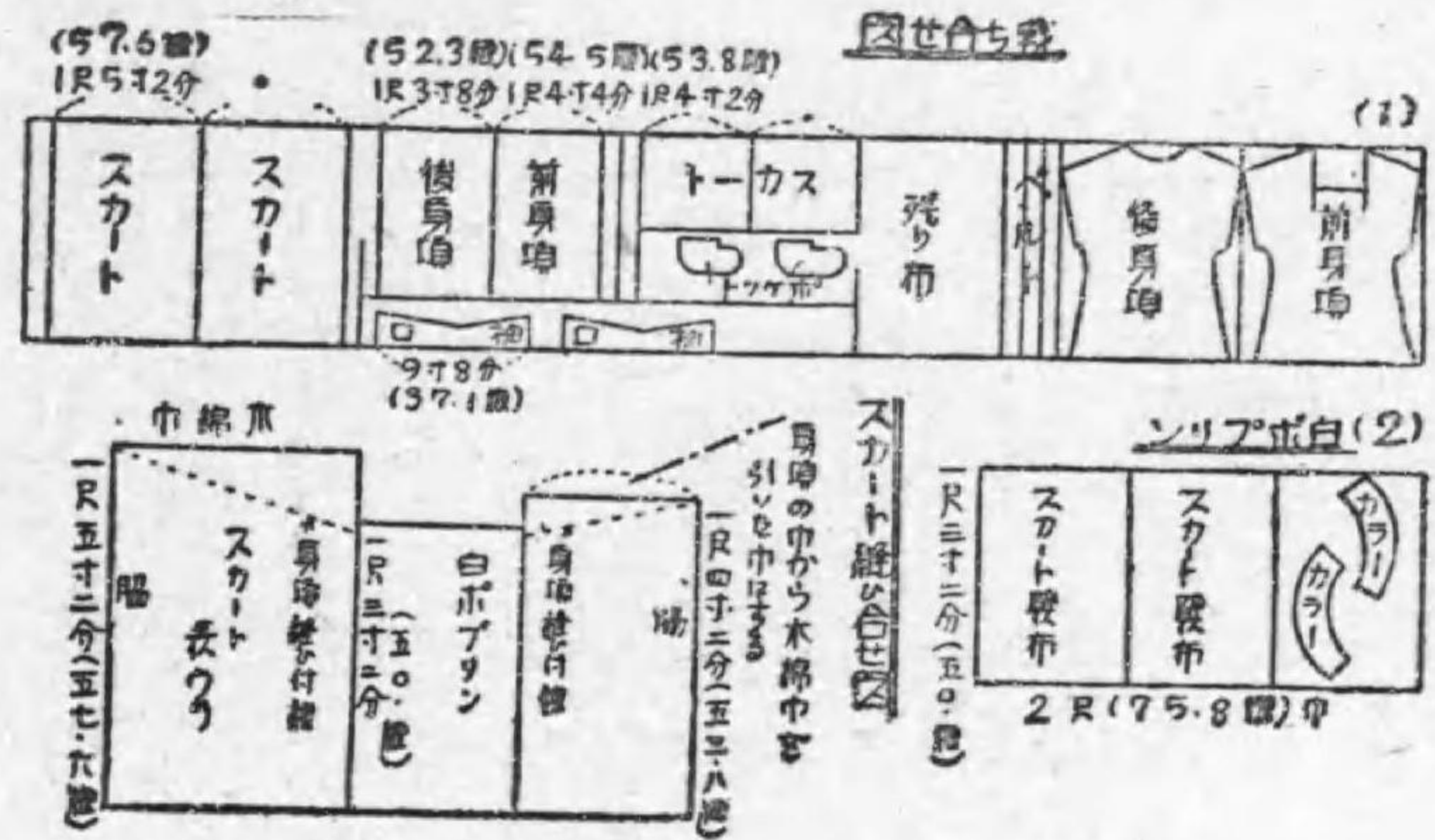
女學生向のドレス 子供が大きくなつたので、少々小さくなつた縦縞木綿縮の單衣を、十七、八歳位の寸法で、ドレスに改造して見る。



衿とスカートに、白ポプリンを用ひ、胸明袖口には白の斜布で玉縁をとり、仕立て上げてみると、普段ちよつとした外出着にも、充分間に合ふやうなものとなる。

材料としては、四つ身單衣の他に、飾釦十二個、白ポプリン二尺(七五、八厘)巾で、丈は一尺三寸二分(五〇厘)、白斜布七尺五寸(二八四、一厘)だけ用意する。

▲裁ち方 型紙——の裁ち方は、紙を二重にして前後身頃を圖の寸法通りに裁ち、更に裁つた型紙を開いて、下部を圖のやうに裁つのである。次にカラーは、前後の型紙の肩と肩を衿明で、四分(一、五厘)袖の方で八分(三厘)重ねて、好み



の中にし、先の方で丈九分(三、四種)巾二分(〇、八種)出し先を尖らせる。(3圖を見よ)

布の裁ち方——は、四つ身の後身頃の片身を、丈を二つに裁ち、これと片袖を縮なりに、縦にあはせて割接ぎにし、同じものを二枚つくる。(上身頃は横縮となる)

スカートは四つ身の前身頃を、丈を二つに裁ち切つたものと、四つ身の後身頃から、ポケットを二枚とり、後を二つ割にしたものと、大小取り交せて、二枚は後スカートに、二枚は前スカートにする。

そしてその間に裏布として、白ボブリンを入れる。(白キヤラコで結構である) 四つ身の衿からは、袖口布をとる。(裁合せ圖参照)

白ボブリンは、巾を三等分して、内二枚をスカート裏布に

し、一枚からは衿をとる。

スカートは、別に型紙はとらず、直ぐにスカート縫合せ圖のやうに、前後とも三枚づゝに接ぎ合せる。(着た時、前は左身に、後は右身に襞がくるやうに接ぐ)

白の襞布は、仕立てると襞の中にかくれてしまふ。

縫ひ方 衿——を表裏合せて、衿付の分だけのぞき、他の三方を縫ひ合せ、表に返しておく。

前後両肩——をあはせて、袋縫にし折は前にかへす。

衿付——は衿の裏を、表身頃衿ぐりにあて、その上に斜布をのせて、四枚一緒にぬひ、斜布で縫代をついでまつる。

釦掛——は斜布を細く切り、コートの共布を紮ける時のやうに、より紮げにし、長さ八分(三種)位のものを、六本作り「縫方1圖」のやうに、腮下布の左右に、しつかりと綴ぢつける。

これと向きあつた、釦をつける所の裏側には、細い力布を二重にして、裏から綴ぢつけておく。

衿元——から衿元まで、腮下布をぐるつとまはつて、玉縁をとる。

前後兩脇——を合はせて、袋縫にするのであるが、このとき、前丈は後丈より少し長くなつてゐ

るから、袖付から一寸(三、八種)下つた所に襷を取り、前身頃の胸に膨みをつけるのである。(右脇を縫ふ時、内ポケットを口だけあけて袋に縫ひ、兩脇に縫ひつける)

袖口布——は真直ぐの一方をのこして、他の三方に玉縁をとる。この時、上部の角(肩の方)が丸みにならないやうに、襷をとるのである。(2圖参照)

そして、残りの一方を身頃の袖付に合せ(輪の方を下に)斜布をのせて三枚一緒にぬひ、斜布で縫代を包む。(3圖参照)

スカート——は先に縫合せてあるから、襷布を全部中にして、つきあはせ襷をとり、前後兩脇を合せて、圓形に縫ひ合せる。

身頃とスカートの縫ひ合せ目——は、白の斜布を細く切り、二重に折つて身頃の下部に縫ひつけ、その下にスカート布をおいて、身頃下部の山形の下に、襷のあはせ目が行くやうに重ね、上からミシンをかけるか、細かに縫ひつけるかする。(4圖参照)

丈——をきめ、裾を三つ折にする。

釦——を釦掛けの輪と見合つた所に、三個づつと(4圖)のやうに襷の上に、配置よく前身に三

個、後身に三個づつつけ、仕上げをするのである。

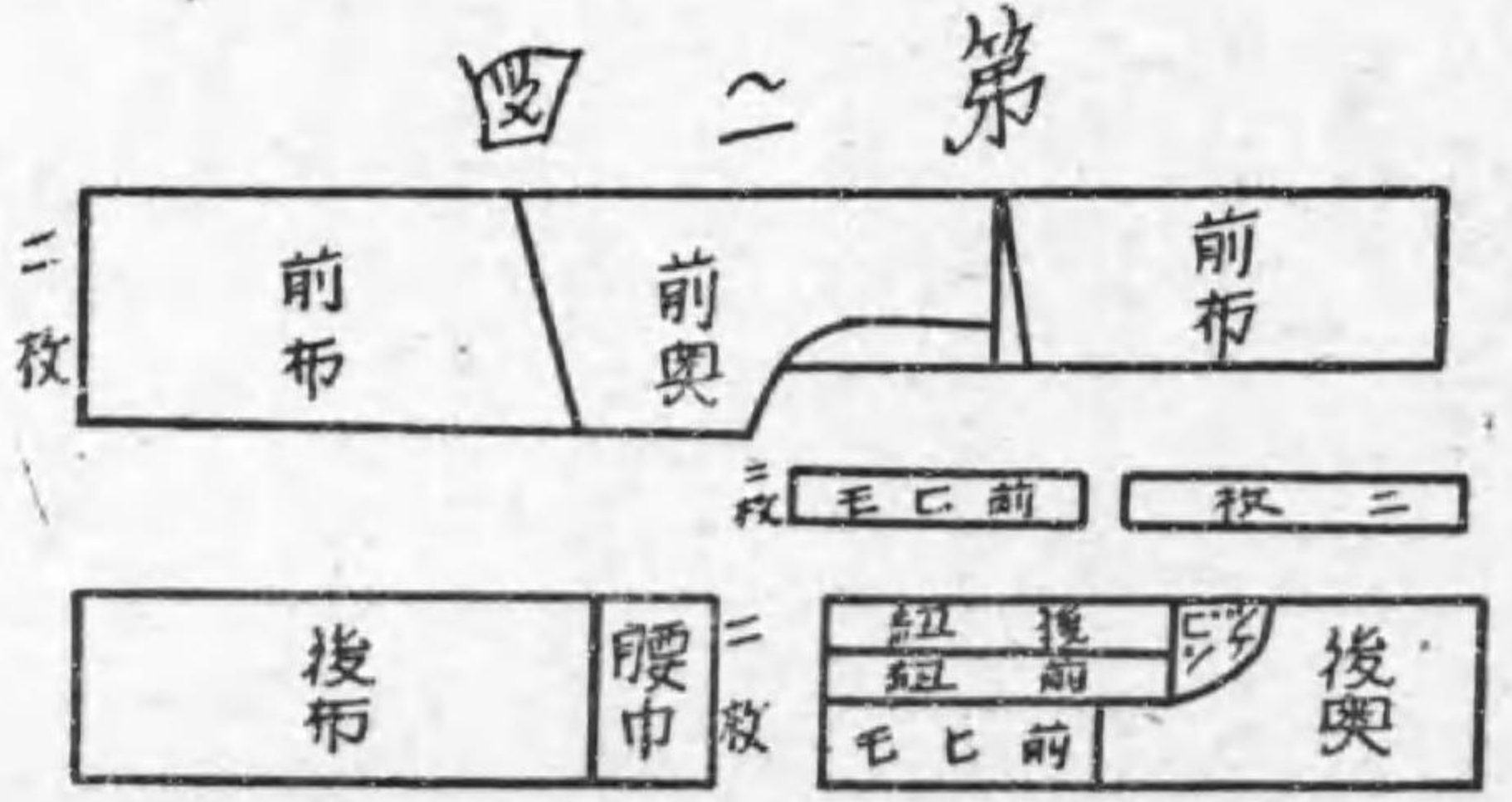
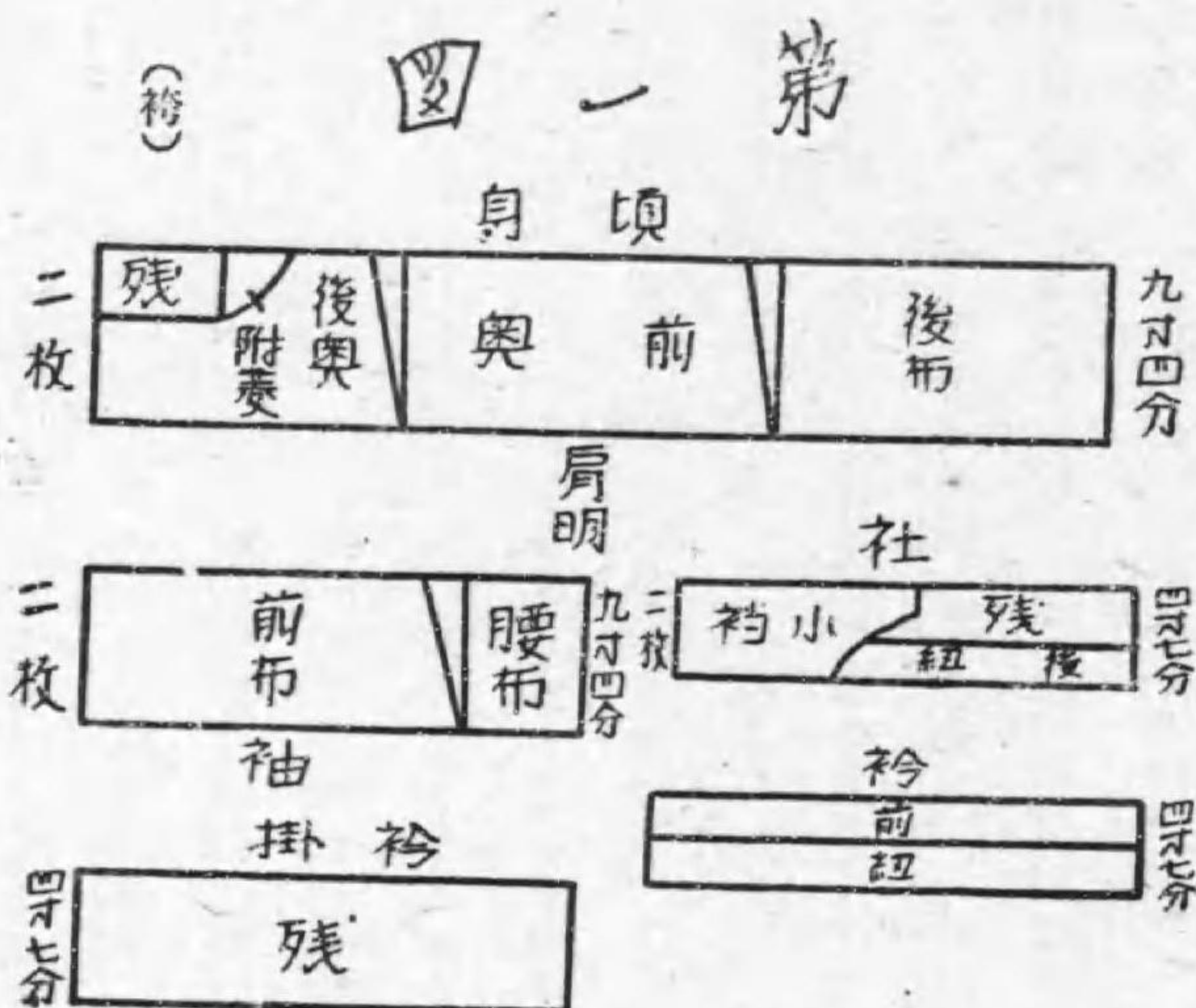
なほ、この出来上りには、ベルトを用ひなかつたが、好みによりつけても結構であると思ふ。

寝冷え知らず 寝冷え知らずにも澤山の形があつて、なか／＼形もよく又便利に出来てゐるのもあるが、こゝには簡単な、ほんの夜業にでも出来、實際の役にも立つ、簡便實用向きの物を説明しやう。

これは何によらず、有り合せの布で出来るが、こゝではお母様方の古浴衣の兩袖で拵へたものである。

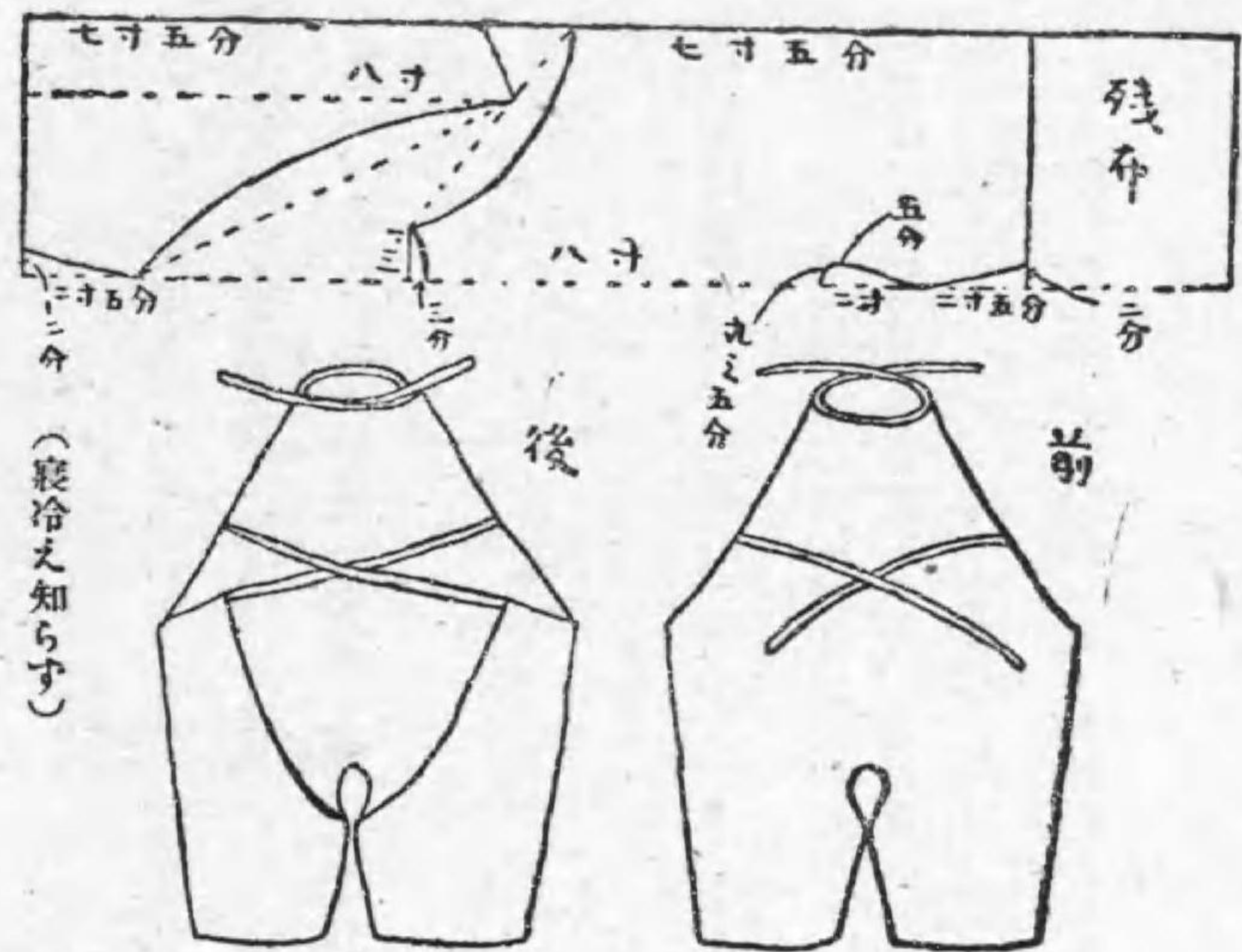
裁方は圖のやうに、兩裾の一尺七寸丈を二枚重ねてから、丈二つに折り、半巾の形にする。そして圖のやうに裁ち切ればいゝのである。

縫方は、裾を裏表縫合せておく。脇紐を襷の上に挟み、襷上の繰り及び裾の裏表を縫合せて、裏布の方へ折返す。次に身の裏表にて襷を挟み、襷の脇、股下を四つ縫にして、前明線落しの裏表を縫合せる。身の裏表を上まで縫合せて、衿紐付の處を縫ひ残し、そこから引返して衿紐をつけるのである。



幾度か洗ひ張りしてゐる中に使はれなくなるかうした袖等は、地を赤か淡紅色に染めて、白絞りにすると、女の子の帯として美しく可愛い。

晒布 色の褪せた浴衣、其他木綿着物を晒布にするには、先づよく布地の垢を洗ひ落とし、苛性曹達又は洗濯曹達を二匁と水四升の



袴 一般に着古しの着物と言つても、何でも彼でもよいといふ譯には無論行かぬが、布地の丈夫な縦縞のものか、セル地のものを袴に仕立てる事が出来る。着古しの事だから、裾とか膝とか或は衿や袖口等が傷んだり彼方此方に穴等明いてゐても綴りさへすれば一向差支へはない。その裁ち方は次の圖の通りである。

(第一圖) 本裁ちの着物にて大人物の乗馬袴の裁ち方。

(第二圖) 四つ身裁ちの筒袖着物にて小學生袴の裁ち方。

帯 夏襦袢の袖の白羽二重や白いメリンスはと角汚れが早いので、布地は傷まないのにも係らず

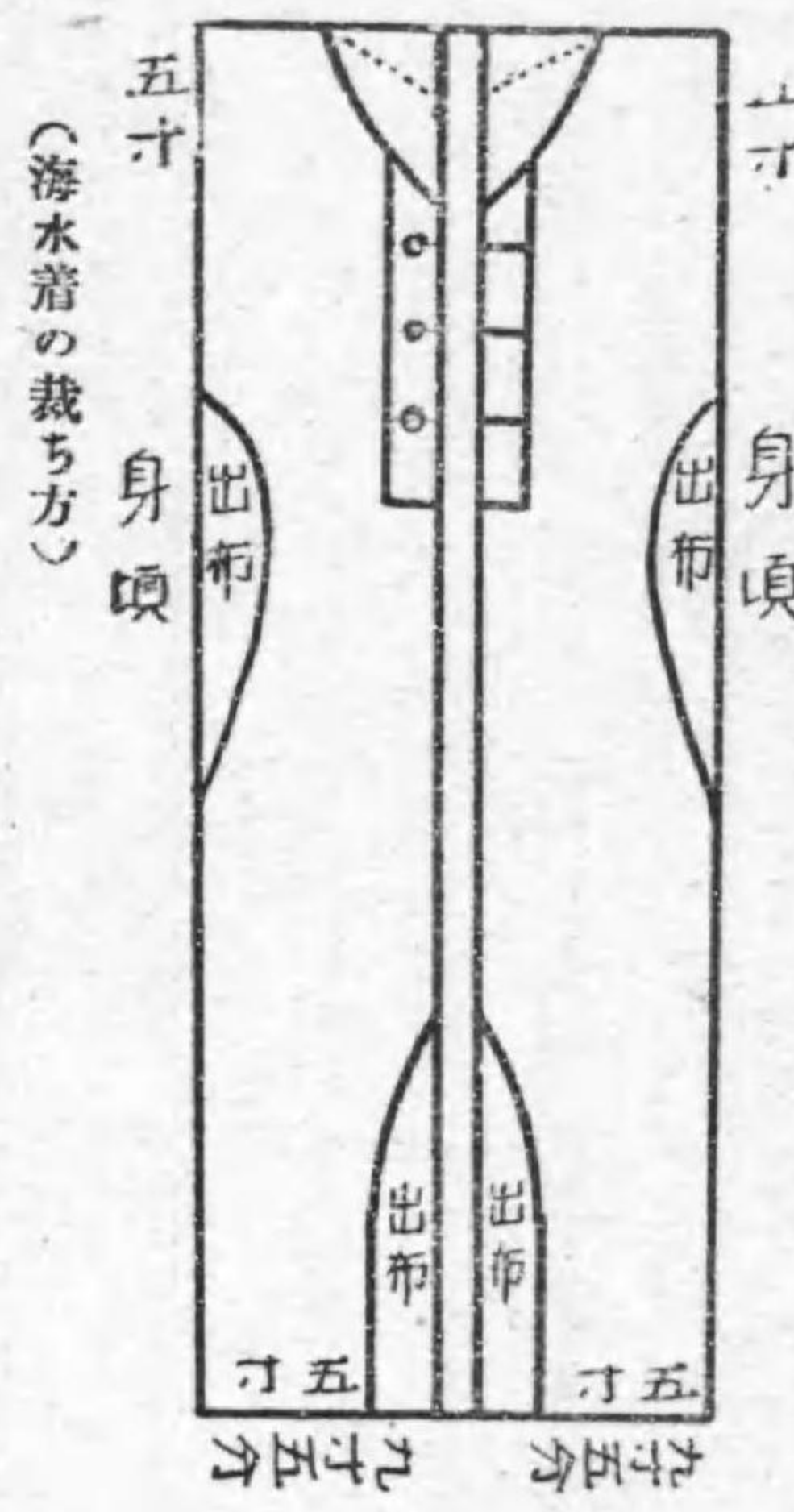
割合にして、凡そ十五分間煮るか、又は漂白粉五匁を白布に包み、之を少量の水に採み出したものを熱湯三升の中に入れ、同時に重炭酸曹達五匁程を加へ、白く泡立つのを度として前の熱い布を繰入れて、凡そ一二分間掻き混ぜ、白くなつたのを直ちに水洗ひして臭氣のなくなるまで濯ぐか、或は硫酸二匁を水一升の中に入れ、舐めて少し酸味のあるのを度として、この硫酸水に凡そ十分間漬けておいて、充分に酸液の去るまで水洗ひをする。木綿類は凡て酸類に弱いからである。かうすると、きれいな晒布となるが、もしまだ十分に眞白くならない時は、直接染料の青粉染をごく少し水に加へ、この水で濯げば眞白に見へる。かうしておく、何にでも使用出来る。尙漂白粉は地質を傷める恐れがあるから、その布地に應じて成可く少量を用ゐる様にせねばならぬ。

裏地 白地の浴衣は前に言つたやうに漂白して、糊染めで緋無地か花色又は藍色等好みの色に染めて冬物の胴裏や長襦袢の胴裏にする。又紺飛白等であまり傷まぬものは、そのまゝ胴裏に使ひ或は丈夫さうな所を取つて男の子の足袋にするがよい。

寝衣 とかく浴衣は何度となく洗濯をするので布地は丈夫でも色が褪せて見すばらしくなる。かういふのはよく洗つて寝衣にするがよい。寝衣なら色は褪せても別に醜くなく、却つて地が薄い

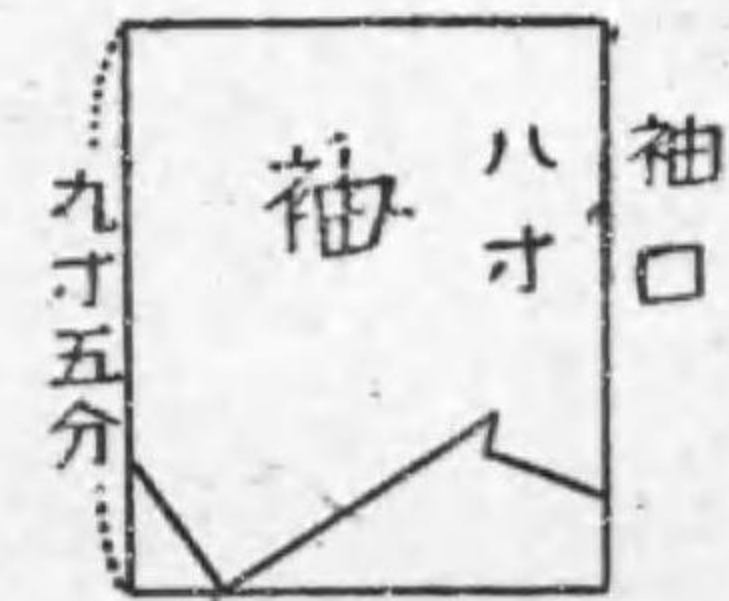
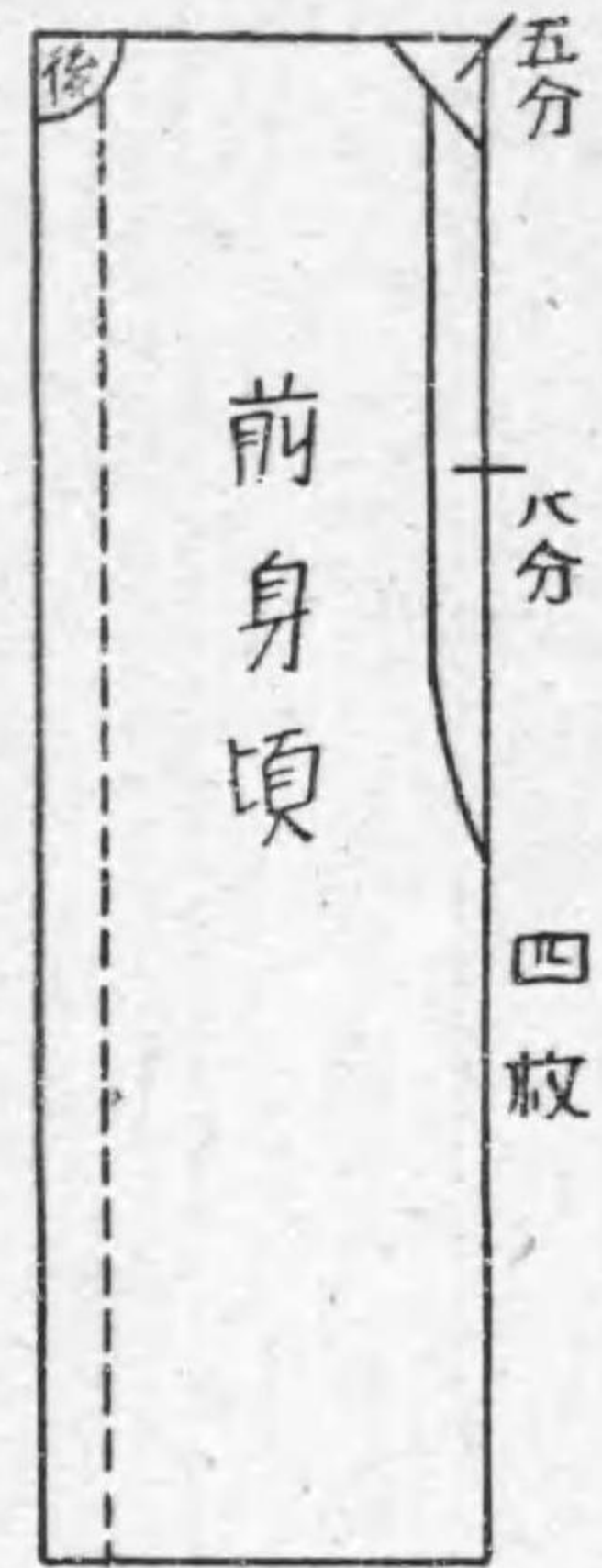
丈に着心地がよい。

染直し 前述の様な寝衣にでもよいやうな布地は、よく洗ひ、前の様に漂白して、反物の様に端縫ひをした上、絞り染めにするると全く別物のやうな新しい反物となつて再び着られる。絞り染めにするには浴衣をよく洗ひ、解いた反物の様に端縫ひをし、斜め袋に縫つて、それを捻りよせ、麻で荒く強く巻いて好きな色に染めると、面白い絞り染めが出来る。浴衣の絆げた布地の弱いのは、その儘使ひ途がないから、更紗屋へやつて、何か新しい型をおかせ、搔卷とか掛布圍の表とかに使へばよい。元來掛分圍の布地は弱くても一寸見のきれいな方がよい譯である。



布地の強いのは、布圍や座布圍の表皮に用ゐるがよい。

海水着 古浴衣の地質の丈夫なのは、海水着にしてもよい、その裁ち方は圖の如くで、背縫ひをし、股下を細かく縫ひ胸の衿下も縫ひ合せ、次に袖下も細かく



縫ひつめ、衿をつ
け、袖口、裾口等
を三つ折衿とし、
首廻りに共布で二
三分位の縁を取り

(掃除服の裁ち方)

釦の穴をかぎり、次に釦をつけるのである。

掃除服 古浴衣で掃除服を作るには、圖の如く裁ち、前身の中央を縫ひ、割つて堅く襪を掛けておき、肩を縫ひ、袖をつけ、裾の廻りをくけ、袖をつけ、首廻りに紐を兼ねた縁を取り、腰のあたりに左右紐をつける。袖口には内紐をつけて括るか、或はゴム紐を入れてもよい。

襦袢 古浴衣をよく洗つて解き皺を伸し、裁ち目を縫合せて輪として襦袢にする。大人ものなら左右の袖で二個、身頃で四個、襟衿の半幅物で、半幅のものが、衿で二個、襟で二個、都合十個の襦袢が出来る。もし染色のあるのが嫌だつたら、漂白粉で抜いて晒布にするがよい。その晒し方は、その染色によつて異なるが、大體木綿百匁につき十五匁乃至二十匁の漂白粉を水五升位の割合に

溶き、少しも固まらぬ様に注意してよく掻き混ぜ、重炭酸曹達を五匁乃至十匁許り入れよく溶きませ、その液に浸して一夜おく、もしそれでも抜けぬ時は少し熱を加へるがよい、又初め漂白粉を溶く水を暖めておくと尚よい、尙カルキ即ち漂白粉の臭ひの取れない時は、次亞硫酸曹達を少し溶いて濯げば臭気はすぐぬける。

蒲團皮 古單衣の尻の邊の損じて寢巻用にも出来ぬものは、之を解いて敷蒲團等を作るがよい。殊に白地の單衣をよく洗濯して敷蒲團等にすると此上なし上等のものになる。

風呂敷 最早抜き染めにしてもそれ程價値のないものは、單衣二枚分位を大きな四角につき合せて、夜具を包む風呂敷にする。

帶芯 古浴衣で少し弱つたと思はれる所は、極く強い糊で張つて二重にし、帶芯としてもよい

襟芯 古浴衣の古く傷んだのは弱くて、雑巾にもならぬが、襟襷には一番適してゐる。併し襟裏丈は不思議に傷まぬから之丈は取つておいて男物の裏襟に使ふがよい。又、表襟や其他の丈夫な所は皆取つておいて、羽織の襟芯とか帶芯に使へる。

割烹服 紺飛白や又あまり白つほくない單衣は仕立直し、袖は元祿又は改良袖とし襟は被布の様

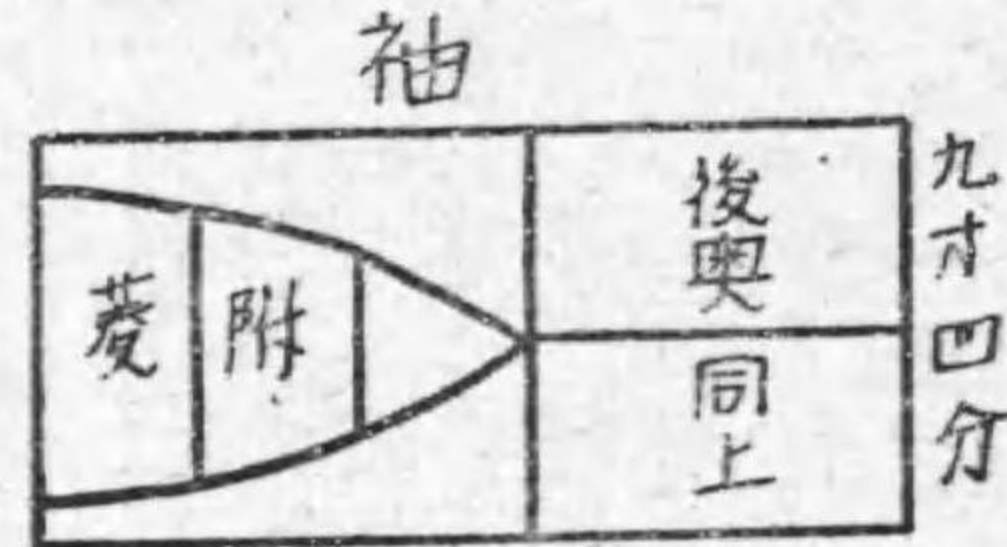
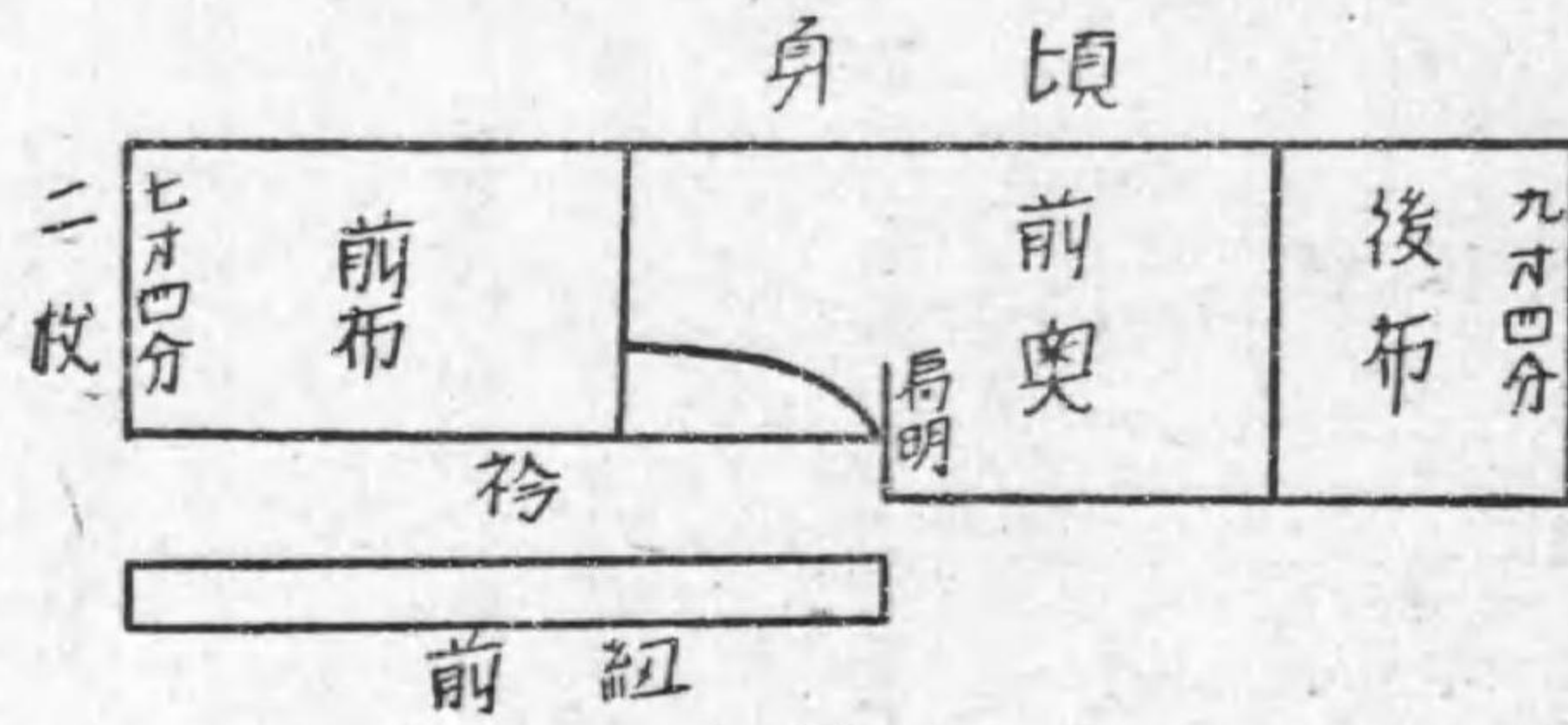
に前のよく合ふやうに縫ひ、臺所で立働く時の割烹服に拵へる。
糠袋 古浴衣の中でも、帷子の古いのは糠袋にすると、肌觸りもよく、糠も程よく出るから、大へん使ひ心地がいゝ。

名古屋帯 派手になつて、もう着られなくなつた模様の浴衣を芯に、まはりを白の紗でくるんで、中の模様が見えるやうに工夫して、名古屋帯を作ることが出来る。

作り方といつても、これは至つて簡單で、浴衣を帯の長さだけに、一枚接ぎ合せ、別に後のお太鼓になる分だけの浴衣布を、もう一枚用意し、芯布を中に入れ、浴衣布でくるみ、まはりを白の紗またはボイルなどで包む。

これは名古屋帯であるから、お太鼓のところだけ、浴衣布を一枚にして、その中に芯布を挟む。かうして作り上げたものは、なんとも言へぬ雅趣のあるものである。名古屋帯の作り方は、これまで誰方も知つてゐる筈であるから、茲には省略することとする。

古羽織の利用法

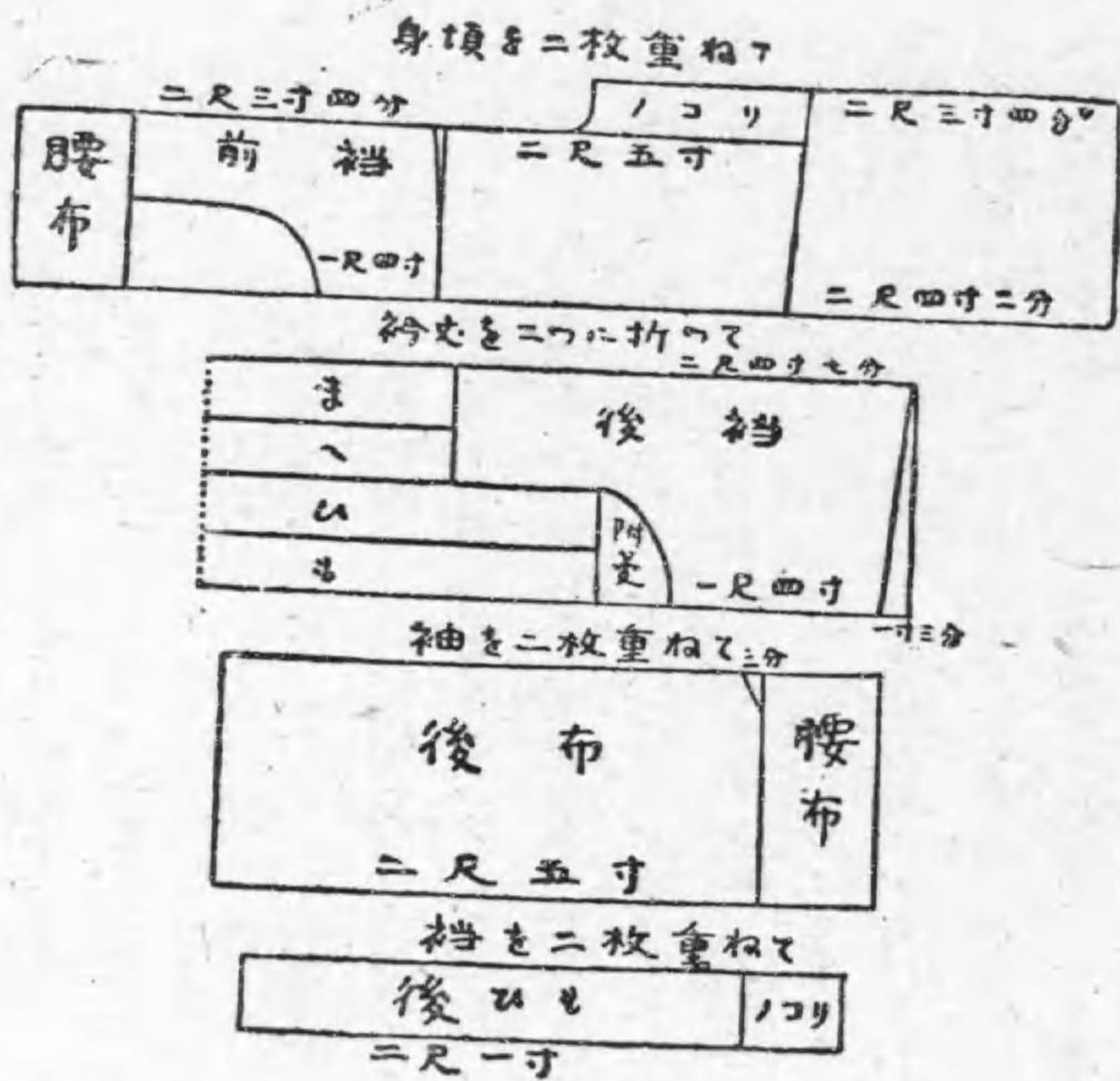


(袴の裁ち方)



着物 着古しの羽織は大抵肩が焼けたり、襟が痛んだり、裾が破れたりする。そこでかういふのは羽織下に着る綿入れか袴に仕立直すのが最も都合がよく、その上割合に長く着られる。――その位立直し方は、先づ襟を袖に使ひ、裾の破れは共布で綴る。

次に片袖を衿とし、片袖を衿と共衿とに使ふと、その一枚の中心で一切融通がつく。これは勿論羽織下に着るのであるから、他行にしても決して差支へはない。
袴 縦縞の地の厚い羽織は結構袴に仕立てられる。その仕立方は、兩袖で袴の後布二枚と腰布二枚とを取り、身頃で前布四



同 同 前 後 切 乘 襦 付 付 同 腰 後
 紐 紐 紐 上 の 菱 菱 高 板 重
 巾 巾 丈 丈 げ 馬 高 高 巾 さ 巾 ね

八 八 八五〇 二二〇 一六〇 九〇 二二〇 一三 一三三 一三三 六五 四八 下上 尺寸分

▲仕立で上げ寸法

一枚と前奥二枚とを取り、襟で後奥二枚と前紐、附菱を取り、襦布で後紐を取るものであるが、もし襦布の短い時には、前紐に取り替へ、襟の布の中から後紐二本を取ると、窮屈でない袴が出来る。

布の取り方は圖を参考にされたい。

乗馬袴 羽織の後丈三尺五寸、前丈四尺三寸、これを二枚重ねて圖のやうに、前襦布二尺三寸四分と前脇布の二尺五寸と、前奥布の二尺三寸四分とを裁つ。衿丈を二つに折つて、後の襦布の二尺四寸七分と残り布を前紐、後襦の線りから付菱を取る。袖丈を二枚重ねて、後布の二尺五寸と、腰布とをとり、襦二枚を後紐にする。

前	前	後	紐		
腰	寄	巾	巾	下	
巾	襦	巾	巾	巾	
					尺寸分
					二二〇
					八〇
					一五八
					八〇
					下上
					八〇
					相
					脇
					襦
					襦
					巾
					巾
					巾
					引
					尺寸分
					一五〇
					四〇
					一二
					六五

▲縫方の順序 第一に、後布のなげを三つ折にして緞ける。後巾を仕立て上げ、寸法によつて定めこれに相引の縫代三分を加へて標をつけ、その標から三分裾を切り上げる。この標と裾の標とが、後の真中の折の山になるのである。この標から、又三寸四分の處へ標をし、これがなげの山標である。この標から相引の標まで、折をつけて裏へ返して緞けるのである。

次には襠をつける。折は襠の方へ返して隠襪をかける。後布と奥布を縫合せ、折は奥布の方へ返す。次に前布を縫合せ。前布は裾の方の一方が、六分長くなつてゐるから、長い方を相引になるやうにする。前布と後布即ち襠のところを縫ひ合せ。相引を縫ひ輪にしてから裾緞をする。後奥布のくりぬいてある裁目を袋縫にして、こゝに襠布をつけ、衣服のすれて傷まぬために、真縮をやらせ止めにする。次は前巾に襪を折つけて、折目の山の崩れぬやう鍔をかけ、中心の折目の處で紐下の寸法を定め、上の縫返の寸法を見て、両方の襠襷を折るのである。

襠襷は最初一寸三分に折り、上り一寸の中にする。そして相引寄りの最端は、二分位の中にして二三寸の間は彎曲させる。次に後の襷をつける。折は腰板の方を左にし、裾を右にして後布を表に下へおく。それから両方の相引裾の縫目と縫目を合せて持ち、後布二枚を一緒にして裾廻りを平ら

に引張つて、九寸の處を二枚一緒に假りに縫止めをし、それからまた八分の處へ同様襪でちよつと止めをして、元通り開いて下へおき、その襪止の處を山にして腰板のつく處へ、前に襪の山標がつけてあるから、そこへ平らに折をつける。そして襪で中頃を綴ちつけて引き返し、前布をまくつておいて後の下襷を八分の處に、二枚一緒に止め標がしてある處から、腰板の方へかけて折をつける。次に後奥布を、中心の襷から三寸五分の處で折り、又折返し折目が中心に重なるやうにし、なほ襠の縫目が中心へくるやうにして、両方から重ねる。それから前の襷を初め、折のつけてある通りに折り、平らにして襪をかけてから、三折にし、腰板をかけて腰板をつけるのである。

▲腰板のつけ方 腰板の芯には經木に厚紙を張つておく。裏表の腰布と、付菱には裏打ちをする。布を腰板に張るときは、腰布の下の方を五分表へ折り、その折目を板の下部へ平行させて、板の方を布より五厘出して、平に下へおき、紙捻を三寸位の長さにかたくして、糊をつけ、横一文字に腰板の端へ貼り、折返してある縫込の布へ糊をつけて、紙捻の上から裏へ返してはりつける。それから両方の紐をつける部分だけを残り、鉄を入れて残りの布で板を包み、裏へ返してはりつける。付菱は寸法通りにして、内側に糊をつけて貼る。後紐も前紐も、寸法通りに芯を入れて、後紐は端

を二寸程縮けずにおき、前紐はかけ接ぎにし、前紐は真中を一尺位縮けずにあけておく。そして後紐をまくつて綴ちつけて、残りを縮けておく。

腰板をつけるには、後布だけにしてその上に腰板をのせ、付菱を開いて両方を針で止めて、返して裏腰布の左端を待針で止めておく、右側からつけ初めてよく糸を止めて、付菱の中を二三針つけ付菱をおこして付菱の頭を止め、その針を中心に行つて小さく表に出し、あとは終りまで小さくつけ、終りは前と同様によく糸を止めて、二寸戻した針を裏側につけ、付菱をおこして付菱の頭を前のやうに止めて、その糸を中心の縫目に引かけて抜く。裏腰布を表より五厘控へて折り、その糸で紐のつけ根の處を、中から腰板の外に出し、裏腰布に抜き、又表に出し、中に引抜いて、その糸で右も同様にして、糸を中の縫込に結びつけて切る。

裏腰布の方に二分位に糊をつけて、表腰布にびつたりはりつけ、それを膝下に壓をする。前腰布の方は、厚紙を一寸五分位の中に切り、それを紐の方に綴ちつけ、前腰の紐下のあたりの處へあてがひ、裏から待針し、つけ根は二三回止めて、あとは襞の山に返針してつける。厚紙に三ヶ所ばかり切り込みを入れ、返して裏側を縮ける。後紐は十文字に重ね、前紐は三ヶ所紙で封じて置けばよいのである。

女袴の利用法

色揚

古い女袴は色揚すると結構再び用ゐられる。女の袴地には木綿とカシミアの二種があるが、先づ木綿の海老茶の色上げをするには、布地をよく洗濯して、コンゴロリンズといふ海老茶色の染料一種丈でも出来るが、一層よく染めるには

ベンゾファスト、スカールレットBS 適量

オキザミン、パイオレット 適量

炭酸曹達四匁及び食鹽二十匁

以上の割合で染液を作り、袴地を入れ一時間位煮染め、初めはベンゾファスト、スカールレット曹達と食鹽を加へ、中頃を見計ひ、オキザミン、パイオレットの溶液を少し加へると、その分量に従つていろくの色が出来る、かうして染め上げたらよく水洗ひして干す。

次にカシミア地の海老茶色の染あ方は、第一に袴地をよく洗濯し、次に手頃の釜又は鍋に水を入

れ、布百匁について

フアスト、レッドA (赤色) 二匁

サイアアナス、ロールB A (青色) 三匁

以上の染料を混合し、湯で溶して前の釜又は鍋に入れ、その中に硫酸曹達二十匁を加へ、又硫酸二匁を二匁づゝ染付の工合を見乍ら加へる。よくつかない時は三回加へる、この中へ先の袴地を入れて、むらの出来ぬやうに注意してよく掻き廻し、次第に熱を加へて十五分乃至二十分程煮沸してから、取出し、水洗ひして乾して、アイロンをあてる。この海老茶の色はフアスト、レッド(赤色)とサイアアナス、ロール(青色)との分量の加減次第で思ひのまゝに染まる。元の色のまゝに染めるには染料の色をよく考へないと、とんでもない色に染まるから、染料の用ひ方は呉々も注意を要する。

染色法

原色と染料の關係は大體次の様な結果になるから之を標準にして染めたがよい。

(原色)

(使用の染粉)

(出来上り色)

納戸色

薄赤色

紫色

(原色)

(使用の染粉)

(出来上り色)

納戸色

薄黒と薄赤色

鼠色

同

黄茶色

鶯茶色

同

赤茶色

海老茶色

桔梗色

薄赤色

紫色

同

薄黒と黄色

鼠色

同

黄と薄黒色

鶯茶色

同

紫と薄黒色

紫紺色

紫

色

茶紺色

同

鼠色

葡萄色

同

緑色

オリーブ色

同

薄黒色

紫紺色

同

黄色と鼠色

濃鼠色

同	海老茶色	赤茶色	海老茶色
同	黄色と青色	黄色と青色	紫
同	黄色と黒色	鼠	紫紺
鼠	青色	紫	紫紺
同	赤茶色	同	同
同	青色	海老茶色	海老茶色
同	青色とブラツク	納戸色	納戸色
同	青色とブラツク	鐵色	鐵色

女児洋服

木綿袴のお古なら、平常用の座布團や腰掛布團によく使はれ、セルや薄手サージの毛織物なら、着物の裾廻しによく利用されるが、これは、お姉様の海老茶色セルの古袴で、七八才向の女児ドレス（鯨尺で身丈一尺五寸）に仕立てたものである。

この型にすると、本裁の女袴で、二着分は容易に仕立てられ、尙ほ赤に白の水玉模様の有布（ボプリン）か何かを一寸配色にあしらへば、優に外出着として立派なものとなるのである。

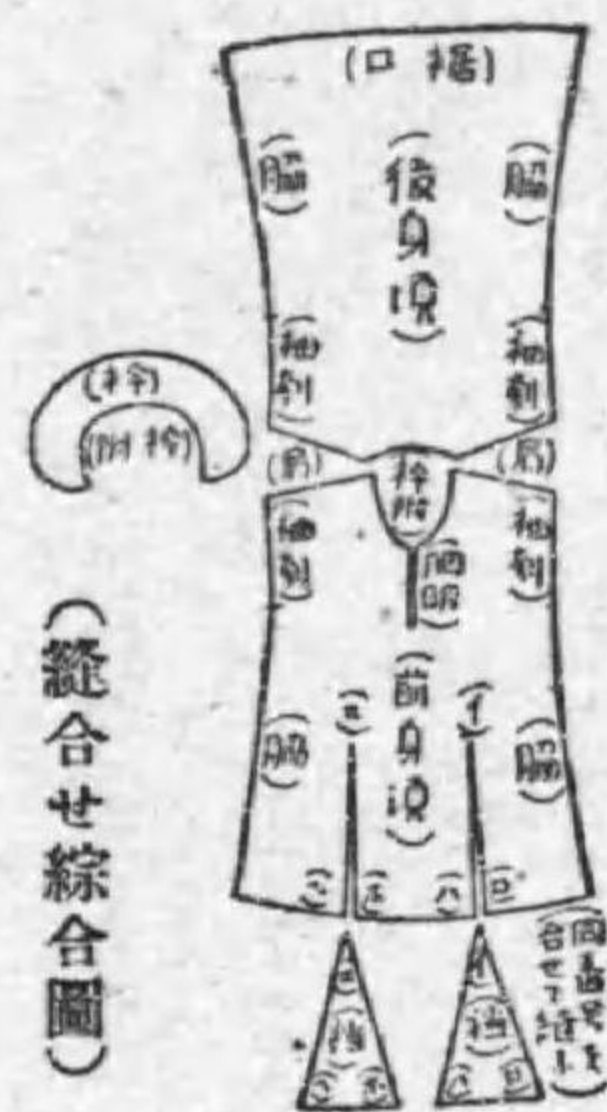
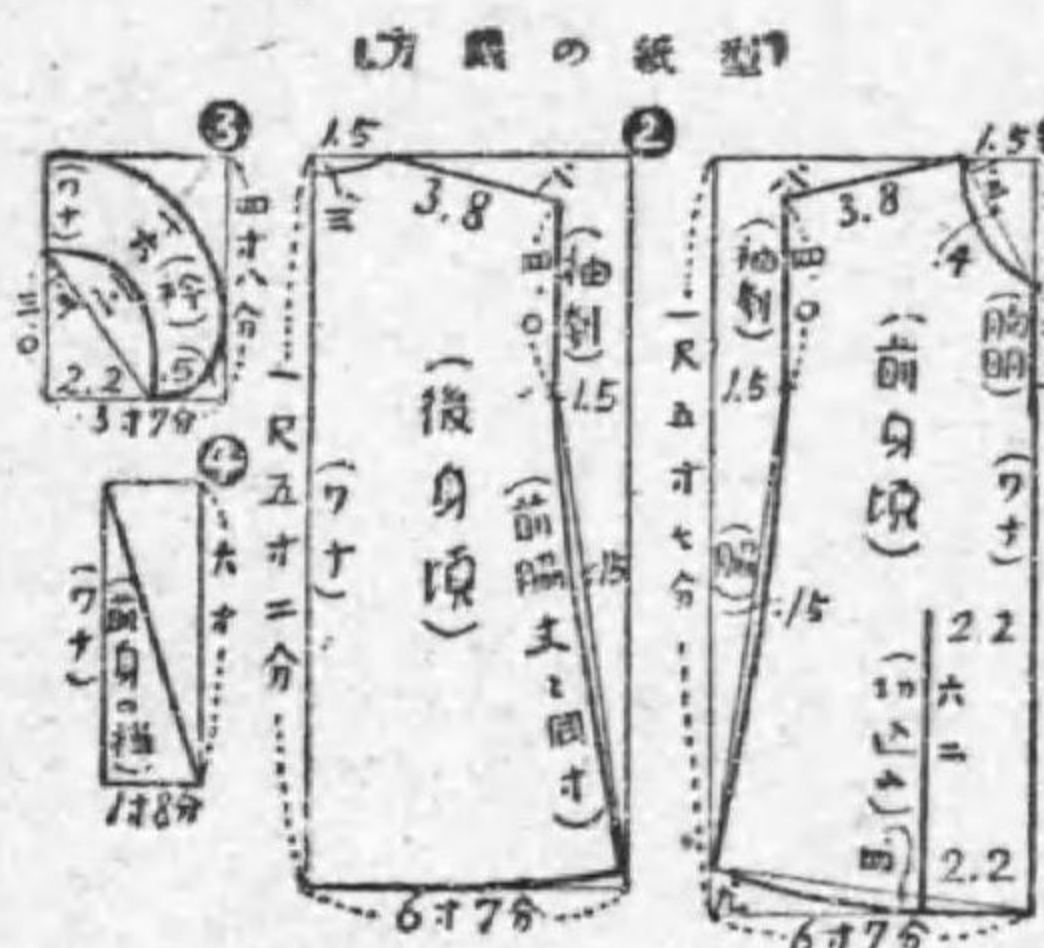
▲材料……大巾物の古い本裁女袴を、前布か後布を二枚だけと、配色布を二尺巾なら約七寸の丈を用ひるが、無地に仕立てるならば、勿論配色布は要らない。ほかに、小型の黒鈎ホツク一組、縫糸型紙等は言ふまでもない。

▲型紙の裁方 出来上りの寸法（鯨尺）で各型紙を裁つ（型紙の裁方圖参照）

前身頃……（1）のやうに、巾一尺三寸四分、丈一尺五寸七分の紙を、巾真二つに折り、衿肩明は輪の上方で一寸五分を、顎剣二寸六分下りに斜線をひいて、一寸三分下げて、四分の剣に落す。肩は八分下りの斜に巾三寸八分、袖剣は下方で巾一寸五分を除いて四寸にしるし、脇は裾口で九分上げて斜線をひき、真中で一分五厘の剣をつけ、裾口は斜線をひいて、真中で四分の膨みをつける。

次に胸明の二寸五分を明け、裾の切込みを輪から巾二寸二分を入れて、縦に六寸二分を二枚一緒に切り込み、太線通りに裁つ。

後身頃……（2）のやうに、巾一尺三寸四分、丈一尺五寸二分の紙を、巾真二つに折り、衿肩明は輪の上方で一寸五分を、背で三分に割り、肩と袖剣と脇とは、前身頃と同様にしるすのであるが、



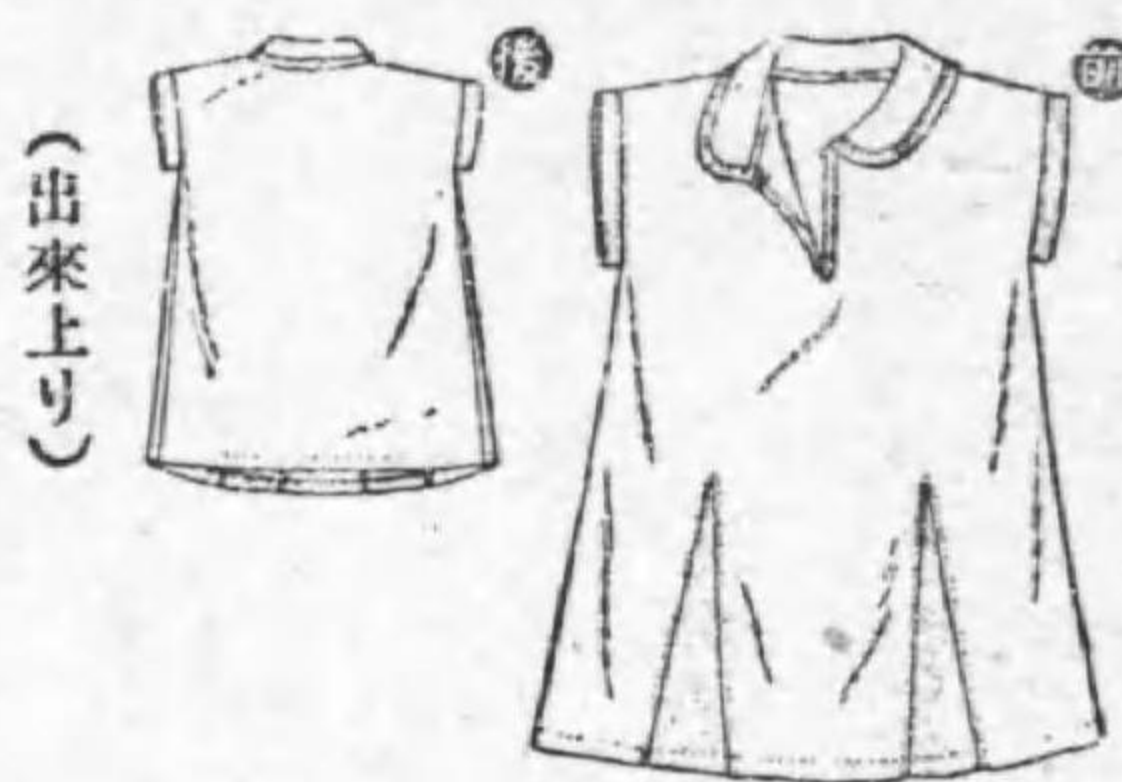
(縫合せ綜合圖)

脇は前脇丈と同寸にとつて、残りを裾口で切り上げ、裾口は適宜に膨みをつけて、太線通りに裁つ。衿は前脇丈と同寸にとつて、残りを裾口で切り上げ、裾口は適宜に膨みをつけて、太線通りに裁つ。衿……(3)のやうに巾七寸四分、丈四寸八分の紙を巾真二つに折つて、衿附側は輪で丈三寸と巾二寸二分を除いて斜線を引き、輪の方から一寸五分のところまで一寸一分の刻をつけ、こゝで衿布を一寸六分として、ぐるつと丸味に標し、衿先は隅から五分を入れて、太線通りの丸衿を裁つ。

前身の襟布……前身頃の切り込みへ接ぎ合せる三角形の襟布である(4)のやうに巾三寸六分、丈六寸の紙を、巾真二つに折つて、輪の上方から裾口へ、巾いづばいの斜線を引いて裁つ。

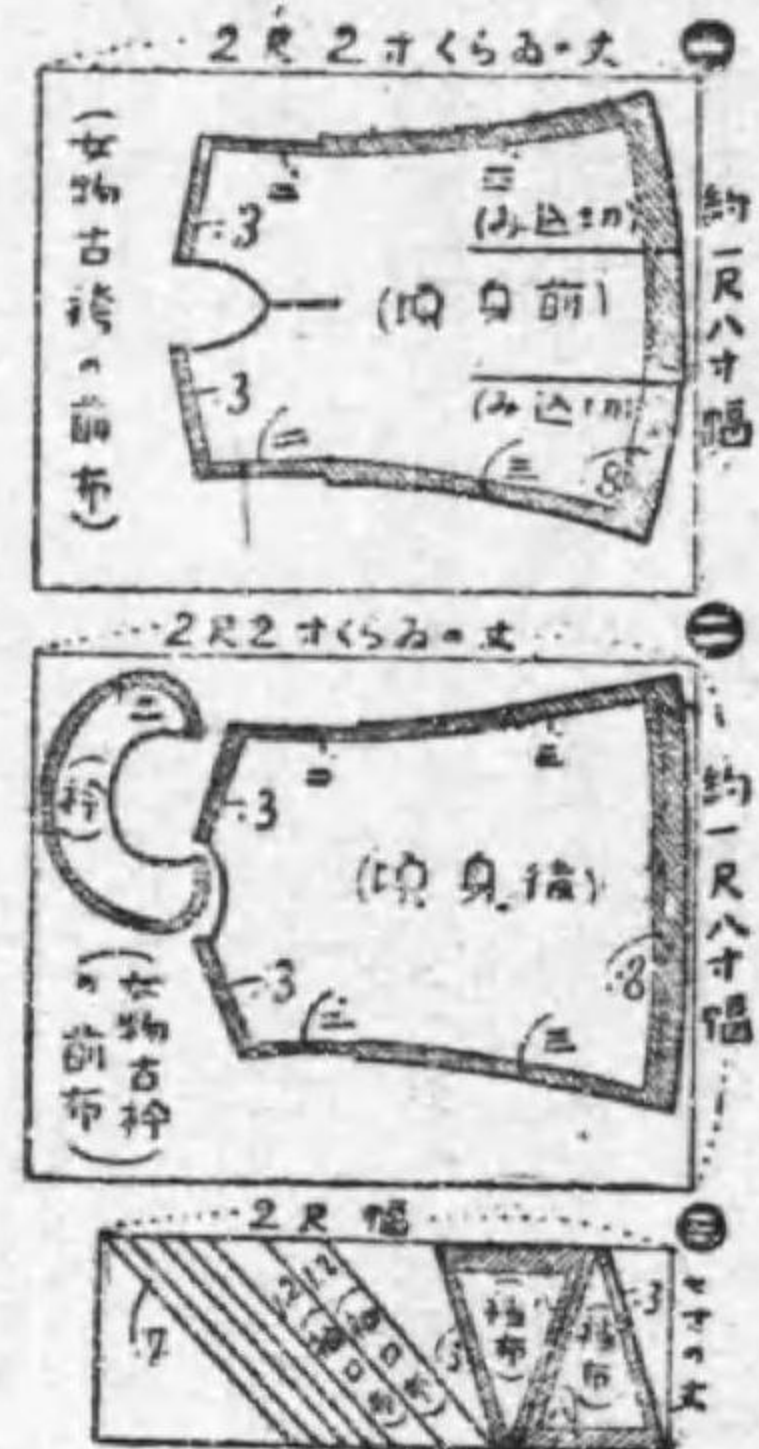
▲用布の裁方 古袴を解いたならば、汚れてゐるものは洗濯なりクリーニングをして、アイロンで地を整へておく。古いものを利用することであるから、言ふまでもなく、布地のいたまぬところを裁たねばならぬ。

「用布の裁方圖」(一)(二)は、袴の前布だけを使ったもので、



(出来上り)

(用布の裁方)



一枚で前身頃、一枚で後身頃と衿の、各型紙を擴げて裁せ、一枚づつを裁つのであるが、縫代は肩と脇に三分、裾口八分、袖割二分、衿は附以外の周圍に二分をつけて、衿附側は、いづれも型紙通りに裁つ。

(三)は別の配色布で、前身頃の襟布二枚を、縫代は裾口八分、その他三分を附けて裁ち、残り巾一寸二分の袖口布と、衿や胸明の縁布を七分巾に、いづれも真斜に裁つておく。

▲縫ひ方 まづ「綜合圖」の(イ)から(ハ)までの同番號を合せて、前身頃の切込みへ襟布の二枚を接ぎ合せ、折を身頃布の方へ折るのであるが、ミシン縫なら、表から飾りミシンをかけるのである。

肩と脇は、各々縫袋にして前身側へ折り、胸明は左右をつゞけて、配色用の縁布で、ぐるつと約二分巾の縁をとる(表からつけて裏でまつる)

袖口も配色用の口布を、表からつけて口布の方へ折り、巾四分に折つて、表側でまつる。
衿はつけ以外の周囲へ、配色用の縁布で、細く縁をとり、身頃の衿附へ合せて、例のごとく衿を
つける。縫代は斜布で包む。そして、裾口を二分に六分の三つ折に折つてまつり、胸明の上端へ鈎
ホック一組をつけて、掛け合せると、これで出来上りであるから、例のやうに仕上げをすればいゝ
のである。

男の兵児帯

カシミヤ又はセルの女袴は穿き古して、襷の折目の切れてひどく傷んだのは、黒
色に染め、織ぎ合はせて男の兵児帯にすると結構間に合ふ。ミシンでなく、手縫ならば一針毎に返
し針にして縫ひ織ぎ、両端を三つ折にして細かく縫へば宜しい。かうすると、織ぎ合はせや繕ひは
あつても少しも目立たない。しかも、女袴一着で二筋取れる、出来上つた帯はメリンス等より見掛
けもよく、はるかに丈夫である。

座布團

女のお袴は座布團に持つて来いである。一枚で四五枚はたつぷり取れるし、その上、暖
かで柔らかい、夏向きにはキャラコの白地か、古カーテンを被せて用ゐればいゝ。

袴の下帯、帯側

一層古いので襷の折目のすり切れて、使用に堪へないのは、布地を織ぎ合せ

て、袴の下帯にする。又は、帯の片側にしてもよい。

裾廻し 又、あまり色のさめたのなら色揚げをして、着物の裾廻しに用ゐられる。

前掛 毛織の女袴の古くなつたのは裁ち直して臺所用の前掛とすると、水を弾いて大へん都合
がいゝ。

古帯の利用法

都會の子女は言ふまでもなく、地方の農村などに行つても、今日洋服を着ない子供はなく、子供
の服装は、最早や洋服が日常の服装となりつゝある。

そこで、和服の時使つてゐた兵児帯を、洋服に改造して、経済的な外出着や平常着を作つて見る
ことにする。兵児帯に限らず、小巾物で作る時など、勿論應用し得られる。フランスなどの家庭で
は、不用になつた縞物や柄物を利用して、よく子供たちに着せてゐるが、却つて面白味の深いもの
である。

さてこの型は短袖であるが、型紙そのまゝ袖丈の寸法まで伸ばすと、長袖にもなる。又セル、ネ

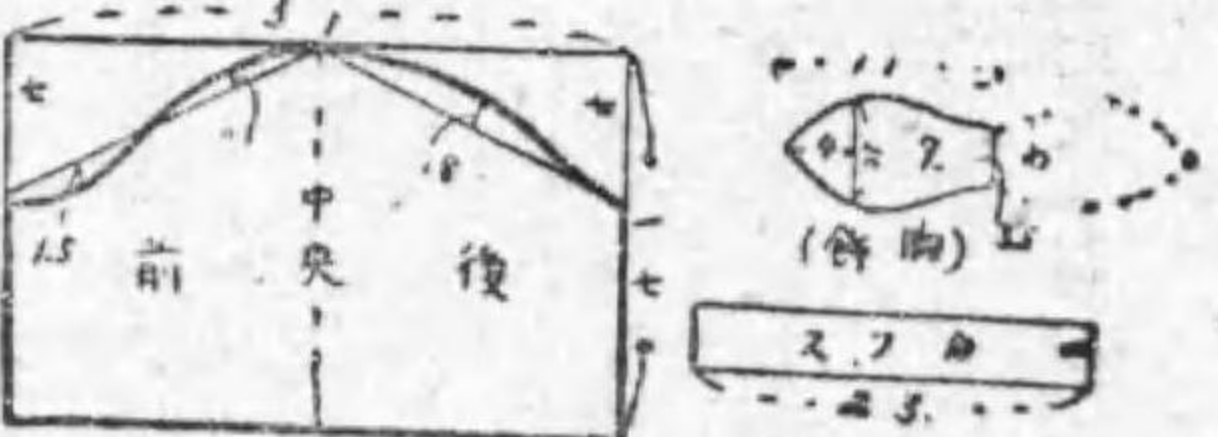
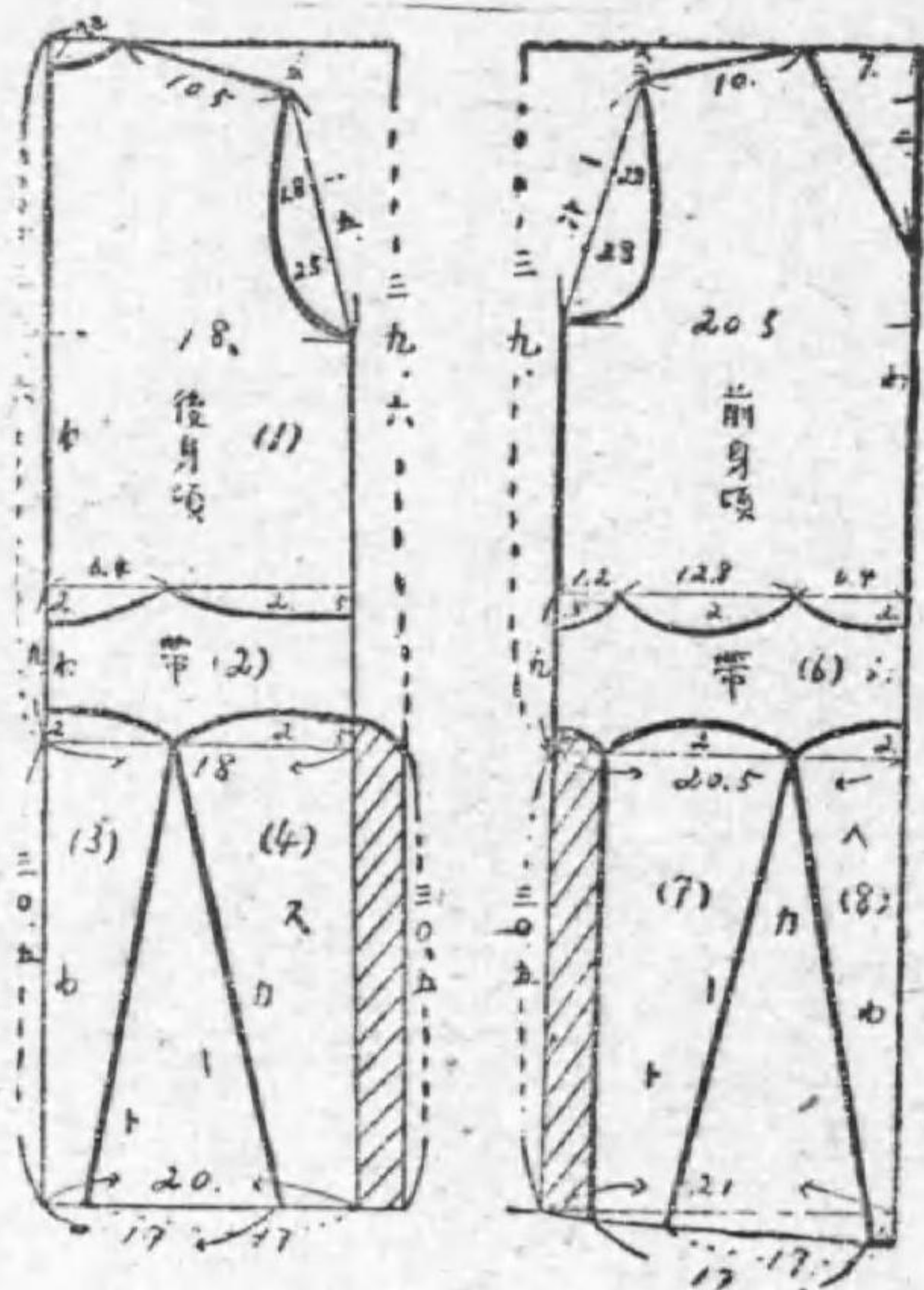
ル、サージ、ビロードなどの厚地の布にも應用することが出来る。そして縞柄を使ふと、帯の部分
が横縞になつて、可愛い女兒服が出来上がるものである。

平常用女兒服 型紙の裁ち方は、圖の1234のやうに後身頃を、5678のやうに前身を作
り、後の脇スカートの出た分(斜線の處)は、前の斜線の處に繰越すのである。各々縫代を加へ、
裾の折込は、七センチにして一圖の如く裁つ。

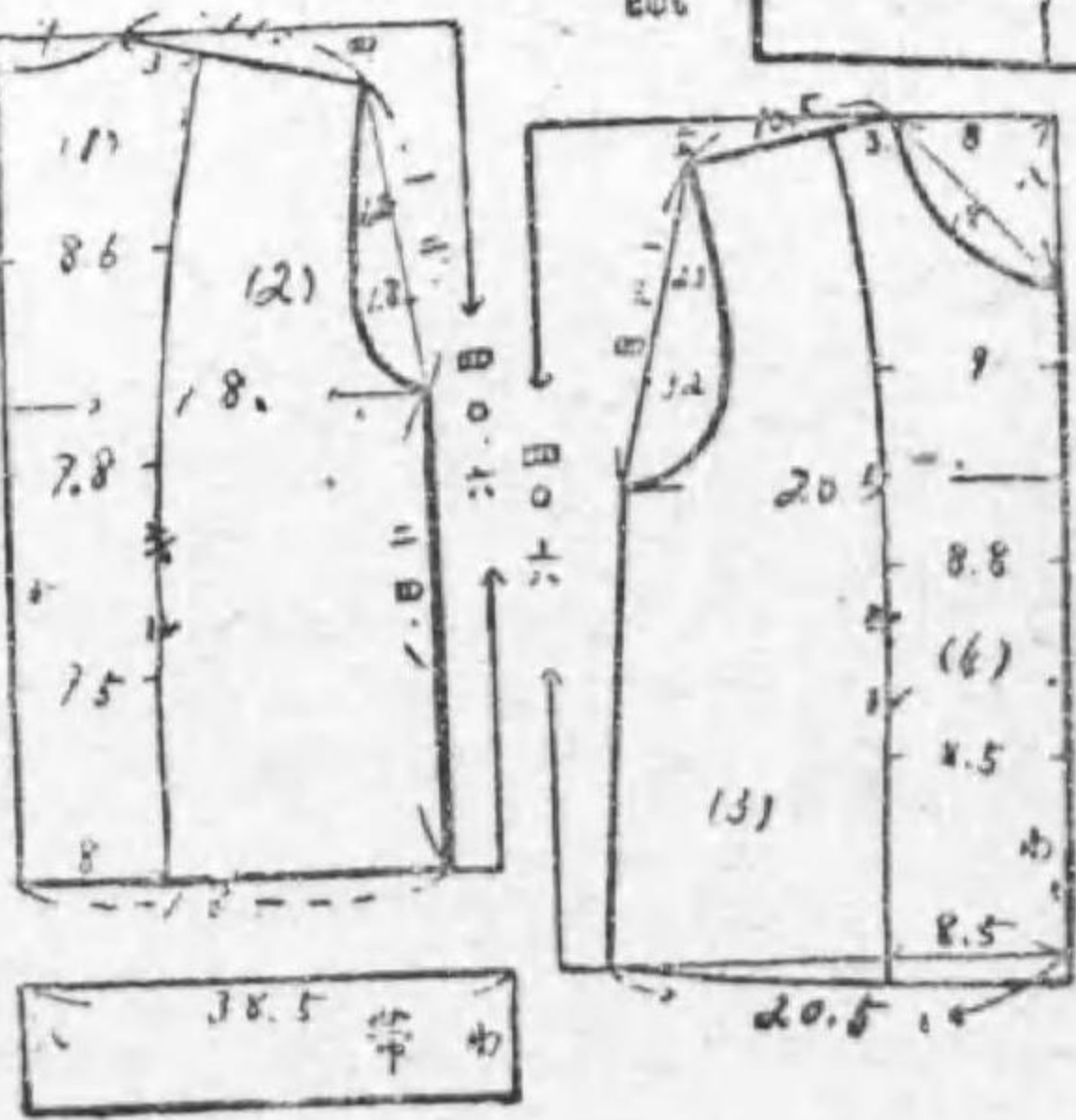
用布の縫方は、後身頃の半月形を、縫代だけ裏へ折つて帯の上へ載せ、飾ミシンをかけ、スカ
ー
トも巾を縫合せて割り、帯の上へのせて飾ミシンをかける。前身頃も同様である。

次に、肩を頭の通るだけ縫ひ残り、袋縫ひにして、縫ひ残しは前は見返し、後は持出しにする。
脇を袋縫ひ、前後の頸廻りは、斜布を表につけ、全部裏に折り返してまつる。肩明はスナツプで止め
丈をきめ、裾を折つて、處々襷を寄せてまつる。

次に袖下を袋縫ひにして、袖口を縫ひちよめる。カフスを輪に縫つて割り、表につけ裏でまつる
袖附は脇の縫目と袖下の縫ひ目を合せて、袋縫ひ又は縫代を斜布で包む。胸の飾りは二枚合せ、廻
りをぬひ、へこんだところをぬひ残して返し、くけ合せて結ぶ。布地の厚い場合は、廻りを玉ぶち



スで、外出用として簡単な形のものを作る。材料はスナツ
ブ小六個ほど、バラの葉に青の絹布五センチと四センチ
の四角なものを、一枚づゝ用意すること。
▲作り方 先づ前後身頃の型紙を作る。そして圖のやうに
(1)(2)(3)(4)と切り離すやうに線をひく。外に飾布を



外出用女兒ローブ 白メリン

にする。裾巾は布の都合で、巾の
間に合ふ巾にしたのであるが、布
地が十分にあるときは、脇の縫ひ
合せの處にも、両方に四五センチ
づゝ廣く取るとよろしい。

とる。

縫ひ方は、後身頃の1の切り離したところを裏に折つて、2の上のせ、表から飾りミシンをかける。(前身頃も同じ) 表から飾りミシンをかけないで、内側で縫ひ合せておいてもよろしい。

次に飾布は、十センチ五ミリと二十二センチの中に、横にしるしをつけてピコミシンをかける。このミシンは布地屋で大抵扱つてくれる。ドロンウオークをして中央を切つても宜しい。さもなければ玉ぶちにする。玉ぶちの仕方は、飾帯を浅い袋縫ひで輪にするのである。裁目の片方を一センチ七八ミリの間に、表に折り返し、折り目の處を二三ミリの深さに縫ひ、縫代を包んで裏でまつる。両肩の頭の通るだけ、五六センチづゝ残り、肩を袋縫ひにし、縫ひ残しは見返し、持出しに仕上げ。脇を袋縫ひにする。

帯を身頃の胴廻りに合せて袋縫ひにし、帯の上に飾布の狭い方を縫ひちよめて載せ、身頃のせて三枚ともに縫ひ、縫代の端は平らに切り捨て、バラ／＼にならないやうにかゞつておく。それから帯に、二段目の飾布を縫ひちよめて袋縫ひでつける。

次に、頸廻りと袖付けは玉ぶちにする。そして肩明にスナップをつける。薔薇は六センチ四角を四

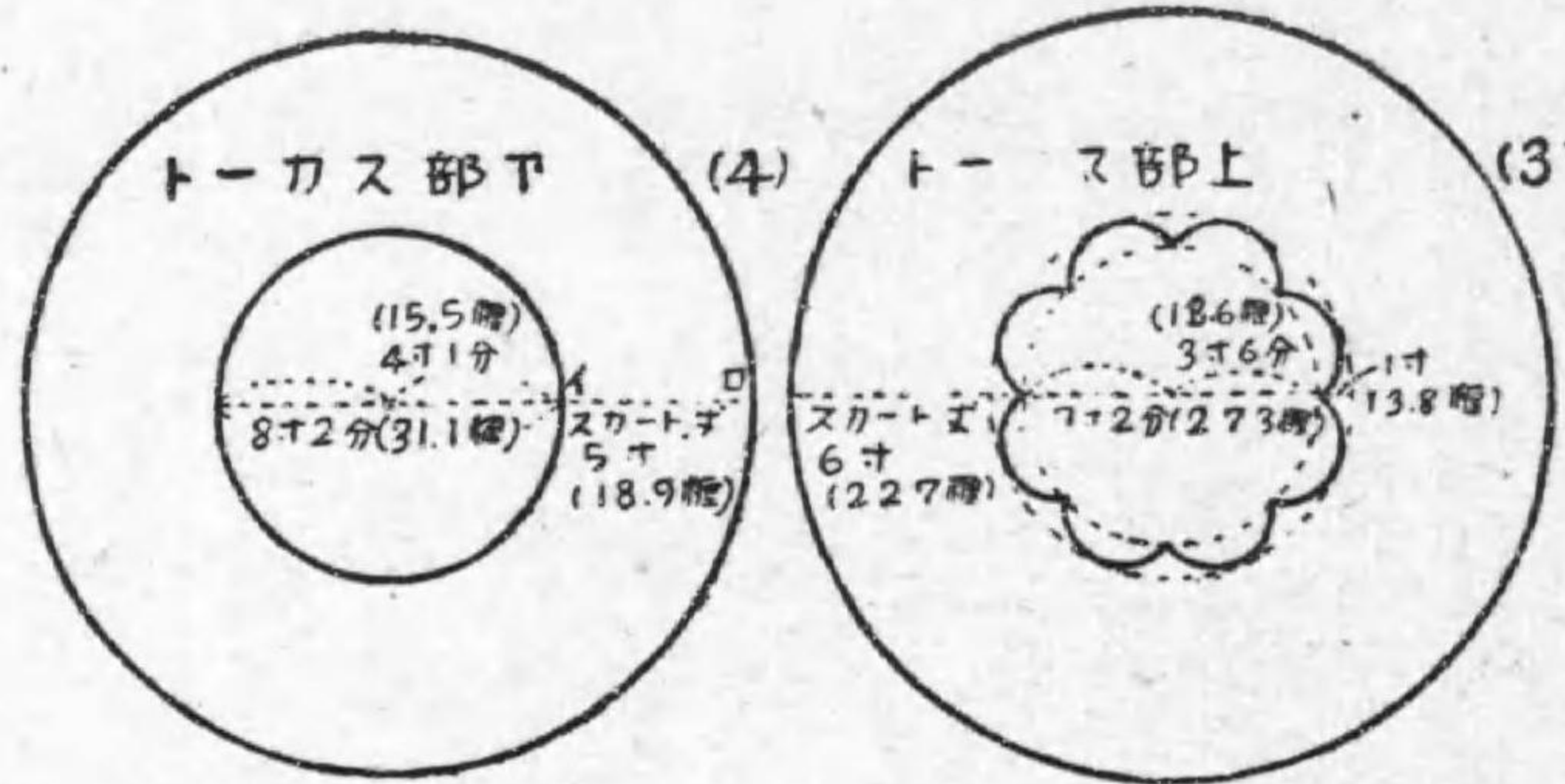
枚切り、先づ三角に折つて、輪を中央にして石畳みになるやう重ね合せて、廻りを縫ひちよめ、裁目を花の中に入れて、花の形をつくる。もう一つは五センチ四角にして、大小二個つくる。葉は五センチと四センチの四角の布を三角に折り、更に三角に折つて、裁目を縫ひちよめて葉の形につくり、花を二つよせ、程よい處に葉をつけて、前中心と脇の縫目の半分位の處につけて、仕立上りする。

身丈を伸ばす様にするには、帯丈を二センチ位長めに裁つて、揚げをしておくとよろしい。

十一、二歳用女児ドレス これは流行おくれになつた夏帯を利用して作る。型は腰廻りから下へ、二重にサキユースカート(裾に丸味をつけたもの)にしたもので、スカートの脇は縫目なしにとつてあるから、縫方は至つて簡単容易である。

材料は薄地の丸帯である。裁方も極く都合よく、見た目にも非常に美しいものが出来る。

▲裁方「型紙の裁方」圖の通り、紙を二重に折つて、前後身頃を一枚づゝとり、スカートは、上下を一枚づゝ都合二枚、圖の寸法通りの圓形に裁ち切るのてある。そして、布を開いて型紙をのせ、「裁合せ圖」の寸法どほり、それ／＼縫代をつけて裁ち切る。

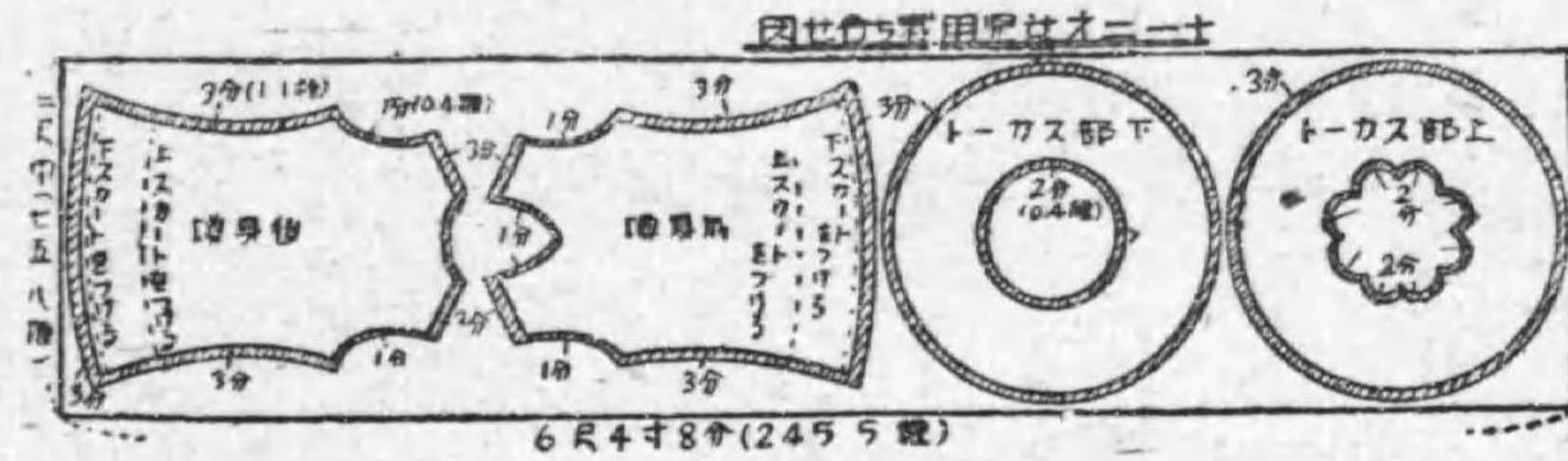


裏に折るのであるが、このとき、花形の角々には切り込みを入れるのである。

そして、身頃の裾から四寸(一五、二纏)上つたところに、巖で止め(2圖参照)ミシンをかけるか、細かく縫ひつける。

終りに、スナップを左右の肩明に、二組づつつけて出来るのである。

婦人帽子 婦人にしても洋装の方が、経済でもあり活動的でもあるので、近年断然洋装に改める方々が多くなつてきたやうであるが、たゞ、帽子といふと案外高價な附屬品があるために、洋服は手製で済しても、帽子にお金がかかるから困るとお考へになる方々があると思はれる。そこで、茲には此際、最も経済で手軽に出来る帽子の作り方を紹介しやうと思ふ。しかも古い帯地か、伊達巻のやうな用布を材料として、型も要らなければ道具もなしに



▲縫方 先づ最初に、前後兩肩を合せ、袖ぐりからはかつて、一寸三分(四、九纏)の所まで、双方とも袋縫にし(縫代はあさく)折りは前にかへす。

この明へ、六分(二、三纏)巾の斜布を縫つけ、二分(〇、八纏)巾位の持出しにして、前肩だけ、持出しを裏に折つて新けつけ、見返しをやうにする(斜布は残り布からとる)

次に前後兩裾をあはせ、縫代を浅く、袋縫して折を前に返す。

袖ぐり、袖ぐりには、四分(一、五纏)巾の共の斜布で玉縁をとる。

下部スカートは、割抜いてある方を、身頃の裾廻りに、中表に合せて縫ひ折をスカートの方にかへし、縫代の端はかどつておく。

スカートの裾は、圖はビコミシンをかけたせのであるが、玉縁にしても、又は三つ折りにしてまつても結構である。上部スカートの花形にくりぬいてある方の裾も同様にする。

次に、上部スカートの花形にくり抜いてある方は、一分(〇、四纏)縫代に

只針と糸とさへあれば誰にでも出来る。至つて簡単な拵方なのである。それでゐて、出来上りはあつさりと氣が利いてゐて、被り具合も大變軽い。また二つに折つてくるくと巻けば、携帶にも便利で旅行などには至極重寶である。なほこれは、夏冬通しに用ひられるものであるが、眞夏には木綿の伊達巻で拵へると、麥藁とは又違つた涼味のあるものである。

次に帽子としての柄の選び方は、それ／＼好き／＼であるけれども、同じ廢物を利用してしても、格子縞とか、或は横の棒縞、細い市松、小紋風の小花模様などが、たいへんよく引立つ。色合も、着物との調和もあつて一概には申されないが、あんまりバツとした色よりも、くすんだ色か、又は黒と白などにすれば、どんな方にも向くであらう。

伊達巻の幅は、廣い方が深く出来て被り工合が宜しい。若し地の厚い古い帶地でもあつたら、それでも立派に間に合ふのである。

▲寸法の割出し方 先づ最初に卷尺を用つて、左右の耳の中ほどから、頭の眞中を通る線の長さを計るのである。これが帽子の深さとなる。(甲圖のイ)

次に額際から後へかけて、頭の周圍の長さを計る。これが帽子の周圍の寸法で、もし髷を大きく

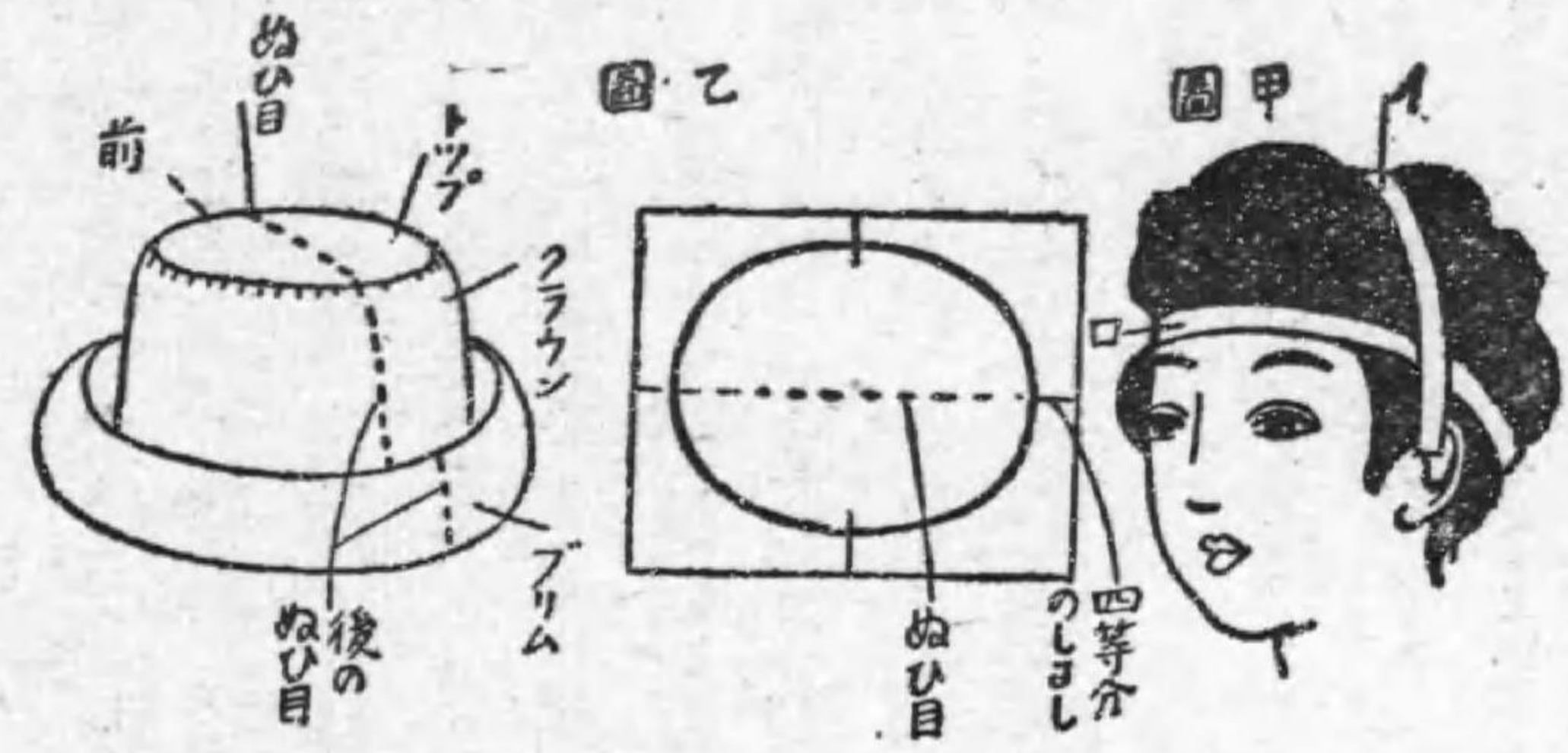
結ぶ方は、そのつもりで少しゆつくりと取つておく。(甲圖のロ)

この帽子は頂き即ちトップと、周圍即ちクラウン、鍔即ちブリムの三つの部分から成立つてゐる。それで帽子の深さから伊達巻の中の二倍を減じたものが、トップの中で、それに半吋加へたものがトップの長さである。だからトップの長さに、前後の縫代二吋を加へたものを二枚裁つ。それを縫ぎ合せたものが、トップの布になるのである。

クラウンは、頭の周圍より一吋長く裁つ。ブリムは、それより更に十一吋長く裁つのである。

▲縫方 先づ、トップを二枚はぎ合わせる。縞や模様の場合ものは、なるべくよく合せてミシンをかけ、縫目は割つておく。次に半吋づゝの縫代で、クラウンを輪に縫ふ。そしてクラウンを四等分して、それ／＼四個所に標をつける。それからトップの布にも、やはり縦横とも四等分のしるしをつける。(乙圖参照)

標印がついたならば、トップの布の上にクラウンの布を裁せて、しるしとしるしとを合せて針で止め、楕圓形になるやうに加減しながら、小さな襷を寄せる。そして、ミシンをかけてもよし、或ひはまつ／＼つけてもよい。クラウンの布の耳は、その儘にして折らずにつけ、縫目は必ず眞後に



ゆくやうに注意する。云ふまでもないが、トップの楕圓形は、長い方が堅、即ち前後になるのである。

ブリムは、クラウンより巾を一時狭く切つてしまふ。そして切目を細かくまつておく。巾が廣過ぎると、出来上つてからだれて、形が悪くなるからである。これも半吋づゝの縫代で輪に縫ひ、縫代は細かく三つ折にしてくけつける。

そして、ブリムを裏返しにして（縫代の方を上に出して）二等分したところに印をつけ、更にそれを二等分して都合、四ヶ所に印をつける。同様にクラウンの方にも、四分して印をつける。それから、クラウンの外側をブリムで包んで、印と印を合せて待針をうつすべて日本流の縫代を、裏に出す縫方でなしに、恰度帯芯を縫ぐ時のやうに、兩方の布を上下に重ねたまま縫ふのである。このときにブリムを裏返しにつけるのは、出来上つてから、ブリムの端が巻き

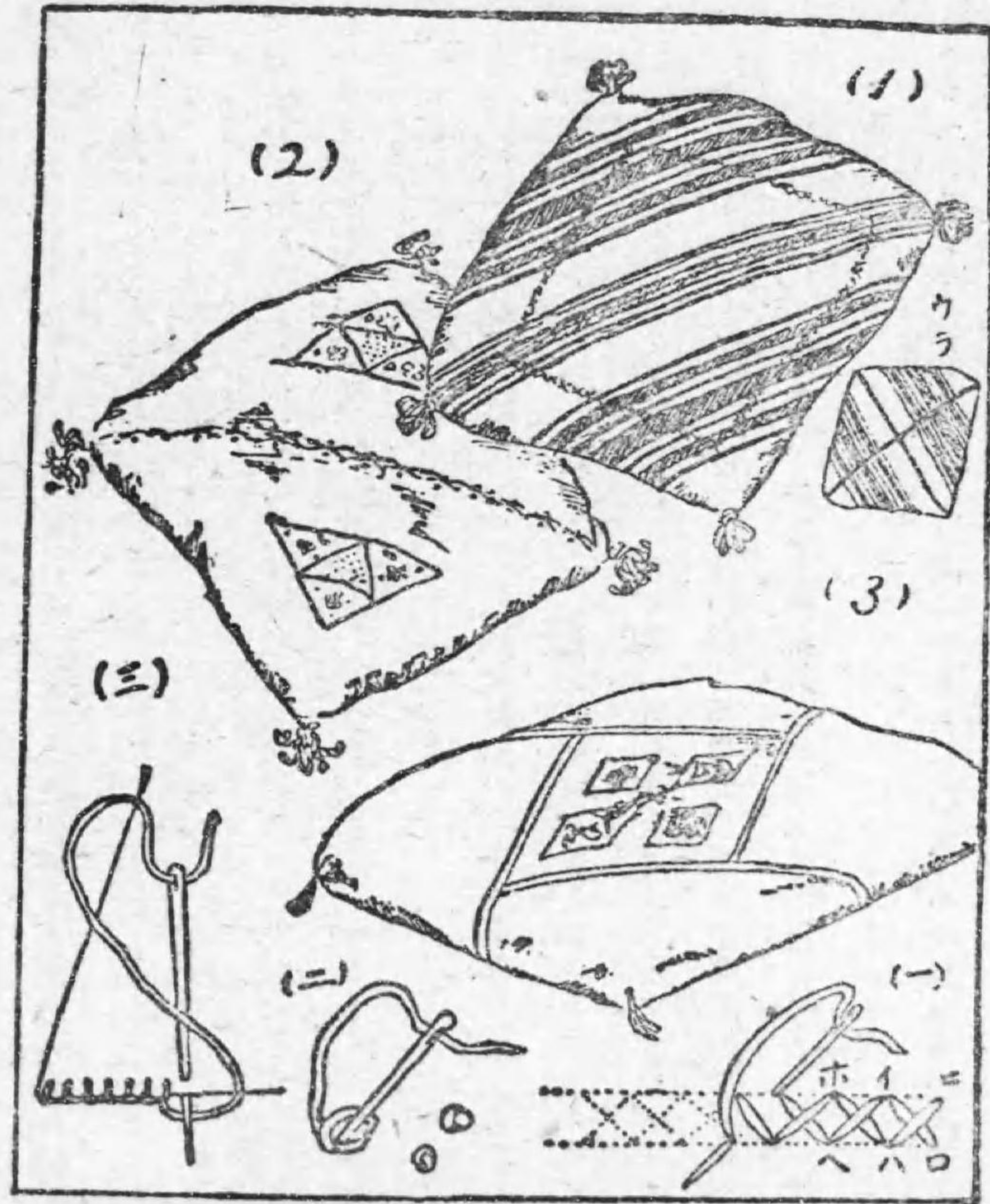
上つて、表が出るからで、もしそれを間違へると、ブリムだけ色が違つてしまふ。そして耳を縁にして、巾を缺いた方を縫つける。

さて、待針で四分したら、更に又それを半分づゝに分けて待針をうち、八等分にする。その次にはまた、それを半分づゝに分けて十六等分にする。そしてなるべく細かな襷が全體に、平等に寄るやうに加減して、これを丁寧に縫付けするのである。すると、ブリムが自然に上へ捲き上つて、こゝに軽快な形の帽子が出来上るのである。

クツシヨンと座布團 帯の結目は汚れたが、中の方はまだ何かになるといふやうなのは、別項染色の利用法もあるが、また、これを縫ぎ合せて、美しいクツシヨンにすることが出来る。

(1) 圖は、流行おくれの縞縹子を、斜に縫いで、中央の縞目へ、リボン刺繍用のリボンを綴ちつけたものである。これだけでもよいのであるが、處々色の褪せてゐた場合には、リボンでクロスステッチを適宜に入れると、それが直接褪色のところを隠さずとも、ちよつとごまかしになつて美しく見える。

クロスステッチの刺し方は(一)圖イからロに出し、ハからニといふ順序で、いつも同じ方向の目



が上になるやうにしな
ければならぬ。

(2)圖は、帯の模様
のない部分を矢張り斜
に合せ、合せ目はクロ
ステッチと(一)圖のさ
がら縫にして、端に古
い半襟でアブリケをす
る。形は好みであるが
布の入れ方は、たゞ織
いで紵りつけるより、
(三)圖のやうに切端を
スカラに縫ふのである

中央にリボンでさがら縫ひをしたから、さがら縫の古半襟を使ふのも面白い。
(3)の座布團は、帯のよい部分だけを切りとり、四角に織いで、そこへ縁をとり、中央はもしその帯の模様中に、美しいのがあつたらそのまゝ使ひ、なければやはり古半襟でアブリケ(型直刺繻)をする。

これらのクッションや座布團は、色彩や生地の配合に注意して、二三本の帯でこしらへると、三枚なり五枚なり揃つたものが出来るのである。しかも、手軽に、新形の、極めて優美なものが出来上るではないか。

地味な女帯を派手に 地味な女帯だつたら、縫箔屋へやつて、前と後の出る所へ、大きな模様を縫はせ、そして、その縫方も捻糸を堅くして、宛ら縫出しの様に見せ、糸も注意して配合させると、ずつと派手な上等の帯となる。もし、丸帯なら片側は元の儘にしておいて、將來の用に供へておく事は勿論である。之は地模様のあまりしつこくないのでありさへすれば、いくらでも應用が利く。又、黒の丸帯は喪服ときまつてゐるが、これを喪服以外に利用するには、やはり片側へ縫模様をすれば一筋の帯で吉凶兩用に辨じられる。

派手な女帯を地味に 帯地に限らず凡て派手すぎるものは、思のまゝの色に染直して用ゐるがよい、又、黒縹子等の様に染直しの利かないものは、洗張りするか、又は色揚げをして、結び手の表となる部分へ、刺繡をすれば晴着用ともなる。

袋物 金通しや朱珍や厚板や其他博多だの琥珀等といふ上物の帯地は、財布、紙入、煙草入、手提袋、巾着等にするに綺麗なものが出来る。又、これを縫ぎ合せて旅行用の大きい信玄袋にしてもよい。

腰紐 兵児帯の極く古いのは芯を入れて一寸幅位に絞けると、手頃の腰紐や前掛の紐や襷になる。又、博多帯の縮古したのも前同様になると、地が丈夫な丈に随分永保ちする。なほ男帯の古いのは染直しても使へるが、その儘女の伊達巻にしてもよい。

半襟、手絡 古縮緬の兵児帯の破れたもの、中から良い部分丈を切り取つて、染直し、金銀糸で刺繡をすると、立派な半襟又は手絡となる。

長襦袢 古兵児帯の白いのはあまりすり切れないうちに絞り染として長襦袢にするとよい。それには先づ第一に袖を取り、そのあまりで横切れそのまゝを裾廻しに取る方が手数も掛らず便利である

殊に縮緬の兵児帯等だと一入見榮えがして、粹な襦袢となる。又、品によつては女帯の片側ものもやはり同様に襦袢になる。

女の夏羽織 白縮緬の男の兵児帯が古くなつて鼠色になつたら、染屋へやつて濃い納戸色に染直して女物の夏羽織にすると、結構見榮えがする。

染直し 女帯の古びて色の褪めたもの、中でも羽二重や縮緬はよく洗濯して、柳絞りとか髪斗目絞りに染直せば再び上等な帯になる。しかし、厚地のものは絞る時困難だから、あまり鮮やかに染らない。

縮緬や羽二重等の兵児帯の古いのは無地、又は白地だつたら、絞りに染らし、絞りに染したものには無地に染直し、又、少し位破れた所のあるのは染直してから袋に縫つておくと、思ひの外保ちがよい。

蚊帳の釣手 メリンスや絹縮等の少女の兵児帯が古くなると、端の方から裂け始める。さうなつたら五分位の幅に長く裂いて、四本でも五本でも組合せて編み、蚊帳の釣り手や、襦袢の上締めにする、軽くして且つ丈夫である。

単衣帯を晝夜帯に ひどく汗じみになり、そのまゝ用ひられなくなつた単衣帯は、そのよい所

だけをととり、有り合せの絹の布を、斜に接ぎ合せて、薄い芯を入れ、これも古い夏帯の片側を裏にして、晝夜帯に仕立てみると、外出用にも結構間に合ふ美事なものが出来る。

なほ単衣帯のよい部分が、一尺(三七、九種)ほど残つたので、これを鼻緒に作り、共布の草履の表を拵へて、臺(キルク)につけると、立派なキルク草履が出来る。草履は鼻緒と共に、下駄屋へ頼んでも工賃八九十錢位のもので、四、五圓位もするやうなものとなる。

さて、茲では次に晝夜帯に改造の代立方を説明するとしやう。

▲改造の仕立方 先づ単衣帯は、適當な方法で洗濯をして、アイロンをかけて仕上げをしておく。次に、この他に配合のよい無地布を、五尺餘り(一八九、四種)位用意する。これは襦袢の袖(男物でも結構)などを利用するのよいことである。

単衣帯は、傷んだ部分をのぞき、兩端を一寸五分(九、五種)巾に斜に通し篋をして、篋通りに十枚同じものを裁ち切つておく。無地布の方も同様に、巾は三寸五分(一三、三種)で十七枚に裁つておく。

この枚数は、帶丈八尺五寸ぐらゐ(三三三二種位)の出来上りと見て割當てたものである。そして

この帯は、少々厚くなるので、單だまの方が恰好よく結べる。もし、もつと長くしたいと思ふならば、枚数をどちらも増せばよろしい。

以上のものを、交互に細かく割接ぎにするか、又はミシンで接ぎ合せるのであるが、縮めて前後に出る部分は、特に注意して美しい所を出し、接ぎ方も念入りにすべきである。

さて、全部縫ひ合せたなら、アイロンを平らにかけ、これと他の片側とを合せて、芯布を入れて仕立てるのであるが、無地のところが淋しく感じるやうであつたら、単衣帯の餘り布から、模様のあるところを切り抜いて、前と後に配置よくあしらつて、廻りを刺繡でおさへると、一層美的な趣きあるものにするのが可能なのである。

古帯を東京帯に改造 一般に用ひられてゐる従來の帯は、結ぶのにも背負つてゐるのにも、一仕事といふ程の面倒なものである。ところがこの東京帯は、どんな形にも一人で結べるし、軽く締め心地のよい誠に便利なものである。それに忙しい人などには尙更重寶で、一度結んでおけばそのまま直に締められるし、帯の前は二重になつてゐるから、見たところは普通の帯と少しも變らなないのである。

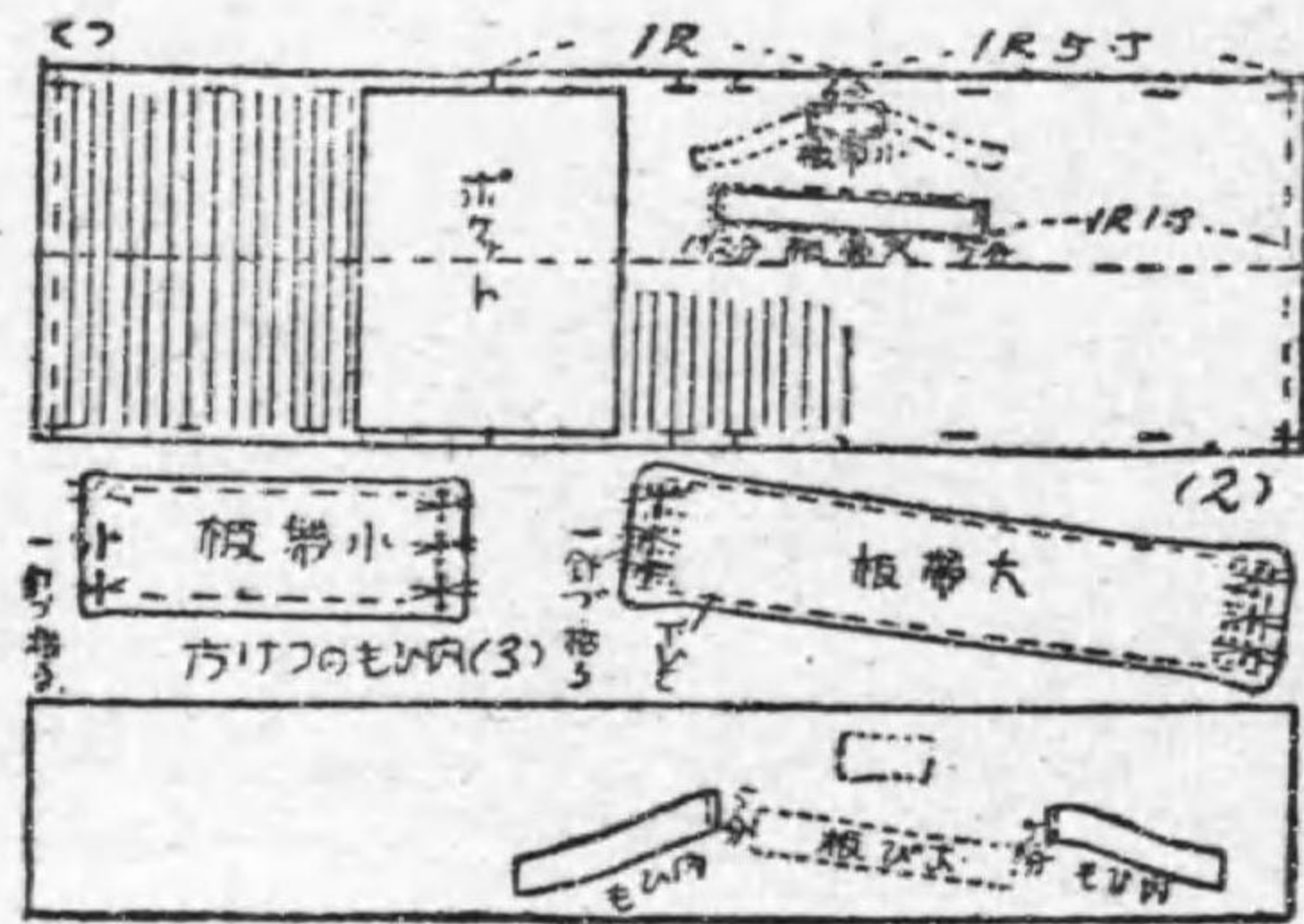
仕立方も簡単で、用布は片側帯一本で一本の帯ができる。腹合せにして、片側に別布をつければ片側帯半分で済むから、有り合せの端布でも間に合ふし、古い帯の廢物となつたやうなものでも、その綺麗になつてゐる部分だけを取つて充分利用し得るのである。便利、衛生、經濟をかねた、新案「東京帯」の作り方は、次の通りである。

▲仕立方「東京帯」は、帯とおたいことの二つの部分からできてゐる。故に、片側帯一本で造る場合には、胴廻りを四尺三寸(一六二、五厘)内外で、その残りをおたいこの部分として、その端から二寸三分(八、七厘)と一寸七分(六、四厘)巾の上紐と下紐を二本とるのである(「裁方圖」参照)もし、厚地のものであつたら、上紐はメリンスなどの別布でつくるとよらしい。

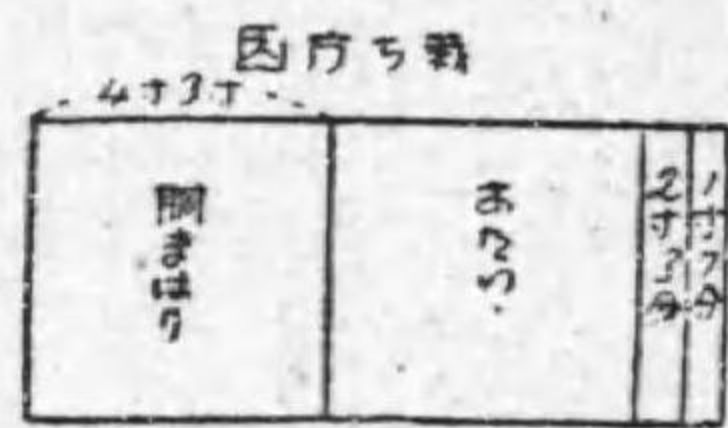
おたいこの部は、普通の帯と同じやうに縫つておく。

上紐はそのまゝ巾六分(二、三厘)位に芯を入れて拵け、下紐は巾九分位、丈はおたいこより二分(〇、八厘)長くして芯を入れて拵けておく。

胴廻りの部は、中表に巾を二つ折りにして、芯布も二つ折りにしてのせ、その上に(1)圖の寸法通りの位置に小帯板をのせ、帯皮の表へは、小帯板と同じ位置に上紐の中心をあて、小帯板の方か

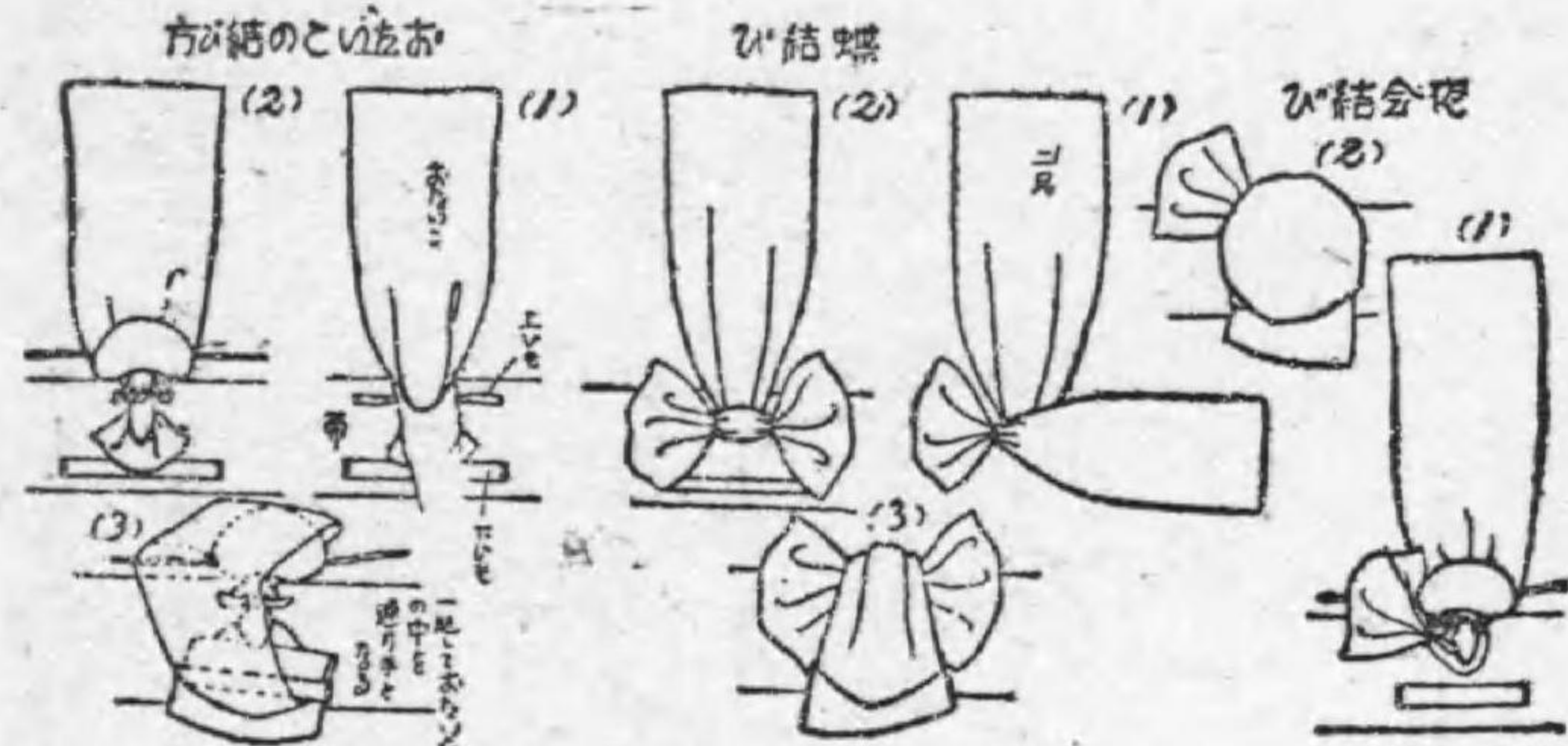


ら一針づゝセルロイドの穴に通して、上紐へは小針に出し、帯板に針を返し、前の糸の端とをしつかりと結ぶ。これを繰り返して、残りの穴も同様にする。



次に大帯板を圖の寸法の位置にのせ、帯皮の表へは同様の位置に下紐をあて、先と同じやうに針を通して結ぶ(2圖参照)この時の糸は、なるべく丈夫な絹糸を、四本位合せて用ひるのである。(なほ、小帯板と大帯板とを用ひずに、上紐と下紐だけでも出来るのであるが、帯板を入れた方が、結んだ時にしつかりとする)

次に、ポケットを帯芯にとちつけ、引き返すところだけ明けてぐるりを縫ひ、芯をとちつけ表に返し、引き返し口を拵けつける。拵けつけたら巾一寸二分(四、六厘)丈一尺(三八厘)位のメリンスに、芯を入れて拵けた紐を二本つくり、下紐より五分



(二種)程へだたつたところの反対の側(即ち帯の内側)に、帯芯も一緒に堅く縫ひつけるのである。

▲結び方 おたいこの端を(1)圖のやうに上紐で結び(2)圖のやうに、帯揚をつけ(この場合「東京帯」の帯揚と帯揚止を用ひると、おたいこのすり落ちる心配がない。この帯揚には三つの穴があいてゐて、帯揚止のさしこみ所によつて、高くも低くも帯の高さを自由に加減することができる)次におたいこの端を下に折り返して形をつくり(3)圖のやうにたれの餘りを下紐にはさめば、恰好のよいおたいこが結べるのである(長い方の手が、胴を廻つてきておたいこの中を通り、手となる)

おたいこが結べたら、下紐のところを持つて背にあて(毎日結びかへないならば、一寸兩端を糸でとめておくと、毎日そのまゝ使へる)第一に内紐を結び、第二に帯揚紐を結び、第三に短い手

を先にまはし、次に長い手をまはしておたいこの中に通し、兩端をもつてひけばどんなにも能くしまるのである。

更に、帯の左側の方に、下前の表側に上から一寸三分(五種)下つたところに細紐を一本、上前の裏側に五分(二種)ほど下つたところに細紐を一本つけておいて、帯を締め上げてしまつてから、その紐を結び合せて帯の中にかくしてしまふと、帯の前があくこともなく、着くづれもせずしつかりとする。

さて、以上でおたいこの結びは完成したのであるが、若い方々で、華やかな夜會結びや、蝶結びにするには次のやうにするのである。

夜會結び……圖のやうに、おたいこ丈を四尺(一五一、五種)位にする。結び方はおたいこの端から五六寸(二〇種)のところを、小紐で三つ位襷をとつて扇形に結び、そこから更に二三寸(一〇種)のところを帯揚をして上紐で結びつけ(1)圖参照)他は普通と同じやうにすると、(2)圖のやうに華やかな帯が結び上る。

蝶結び……おたいこ丈を五尺(一八九、三種)位にし、おたいこを上紐から上を二尺(七六種)位と

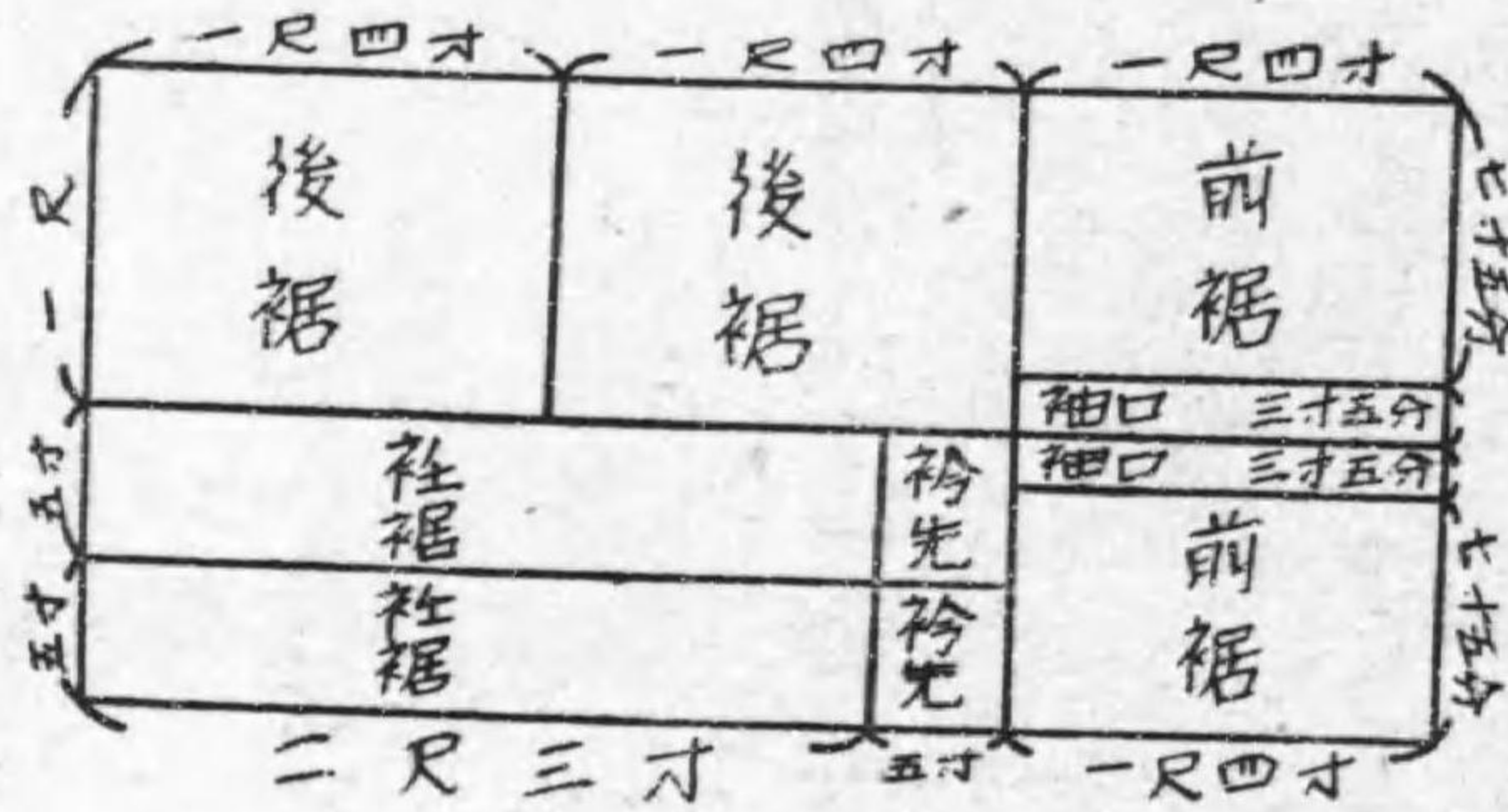
つておき、上紐から下の部分を(1)圖のやうに三つ位襞をよせて小紐で結び、その餘りで更に右側にも同様にして、(2)圖のごとく結び、上にとつてあるおたいを下に折り返して(3)圖のやうな形に結びあげると、盛装の場合にもふさはしい蝶結びが、一人で容易く結び上るのである。

裾廻しの利用法

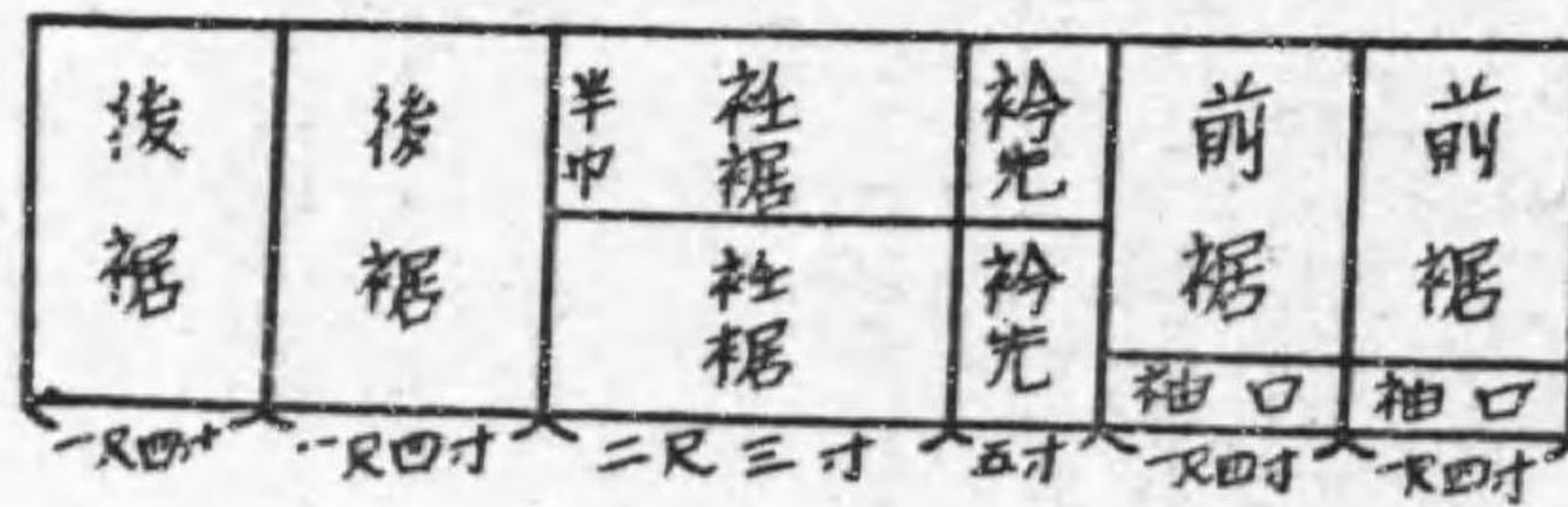
經濟的使用法 裾廻しはメリンスが最も丈夫だが、普通地の粗いモスがわけても經濟的である。さて、裾廻しを永く使用するには、どの着物にも同じ質の同じ色の裾廻しをつけておき、天地左右いろ／＼に繰廻した末、工面の仕方がないといふ時に、二枚分を一緒に襷ぎ合はせて又役に立てるかうすると殆んど飽きる程永く使用される。襦袢の袖口等もとかく切れ易いが、これは最初から布地の真ん中に摘み揚げをしておいて、幅一杯に縫ひ、袖口が切れたり、次々に出してゆくと經濟である。

染直し 裾廻しの地質は傷まなくても色が褪せたりすと、これを染直し又は色揚げすれば再び廻しとして使用される。裾廻しによく用ゐられるメリンスは濃い色でないのは、石鹼水に少量の

圖一第



圖二第



達を加へた熱湯で洗へば、地質も傷まず、元の色がすつかり抜けるから思ひのまゝの色に染められる。

袖口に 着物の裾廻しを縫込んでおくのは全く無益の事である、メリンス等は大抵大幅のものを用ゐてゐるから、前の方等は殊に深く縫ひ込まねばならぬが、これは縫ひ難い許りで裏返しする頃は、峯がすり切れて、その澤山の縫込みは裾廻しの役に立たない、そこでその利用法

としては、この縫込みを袖口に使ふことである。勿論、小幅のでも同様袖口が取れる。裾廻しは大幅物は通常四尺二寸乃至四尺五寸、小幅物は八尺四寸乃至九尺である。その裁ち方は圖に依つて諒解して頂きたい。

胴裏 古い裾廻しの傷んだのは、縫ぎ合せて女着物の胴裏に用ひるがよい、色の違つたの等は黒色にでも染直せば同じ色になるから些しも差支へない。

其他古着類の利用法

新案室内オーヴァー 冬の寒い夜など、子供達の勉強や、主人が書齋に親まれるときに、是非必要な、温くて着心地のよい、新考案になる縮入仕立て室内オーヴァーである。

これは、和洋服の兩用に用ひられ、温かなことはこの上もなく、それに身動きが軽々とゆく。よく學生などが、試験間近かにでもなると、寒いからといつてどてらなど着込んで、机に對つてゐるのを見受けるけれども、これなどは如何にも重々しく見よくもなく、且つ仕事なり勉強なりの能率が上らぬかに思はれる。新案のオーヴァーは、衿を絲瓜に替へると、主婦着としても温かに、甲斐



々々しく働くことが出来るのである。それに、態々新しい布を買ひ求めるの必要もなく、羽織や長着の古物を利用して、結構充分なものが出るのであつて、老人でも、主人でも、子供でも、また主婦でもそれ々の衿の形などを變へて非常に便利重寶に使用することが出来るのである。

(出来上り)

茲には實例として、十五六才の女學生用に、モスリンの着尺、ナ

フトール金巾の裏で作つてみよう。出来上り寸法は、鯨尺で身丈三尺二寸、袖丈(袖附で)一尺一寸五分、袖口四寸、後巾八寸、前巾(裾口で)一尺〇五分、衿巾(背で)四寸五分位である。

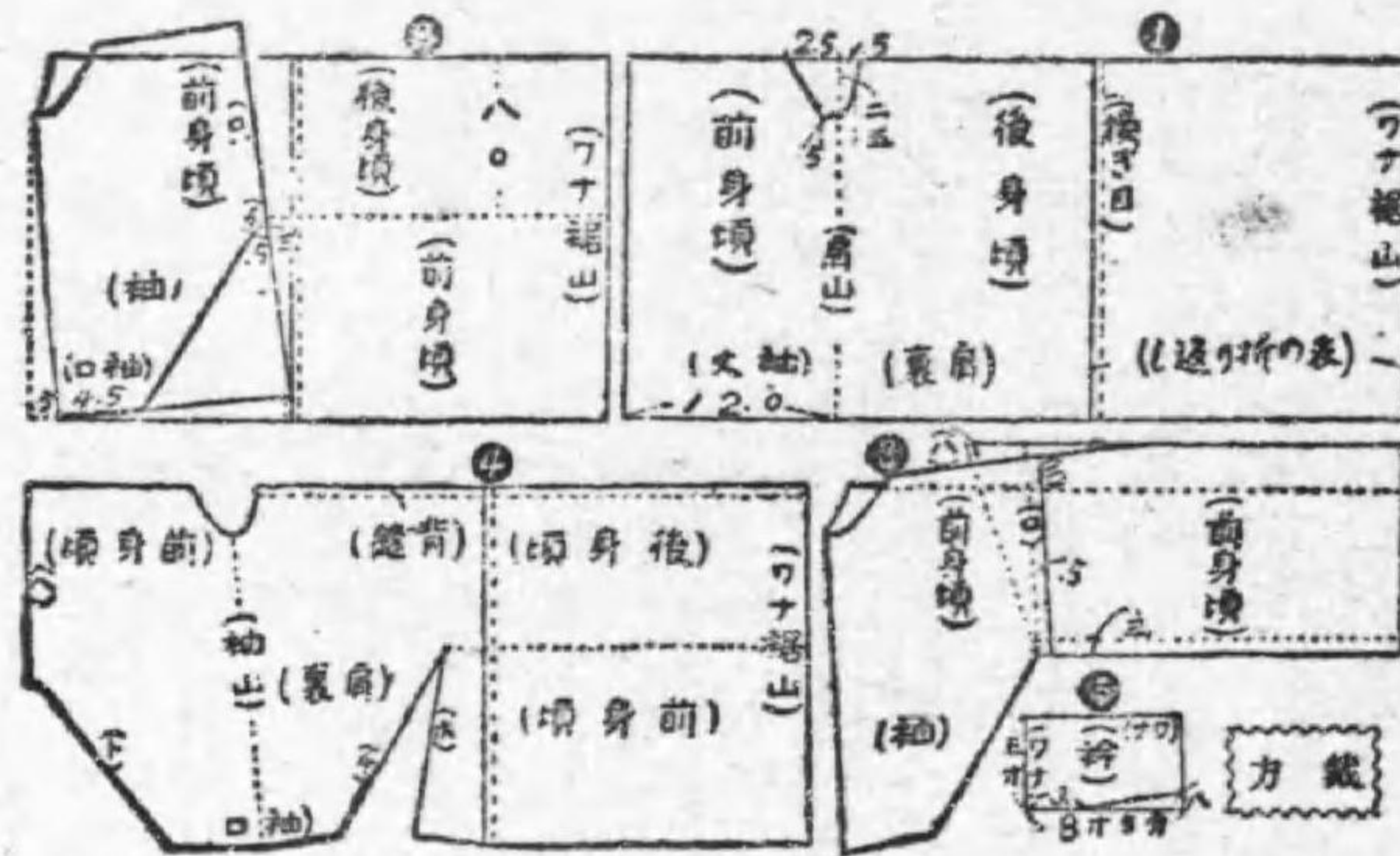
なほ用布の積り方は、大巾を背で縫合せ、兩脇は縫目なしで、袖下から抱に縫目が入るだけであるから、身丈三尺二寸に袖丈一尺一寸五分を加へて四倍し(裏表左右)衿丈一尺七寸を加へて、總丈一丈九尺一寸となるが、表地のモスリン一反は、大巾一丈四尺であるから、五尺一寸の不足となる。この不足分が、つまり裏布となる譯であるから、この寸法で仕立てるのは、表一反(大巾物一丈四尺)と、裏布五尺一寸(大巾物)あればよいのである。古着の利用は、何の布でも、前見

積りによつて入尺をみ、兎に角巾も大巾にし、丈も入尺に接いでおいて、それから新しい布のつもりで裁てば、容易に出来るわけである。

▲用布の裁方 まづ一丈四尺の表布から、最初に一尺七寸(巾のまゝで)の衿を取りのける。そして、あとの丈を眞二つに裁ち切つて、裏表二枚づゝ四布となる。

次は表裏布各二枚づゝを、丈を並縫代で接ぎ合せ、裏布へ片返しにして隠裏でおさへ、二布となる。

次に二布の接ぎ目を中表に合せ(表と表、裏と裏とを合せて)丈を眞二つに折つて、ワナ(つまり裾山)を右手に、裏を上面に据え、左端から一尺二寸(袖丈)と計つて巾いづばいに假縫をしておく(裁方圖(1)参照)そして衿肩明を、假縫は肩山であるから、こゝから後身へ五分、前身へ二寸五分、横二寸五分とし、圖のやうに背から頸へと刺る(肩から五分下までは眞直ぐに)次は(2)のやうに、袖尖で山から五分下げて、肩明から折り、チヨークで袖口四寸五分に標し、後巾八寸にするし、(イ)で巾を三分前身へ出し、布端から五分上げ、袖口へ斜線(袖下)を引く。そして太線通りに、袖口から袖下までを、そくに裁ち切り、五分のところは前身だけを裁つ。



次に(3)のやうに、後巾八寸の標から三分前身へ出して、前身と後身体の上に折り倒し、前身の上部の(ロ)の側の下に重ね、重なりを五分として(ハ)を裁ち落し(ニ)から下方を自然に落すのである。

これを開くと、袖と身頃とつゞきの(4)のやうに裁てたわけである。

衿は巾で一尺七寸にとつてあるうち、巾を眞二つに裁ち切り一方を衿、一方を顎下の見返布にするのであるが、まづ衿を巾二つ、丈二つ折りにして、(ち)のやうに、ワナでない方を背のワナから三寸、附で八分入れて落す。見返布は巾を二つにしておく。

▲縫方と順序 縫方は至極簡單である。まづ縫落し布で、袖口布をかけ(4)圖の重なるのまゝ、裾山二枚に待針をうち、表二

一枚、裏一枚を表衿肩から裾へ、裾山で返し針をして裏衿肩明へと通して背縫をし、きせをかけて左の身頃を開く。

次は裏表各四ヶ所の抱を接ぐのであるが、裏表の各(ホ)へを接ぎ合せて上半身へ片返し、隠し襷をかける。

それから二枚の顎下見返布を、裏布の表に被せてつけ、裏布通りに顎を割り落しておく。これで綿を入れる。

(綿の入れ方は、普通の羽織に入れるやうに、表後身頃の上に、綿を載せ、裏後身頃を上に乗ね、両前身裏へ、綿を折り倒し、前身表を被せるのである)

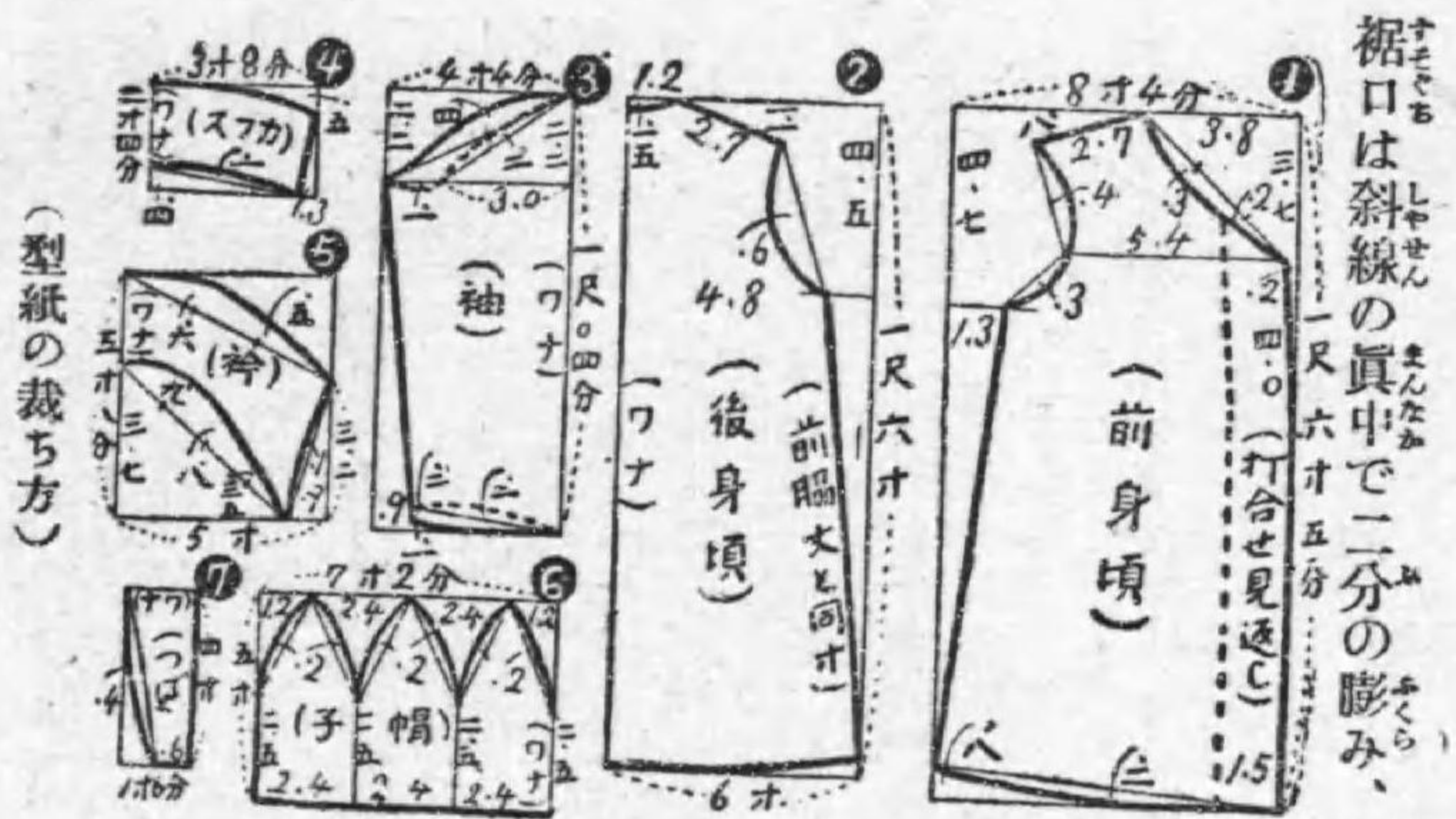
次は袖口を、綿入筒袖のやうに紵け、顎下の抱の縫目の邊までは、見返布の方へ綿をきつちりくゝめ、表の方を二分通り内見に合せ、その下から裾口までは、反対に表へくゝめ綿をして、裏で内見にして紵け合せる。

次に、衿は丈の兩端を、裏の方が内見るやうに、縫合せ、綿を入れて襷でおさへ、表衿と衿割の裏とを縫合せ、裏衿を表衿割へ紵けつける。

これで縫ひ終つたのである。よく仕上げをし、着て工合を見て釦をつけ、内紐をつけて温かに着ることが出来る。(釦掛は残り布で一寸花で作つて縫ひつけ、釦はくるみにしておく)
なほ、場合によつては(る)のやうに、衿をたて、召しても結構である。

七八歳女児用オーヴァーの仕立替 材料の準備……古い、和服用の婦人コート一着(若し新しい布で裁つとすれば二尺幅で五尺一二寸)裏は古いのが使へぬときは、富士絹か瓦斯サテンを二尺幅で四尺三寸、釦は一寸丸二箇、縁廻りにつける一寸幅の兎毛皮を九尺三寸、これは裝飾用であるから、有合せの配色のよい毛糸で、細編三段ぐらゐに編んだ紐を作り、毛起てをしてつけると、少しの費用で美しく出来る。前身打合せと衿の芯は天竺木綿少々、型紙用の紙、縫糸などである。

▲型紙の裁方「出来上り寸法」の型紙を「型紙の裁方」圖のやうに裁つ。
(前身頃) (1)のやうに、幅八寸四分、丈一尺六寸五分の紙をつけ、衿肩明三寸八分、顎割三寸七分下りに幅二分を除き、斜線を引いて三等分し、三分、二分と割り、肩幅は八分下りに二寸七分、袖附はまづ顎下から幅五寸四分をとつて斜線を引き、真中で四分の割、脇下側で四寸七分下げて、幅一寸三分を除き、附の斜線を引いて、真中で三分の割をつける。脇は裾口で八分を切り上げて斜



(型紙の裁ち方)

裾口は斜線の真中で二分の膨み、前打合せ側は、頸下から四寸までに斜線をひいて胸辯をとり、各太線通りに裁つ。尚ほ打合せの見返しを點線のやうに、打合せ側から幅一寸五分に標だけをつけておく。

(袖) (3)のやうに幅八寸八分、一尺〇四分の紙を幅真二つに折り、太線を後に點線を前として裁つ、袖附はまづ二寸二分下りに斜線と横線を引き、後は横線の真中で四分の膨みをつけ前には横線を輪から幅三寸にとつて斜線をひき、真中で二分の膨みと、袖下の方は横線の真中で一分の割をつける。

袖下は前後を同じに、口下で幅九分、丈二分を除いて斜線袖口は後を少々丸味に標し、前は口下で後よりも更に二分短くし(縫ふときは布を伸ばして後と揃へる)斜線を引いて真中で二分の割をつけ、各標通りに前後を裁つ。

(カフス) (4)のやうに、幅二寸四分、丈七寸六分の紙を丈真

二つに折り、附は輪で幅四分、先で丈三分を除いて斜線を引き、真中で一分の割、口下は、外側で幅五分を除いて斜、外側は少々膨みをつけて、太線通りに裁つ。

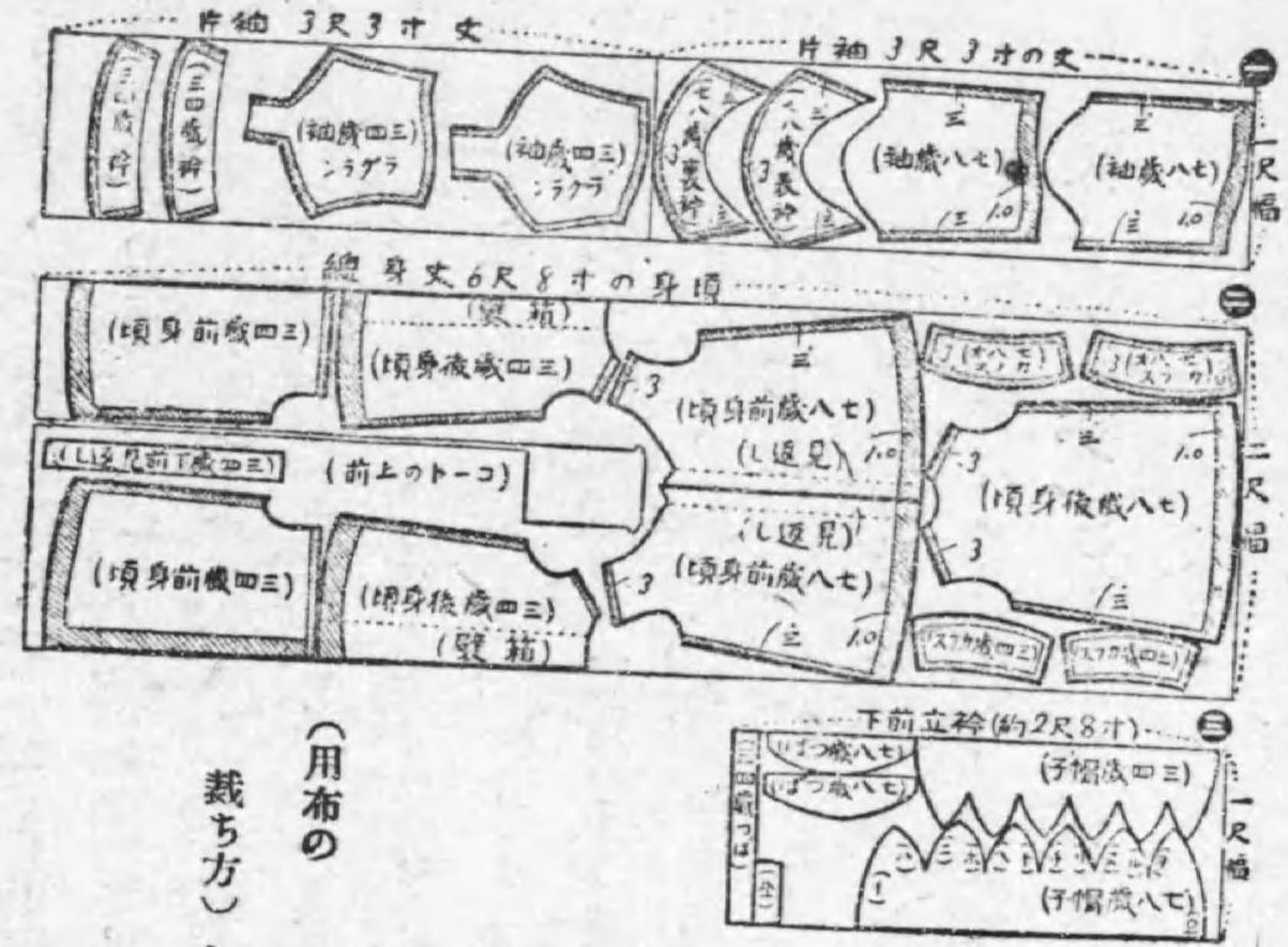
(衿) (5)のやうに幅五寸八分、丈一尺の紙を丈真二つに折り、衿附は輪で幅三寸七分、先で丈九分を除き、斜線を引いて四分分し、九分、八分、三分五厘と割をつけ、衿先は幅三寸二分をとつて斜線を引き、真中で一分の割、外側は斜線をひいて三等分し、六分、五分と膨みをつけて、各太線通りに裁つ。

▲用布の裁方(古い兩袖で)(一)圖のやうに、一尺六寸五分の袖丈として、三尺三寸の片袖分、七八歳の型紙を當て、兩袖の裏表の衿とを、縫代は袖口一寸、袖下三分、附は型紙通りに裁ち、衿は附を型紙通り、その他三分をつける。なほ圖は、古コートがあまり損んでゐないもので、布を殆どいつばいに用つて、前述のやうに七八歳のオーヴァーと、もう一つ三四歳のラグラン袖、**●**は箱髪附のものとし着分と、更に後で説明する女兒用帽子をも併せて裁つたところの圖であるから、注意を要する)もう一枚の袖では、この要領で、三四才の袖と衿とを裁つたものである。

(圖り上來出)



前身頃二枚、カフス二枚を裁ち、袖口、裾口を型紙通りに、前身は打合せ見返布から脇までの分を裁つ。
 ▲オーゾアの縫方(身頃)ポケットは口を七分に折つてまつり、周囲を折り伏せて、兩前身の脇から一寸入れて、肩から八寸五分下りに打合せの方へ口を据ゑてまつり、前身の打合せへ芯を入れて、型紙通りに見返しの分を折る。裏表を別々に、脇と肩を割縫ひ、裏表を外表に合せて、脇の縫目を粗くとち、裾口は内を五六分控へてまつり合せ、前打合せは見返しの上へ、裏を折つてまつる。
 (衿)裏衿の裏へ心布を据ゑ、裏表を合せて附以外の周囲を毛抜き合せて縫つて、芯は縫ひ込みを裁ち切り、表へ返して、裏衿を表身頃の附へ合せて割縫ひ、表衿は、見返布の分を割縫ひにして、裏身頃につく分は、裏布を折り伏せてまつる。



(用布の裁ち方) 古い身頃で、古コートの身丈は、大抵三尺四寸(前後で六尺八寸) 幅も大抵は大幅ものであるから、至極都合がよいのである(二)圖のやうに扱けて後身頃で七八歳の後身頃一枚、前身頃二枚、カフス二枚を、縫代はカフスの周囲三分、身頃は裾口一寸、脇と肩三分、(できれば五分)袖附と衿割とは型紙通り、前身の打合せ側は、見返し分もつゞけて、いつばいに取る。残りで三四歳のカフス二枚、兩前身で三四歳の身頃と、七八歳のポケットを幅四寸、丈四寸五分に二枚を裁つ(古い下前立衿で) 下前立衿は、裏表引返しであるから、袖と同じ幅がある(丈は約二尺八寸) オーゾア(裏用布の裁方) 表の要領で、袖二枚、後身頃一枚、

(袖) 袖下を割縫、袖口は裏を五分控へてまつり合せ、カフスは口下を割縫にして裏表を合せ、幅の両側で裏を各二分控へて縫ひ合せ、カフスを作りあげてから袖口に被せて(カフスを一分出して)口をまつりくける。袖附は袖下を脇の縫目に合せて、表を縫つて袖の方へ片返しに折り、裏はまつり合せる。

(釦と毛皮)「出来上り」圖の各圖を参照して、前打合せは三寸重ね(右が上前)顎下から衿を折り返して、上前は釦孔を顎下から五分下りと、五寸下りに二ヶ所へ、打合せから五分入れて横に明けてかどり、下前は釦孔に倣つて釦をつける。毛皮は、カフス、裾口、前打合せ、衿の縁廻りへ、ぐるつとつけ、(い)圖のやうに、打合せは打紐をつけておくと、着易い。

▲女児用帽子 同じく古コートなどを利用して、手頃な女児用の帽子を拵へることができる。前述洋服の項「七八歳女児用のオーヴァーの作り方」圖の中に、この帽子の裁方を示してある。つまり女児用オーヴァー二着を取つたほか、更に同じ古コートの用布から、帽子をも裁取ることができるのである。(圖は前掲の分参照)

▲型紙の裁方 (6)のやうに丈五寸、幅一尺四寸四分の紙を、幅真二つに折り、縁廻りは三等分し



て、丈二寸五分づゝは眞直、天井の中心側は一寸二分づゝをとつて、中を二等分し、各斜線を引いて、真中で二分づゝの膨みをつけ、太線通りに裁つと、天井の方が六つ接ぎの形ができる。

帽子の顎は(7)のやうに、幅一寸六分、丈八寸つ紙を丈真二つに折り、附は眞直、その反対側で、端を六分にとつて斜線をひき、真中で四分の膨みをつけて、太線通りに裁つ。

▲帽子の縫方 裏表を別々に、縫代はいつばいで(三)圖へ標した(イ)(ロ)の側を合せて後中心として割縫にし(ハ)(ニ)、(ホ)(ヘ)、(ト)(チ)、(リ)(ヌ)(ル)(ヲ)の各側を合せて、六つ接帽子のやうに割接ぎにする。そして裏の天井中心を、孔のあかぬやうに整へ、表は共布で、丈一寸の紐を一分ぐらゐに

(出来上り圖) 一本拵けて、天井の中心へ挟み、しつかり縫ひつけて、つまみにする。

顎布は、裏表を合せて、附以外の周囲を縫ひ返し(裏を少々控へる)帽子布と顎布との前中心を合せて、帽子布の裏表で顎布を挟み(帽子布の表と裏の裏とが重なる)前の縁廻りを四枚縫にして返し、後側を拵けて合せて、顎を表側へ折り返す。兎の毛皮は幅二つに折つてまつると、毛がふう

はりするから、頸の外廻りへ體裁よくまつり「出來上り圖」のやうに恰好よく仕上がるのである。

座布團 古長襦袢は上手に接いで、座布團にすると綺麗である。

古布の利用法

長襦袢

一概に古布と言つてもいろいろ種類があるが、先づメリンスや縮緬等の色の褪せのや、染色の悪いのや、一寸使ひ途のない古切を集めて、そのいゝ所だけを切取つて縫ぎ合はせると長襦袢が出来る。これは軽くて温くて大變着心地がよい。其他種々雑多の古布を縫ぎ合はせて長襦袢を作つても丈夫で永く着られる。

胴着

胴着を古布で作るには、絹の古布を縫ぎ合はせたものの方が軽くて温くてよい。

布團側

古布の中でも木綿物は雑巾にもなるが、絹物やメリンス類ばかりは一寸使ひ途に困る。勿論袖が切れれば胴に切り代へるとか丈の短くなつたのは羽織にするとか、いろいろ出来る丈の工夫を盡した後故、無理もないが、それにしてもなほ所々に丈夫な部分が残つてゐるから、之を切り

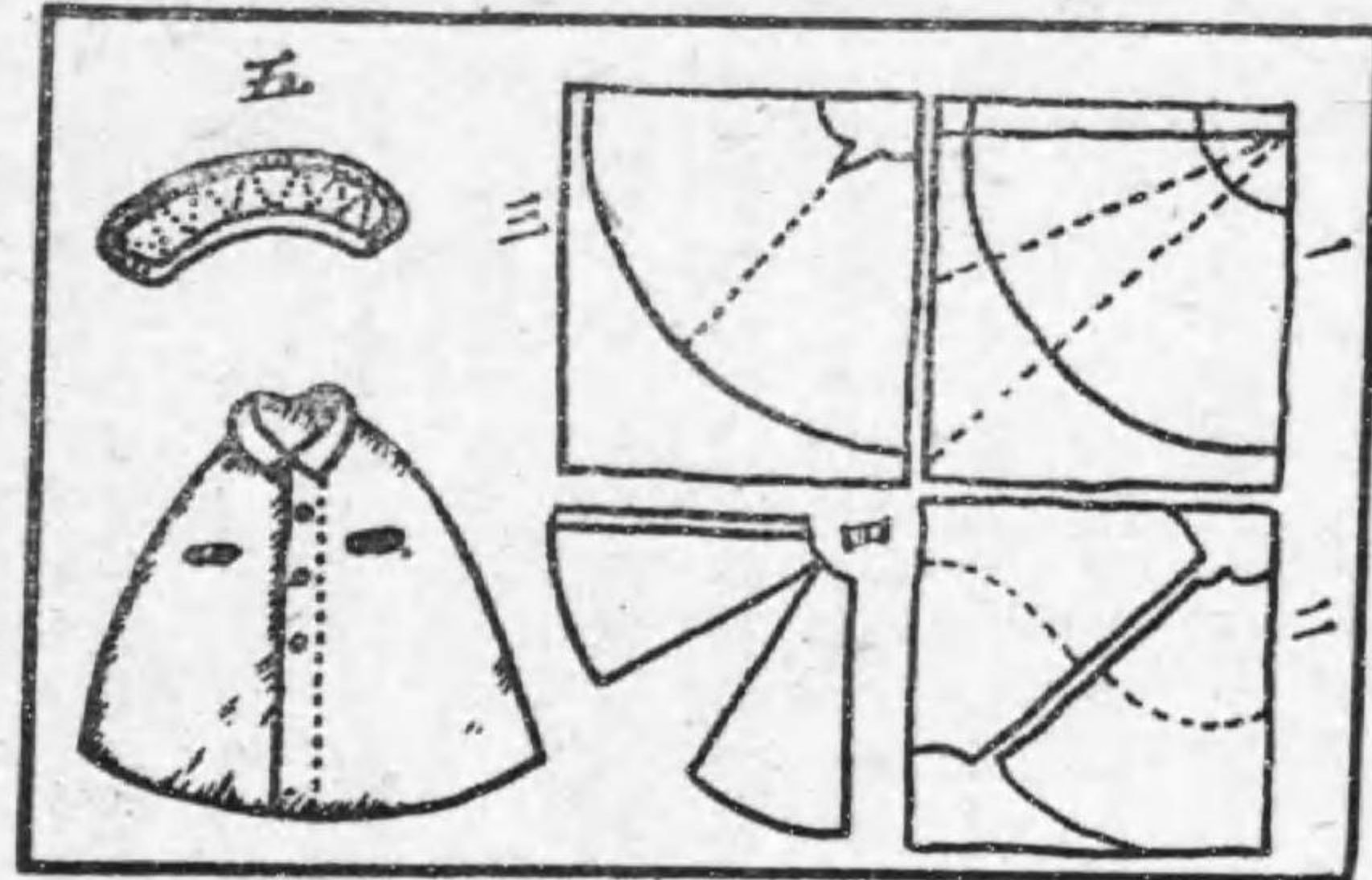
集めて座布團にするがよろしい。着物一枚分では逆も纏まらないから、三枚か四枚たまつたら、あつちこつちの丈夫な部分を、一定の形の寸法、例へば四角とか三角とかいふ風に一樣の形に切り揃へ、色の配合をよく注意して縫ぎ合はせれば、形が皆同じ様に出来るから、そこで裏へ新モスか或は色木綿をつけると、その布地の種類によつては随分美しい表となる。尤も普通の布地でも、左程に見苦しいこともない。尙、布團又は座布團にするには決して絹に限るといふ次第ではなく、メリンス等でも結構である。

布團の心

敷布團は兎角綿が傷み易いが、これは布團の芯に古布を入れると丈夫になる。つまり縫直し等の際、古い布團側なり又は古布を綿の真ん中へ芯として、包み込んで仕立てると、綿の切れたり傷んだりする憂ひがない。

マント

ネル等の着古して、地の薄くなつてゐるやうなものは、肩當ての様に二重にすると、大層工合がよい。それで裁つにも布を直接に切るのには間違ひ易く、殊に肩を二重にするの等は、どうしても一度新聞紙で型を切つて、それを布にあてゝ切らないと、裏と表がよく合はなかつたりして宜しくない。それで型の切り方を次に述べるが、マントも正確に裁つには、ぜひとも洋服の元型



點線を引き、次は下の印であるが、

を用ひなければならぬので、洋服の廢物利用の積りで作るマントであるから、元型から作つてかゝる様では少しく難かしくなるかう、次の様な簡単な割出しにするがよい。圖のものは二才の寸法であるから、その上の年の者は、終りに記してある寸法で三四五六七八才といふ様に自由に延すのである。(一)圖は後前の型の割出し方である。最初に新聞紙で正四角を作る。これは一二才から四五才迄は着丈が一尺五寸内外であるから、二尺四寸位の正四角が出来ればよいのである。圖の上の方は前の合せ目で、八分と印しをつける。次に下の線は後の襟線より、上の線より二寸五分とする。次に(二)圖は前の脇下の線より、三寸五分とする。そして、この右と左とを點線でつなぐ。二の印をつける。この印と上の線との中央にこの點線を引き、次は下の印であるが、これは點線を交叉點より三分程はなしてホの點線の上につけ、

の如く丸味をつけて裁つのである。次は一の線上でこれは中線より一寸五分の所として線より兩方へ三分づゝの印しをつけて切り込みを入れる。これは肩の形を造るためで、これが出来たら、口の印しより下に計つて着丈の印しをつける。次はホの點線から二つに折つて、上の線に又着丈の印しをつけ、更に上の線と下の線を合せて折り、ホの上に着丈の印をつけて圖の如く丸く切る。最後にホの線を切りはなしておく。これで後、前の型が出来た事になる。次は襟型であるが、これは今二枚に切つた前後の型を(四)圖の如く肩で合はせて、前脇下の線りの所から三分下に、そして三分に入つた所へおいて(四)それから肩の切り目まで丸味のある線を引いておき、次にヌと肩の切目につける。背の襟元から一寸三分程の所にルの印をつけヌとルとの丸味をつけて連絡する。その次は、(四)の印しに尺を當て、脇の切り目と平行して線を引き、その線の上に(四)の上より二寸として、オの印をつけて置く。そしてリからオに、オからヌへ直線を引いておいて、上の方の間へ點線の様に開よく襟の丸味をつける。これで襟型が出来たのである。

以上三枚出来たら、布にあて、切るのであるが、ネルの着物ならば、後ろの大巾が餘り損じていないとすれば、圖の様に大巾を横口二つに折つて、脇の縫目なしに取る事が出来る。これはマント

の丈が一尺四五寸のものなればであるが、それより長い場合は(二圖)の如くに裁ち合はせるがよい。これは表の裁ち方であるが、前に述べた様に肩を二重にする時は、ネルの袖や前身から取る。この時、型の中程へ印をつけておくのである。中程の印とは(二圖)の中央の線である。それから襟はネルの袖又は前身から取るが、一枚の芯をこの型通りに切り、あと裏表二枚は周圍に縫代を二分程つけて裁ち切る。前身、後身共に縫代を三分づゝつけて裁つ事を忘れてはならぬ。

縫ひ方は先づ襟の裏地へ芯の動かぬ様に綴ぢつける。そして中表に裏表の布を合せ(五圖)の如くに芯の周圍一方丈あけて縫ひ、表を返して鍔をあてゝおき、ミシンのある者は飾りミシンをかけておく。それから身頃の肩を合せ、又脇に縫ひ目のある場合には脇も合はせる。又裏地の肩も合せて、縫ひ目は開いて鍔をかけ、表の方は千多がけで縫ひ目を押へておく。次は肩裏と表地とを重ねて下前と上前とに見返しをつける、見返しとは前の合せ目の裏の事である。かうして出来たら裾をまつりつけるのであるが、丸みの勝つたものなら、所々に少しづゝ皺をよせ乍ら縫ふ。その次は襟をつけるのであるが、襟は裏の方につけて、表布を後ろから縫ひ目の上にまつりつけるのである。そして、上前の見返しで釦穴をあけ、下前に釦をつける。これで大體出来上つた事になるが、手を

出すかくしの様な穴を前に明けた方がよいと思つたら、子供の手の巾より一寸廣くあけて、何か同じ色の布で縁を取つておいてもよい。又一才から八才までの延し寸法は左の通りである。

前	二才	三四才	五六才	七八才
後	二寸五分	二寸七分	二寸九分	三寸二分
肩切目(肩巾)	一寸五分	一寸六分	一寸八分	二寸
肩切込み	三分	三分	三分	四分

この様な順で十才十五才と延ばして行けばよい。然し廢物利用の事であるから、あまり大きなものは取難からうから八才迄としておく。

寝冷知らず これは何に依らず、有合せの古布で出来るが、子供達には一枚下に肌襦袢を着せて、その上からネルの古布で作つた寝冷え知らずを着せると大へんいやうである。その作り方は普通の襦袢と同じ様に丈を膝頭までに作り、後身を一尺内外に長くして、前に釦を二つつけ、後身の長い部分を両方から折つて、二寸五分程の巾に三角形にして兩端に釦穴をかゝり、前身の釦をか

ける様にするのである。釦のつけ所は子供の肥つてゐる加減で違ふから、後ろが出来て釦穴がかゝれたら、一度子供に着せて見て、程よい所に釦をつけるがよい。

包物 絹地の古布の小さいのは櫛や笄や指環等を包むに適してゐる、大きいのは掛物其他大切な品物等を包んで、更に箱なりそれらの容器へ藏つておくと、中の品が傷まず、保存上極めて有効である。

帯心 木綿の古布の使ひ途のないのは、長くて丈夫さうなのをよつて、糊張しておく帯芯として結構用ひられる。丈の短いのは雑巾にでもするより仕方がない。

カーベツト ぼろや不用の切れ屑を、細く長く裂いてつなぎ、長さ二尺五寸位巾一尺二三寸に裏編み表編みで編むと、小さい面白いカーベツトが出来来る。湯殿などに敷くには好適である。きれいな配色のものなら、どこにでも使はれる。

染料を取る 紺地の木綿着物の古びて役に立たなくなつたのや、襦袢からは藍が取れる。これらの古布を煮つめて紺地の染料を絞り出すのだが、もし襦袢許りの時は、大釜の中へ入れ、稀硫酸を注いで煮詰める、さうすると布の繊維が溶解して藍ばかり残る。この藍は水で洗つて再び染料に

使用する事が出来る。又、この時紺を取り去つた後の布地は、いかにも柔かたで、油等を拭き取るに妙であるから、工場等では相當の高値で引取つてくれる。

細引 古布の中でも、雑巾にするより外はないといふ様なものは、どんな地のもでも構はず細く裂いて三つ編み位にして細引とする。わけても海老茶袴の様な古地は白地の端布と一緒にして三つ編みにすると體裁がいゝ、かうしておくといつても何かの役に立つて、殊に土用干等には、麻繩等と違ひ、着物を損する様な事なく大へん重寶である。

絨氈代用 絹物やメリンスの使ひ途のなくなつたのは、幅三寸位に引裂いて少し撚りをかけて巻いて貯めておき、これを横糸にし、縦糸には木綿を用ひ、色の配合を注意して粗く織ると一寸絨氈まがひの極く厚い布が出来来る。これを炬燵の上掛にすると仲々丈夫で且きれいだ。乗馬する方の家庭だつたら、之を馬の脊にかけて鞍下の毛布代りにするのもよい。

ハタキ メリンスの兵児帯や細紐等の古くなつて使へなくなつたのは、細く裂いてハタキにする

と、しなやかで軽くて大へん使ひよい。

産褥用 これはお産の経験のない婦人方の御参考になると思ふ。襦袢はどんな小さいのでも集め

ておいて、一つの箱なり行李なりに保存しておき、妊娠七ヶ月位になつたら、之を残らず熱湯で消毒し、天日により乾し、厚い油紙を一枚擴げ、その上にこの消毒した襦袢を平らに並べ、上から上から之を重ねて、約五分位の厚さになつたら、その上には脱脂綿を一體に敷き、又その上に新しいガーゼをのせ、何れも油紙と同じ大きさに小口を揃へて、廻りを一寸位の縫目に綴ぢ、眞ん中には一文字に綴ぢて、中の襦袢や脱脂綿の動かぬやうにする。かういふのを二枚或は三枚こしらいておくと、一度の出産にも十分である。襦袢もかういふ風に用ゐると、極めて有効故、小さなものでも保存して置く必要がある。

小布・端切の利用法

圓形クッション ビロードの黒と黄、ペロアリーの茶と鼠の四色、子供洋服の裁落し布である。直徑一尺三寸の圓形に紙を切り、四等分して四枚の型紙とし、上記四種の表布を各二分の縫代で裁ち、裏布も絹の裏地残りをも、表布の要領で裁ち、みな割接ぎにする。

次は布置刺繡を、表布各色を三寸圓に裁ち、適宜の配色で表布にあて、周圍を縫ひつけて太絲、

(縮緬の耳をほつした糸)をとち繡にする。襦は三寸幅、表裏の側を縫合せ、裏側を少々残して羽を入れ、口を紘けて出來上る。キヤラコの心を入れると羽が吹き出さない。

また、スポンジクロースのエンジ色と、鶯茶の裁落し布を接合せて、デーエムシーの黒、茶、空などの配色で、草花を簡単に刺繡する。これは十枚接合せの圓形であるから、直徑一尺三寸の圓形に紙を切り、更に十等分して裁ち切り、布をこの要領で裁つて、二色を交互に接合せ、エンジ色の方へ片返しにする。刺繡は、花を鎖のち繡などにし、あとは平繡でよろしい。裏側は表側よりも四寸廻り大きく圓形になし(有合せ布を接いで)周圍を表側と揃ふやうに、縫ひちよめて、ギヤダを平に寄せ表側と縫ひ合わせる(綿を入れる口を残して)次に、綿を入れて口を紘け合せ、縫目へぐるつとコードをかぶりつけければ出來上る。

角形クッション セルの子供洋服地の裁落し布で、クリーム、蜜柑、若草色の各二枚、都合六枚を接合せて表側にする。まづ鯨一尺に一尺二寸の長方形に紙を切り、更に片隅を基に五本の線を引いて切り六枚とする。次はこの紙によつて、接合せの縫代を二分づゝつけて、各布を裁切り、小針に接いで、縫目はみな同じ向に片返しにする。裏側は、勿論表側と同形だが、羅紗の小布を接合

せたものなどもよろしい。

まづ、裏表を縫合せ（引返し口を残して）好みの厚さに、パンヤを心に入れて引返し、口衿けをして、周囲にはコード（黄色の打紐だけは新物）をかぶりつけるのであるが、片隅はかたつむりのやうに巻いてかぶり、これで、すつかり出来る。

座蒲團・肘突

ビロードの黒、エンヂ、鼠の小布を小豆色のペロアの有合せ布に、布置風に接ぎ、二本の細線は斜布の残りを利用する。一寸手数のやうであるが、おもしろいものが出ると思ふ。裏側も子供服の裁屑を、約二十枚も接合せたら、見事なものである。

又メリンスとか、銘仙とか又はフランネル、何でも構はないが、裁ち残りの布は、五分でも一寸でも取つておいて色合を巧みに縫ひ集め、之を表にして座蒲團や子供の學校で用ひる腰掛蒲團や肘突等が出来る。

足袋

（縫代一分の一針ぬき）甲の裏表を合せて（チ）に紐を挟み、（ハ）（チ）（ヌ）までを縫つて引き返しておき、外甲も（リ）に紐を挟んで（ト）（リ）（ル）を縫ひ合せ、踵は内甲（ヌ）（チ）を、外甲（ル）（ワ）で挟んで四つ縫にし、足頸から三分の一下りに三分の紐通し孔をあける。次に内甲（ハ）（ハ）を



愛い赤ちやん足袋が出来上がる、内紐を外から廻して、紐通し孔をくぐらせ、内股の際で外紐と結び合せる。尚ほ紐は、外紐を三寸、内紐を五寸の丈に、なるべく細く新けておく。表裏とも用布は、幅も丈も、僅か七寸内外で出来るのだから、大人の古足袋や、有布などを利用して、お作りになることをお勧めする。

乙女針箱

箱は分厚な木の空箱を心にし、布は小豆色鹿の子の古手柄、藤、紫、空色、緑などの半襟を、無雑作な形に配色をみて、裁つて接合せ（蓋より六七分廻り大きく）實の方は布を縦に接ぐ。次に、蓋の表に綿を少々盛り上げ加減に載せ、布をあて、周囲を裏側へ貼りつけ、裏側を紙

外甲（ト）（ロ）で挟んで、やはり四つ縫にし、底附だけは、さきに甲の爪先一寸七分の間のイセ込を縫縮めて裏返し、その中心と底布の爪先中心（ニ）を、踵も両方の中心を合せて返し縫にして表返す。右足もこの要領で縫つて一足を揃へ、可

(化粧品包紙) でべたに貼り、その際摘み(皮で)をつける。實もこの要領で貼るのであるが、蓋と實のつなぎを入れる。またあとで蓋のすれぬやうに止めを、玉釦でも利用してつけるといい。

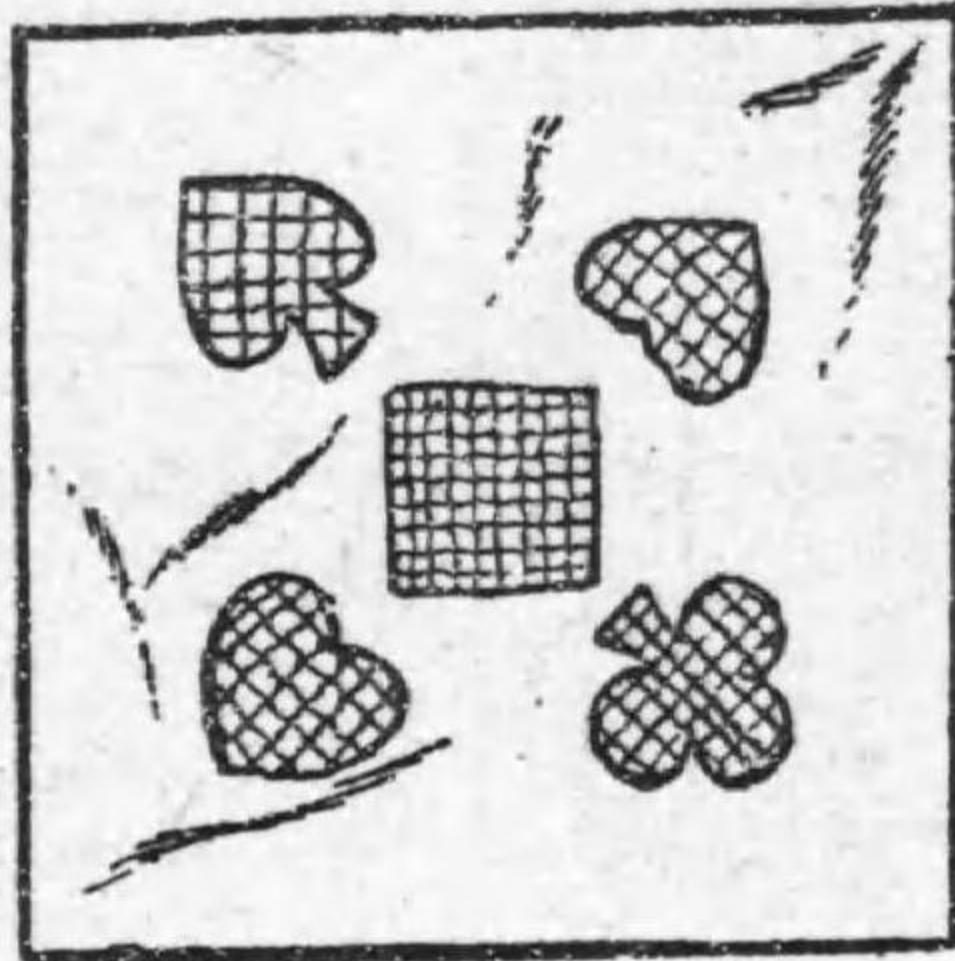
テーブル掛 中央の斜接を、結城紼と茶色ベロアリーの小布割接とし、その兩側はエンジ系のツキードと、エンジ薄手羅紗の、いづれも端布を接合せて割り、裏は納戸木綿の裏地一幅半を接いで額仕立に仕上げる。ちよつと濛い趣味あるものが出来る。

火鉢敷 メリンス、金巾、木綿などの古布をしごいて、三つ組になし、それを六角に形をつけながら、木綿糸でかどり合せてゆくと、自然に一箇の敷物ができる。大きさ、形などは御隨意である。

スリツバ これもだいたい、右の火鉢敷の要領で作ることが出来るが、この方は、メリンスだけで作ると、一層濇いわけである。まづ底から丈を定めて中央とし、くるくるとかどりつけ、爪掛は別に、最初にうづを作つて、これを基に、恰好をつけながらかどり後で底へかけてかどりつける

夏座蒲團カバー 廢物といふほどのものではないが、有合せの模様布などを様々な形に工夫して、白い布の上に圖案をあしらつて作ると、夏向きの清々しい座蒲團カバーが、至極手軽に出来る。

図り上系出(口)



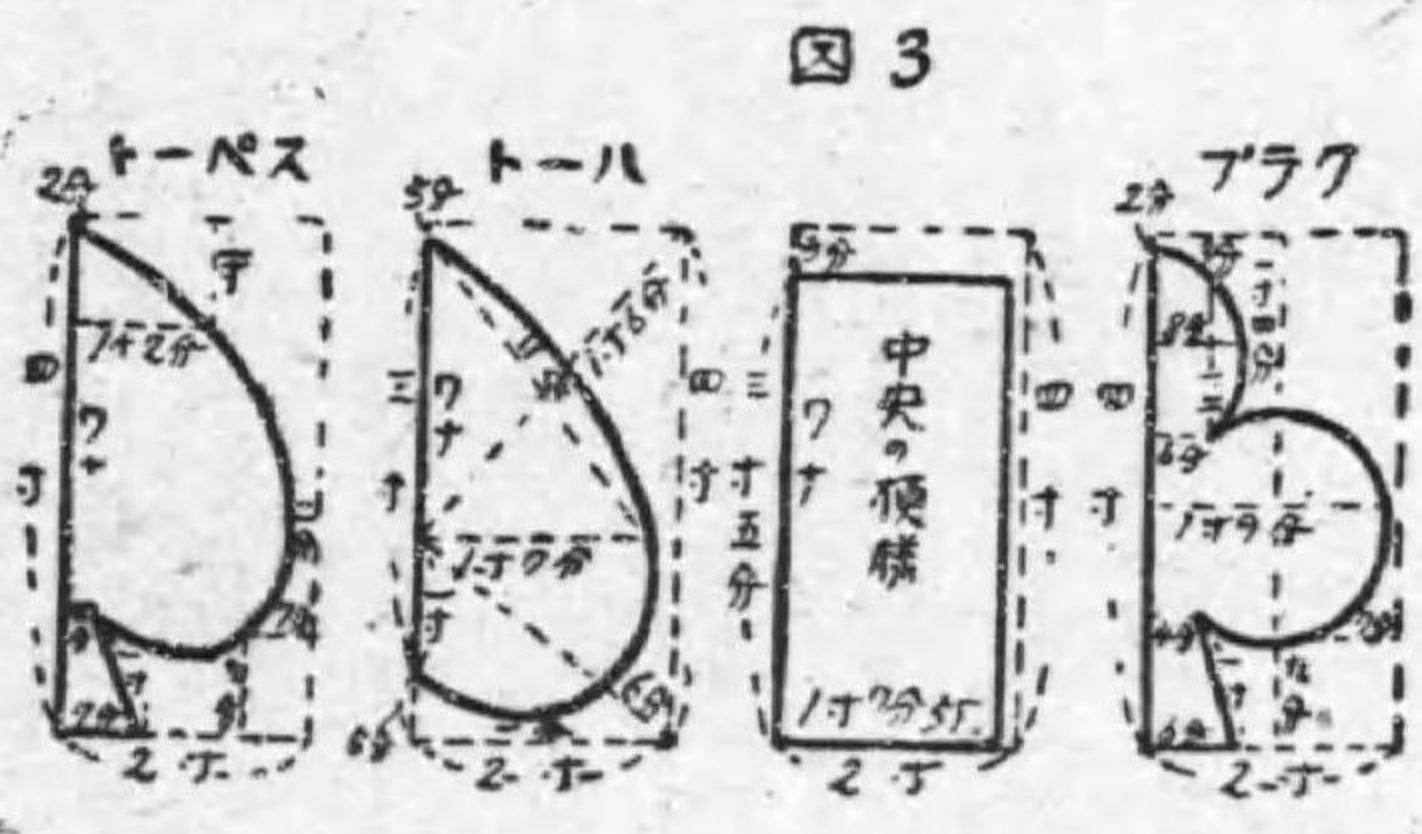
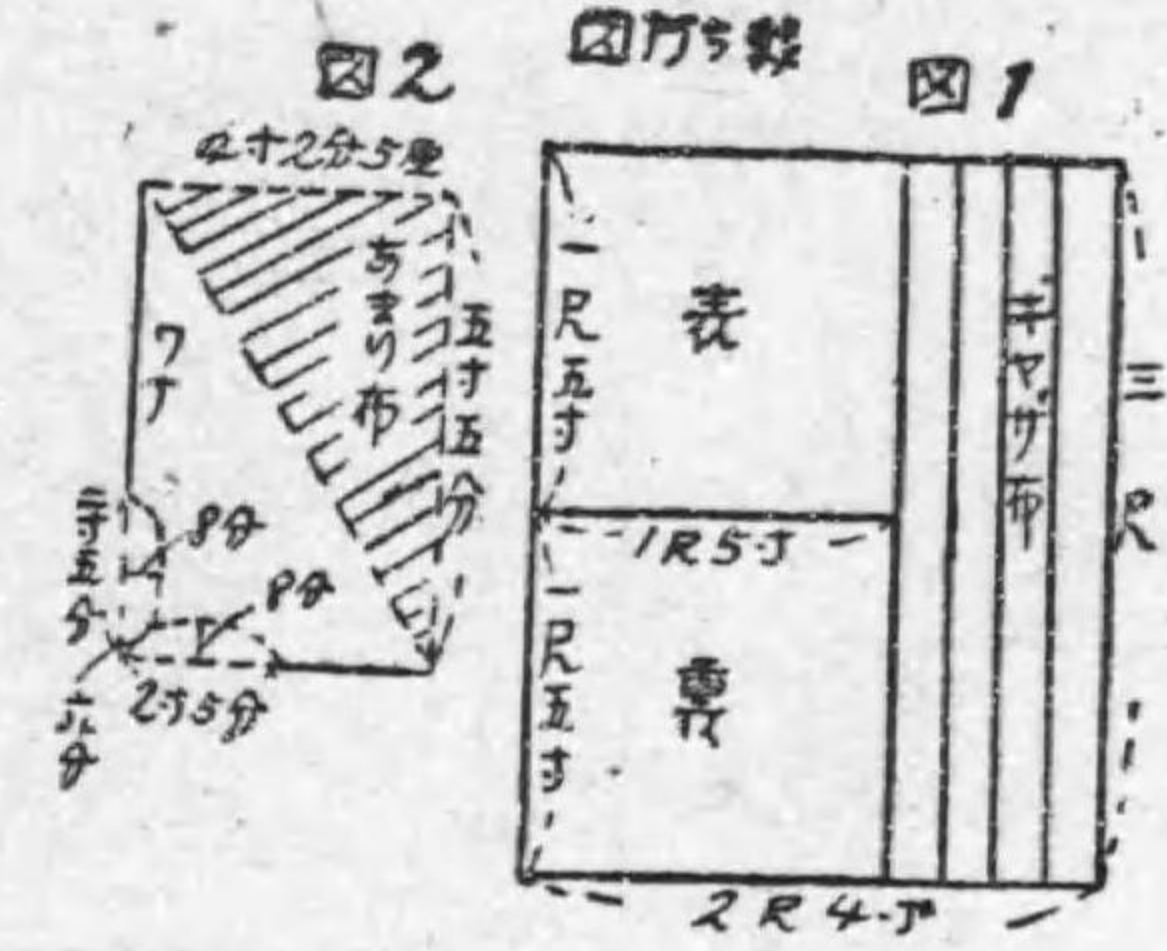
図り上系出(イ)



ものである。これを好みの浴衣地や、子供服などの餘り布を使つて、いろくんに應用すれば、一層趣味のある面白いものが出て来ると思ふ。

▲材料 としての用布は、カバーをかける座蒲團の大きさによつて、それく異つてくるが、出来上り圖(イ)のカバーは、襷布共にキヤラコ二尺四寸巾(九一纏)のもの三尺(一一四纏)と、模様布は丈一尺一寸(四一、六纏)巾八寸五分(三三、一一纏)のも一枚、とき色布六寸角(二一、八纏)一枚と、外にスナップ等を用意する。

▲裁ち方 (1)圖のやうに、表と裏の布を裁ち落して、残り布を周圖の襷布にする。模様布は、縦に二つに折り、更に横に二つに折つて(2)圖の寸法通りに標をつけて切り落とすと、菱形の中に花形が出来る。



(ロ)のカバーは、襷がついて居ないから、布を無駄なく使ふために巾一尺五寸(五七糎)を三尺、(一一四糎)と模様布六寸角(一五糎)のもの五枚、スナップを用意する。

▲縫ひ方 先づ菱形布の端と花形の周りを一分五厘(〇、六糎)ほど裏に折つておき、花の感じを出すために、とき色布を表布の中央にのせ、その上に前の菱形布をのせて假縫をして、花と菱形布との周りに飾りミシンをかける。

次に襷布を一寸五分巾(五、七糎)に切り、座蒲團の周囲の約二倍の長さに縫ぎ合せて、一方の端は細く三つ折にしてミシンをかけ、スナップを五ヶ所位につけると(イ)のカバーが出来上がる。

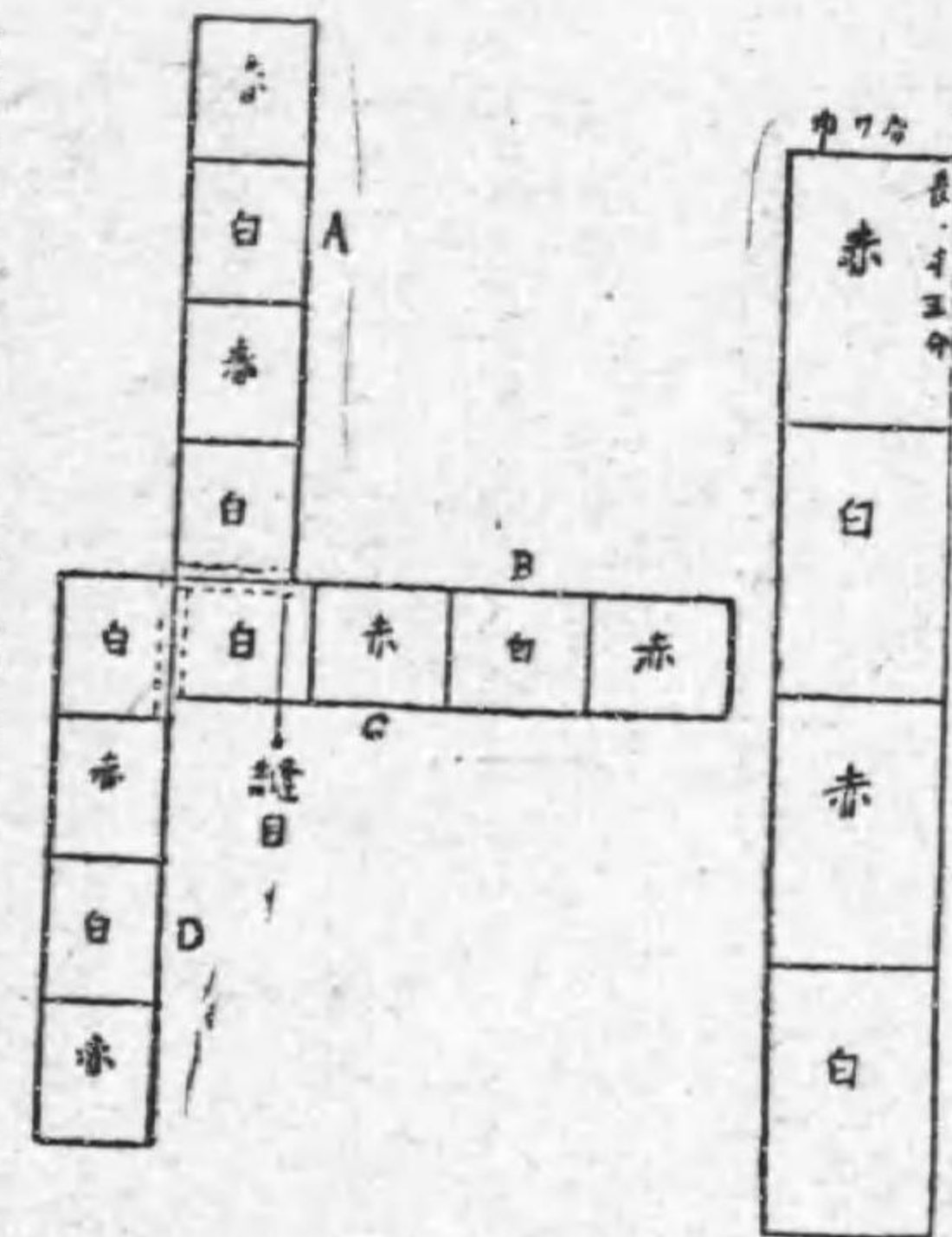
初めに五枚の模様布を(3)圖のやうに、トランプの形に切るのであるが、そのうちハート形を二枚作る。

このトランプ模様五枚の周りを、一分五厘(〇、六糎)ほど裏に折り、出来上り圖の如く表布の位地において周圍にミシンをかけると、表が出来上がる。

仕立方は(イ)のカバーとほとんど同様であるが、手縫ひでする場合は、縫目の糸はぬやうに、全部返し縫ひにする。またカバーは洗濯を激しくするものであるから、模様布を用ふるときは、洗つても染色の出来ないやうなものを使用することである。

圓形手提 縮緬の白と赤などの小布があつたならば、先づ布を巾七分、丈一寸三分に切り、皆同じやうに、その大きさの形を、白赤各二十四枚づつを裁ち切る。そして圖のやうに白と赤、白と赤との交互に四枚づつ接ぎ合わせる。かういふものが都合十二本出来る。

次に白いところを底として、圖のやうに一方の巾と、一方の縦の方の底とを合せて、一分の深さに細かく縫ふ。そして、その糸を續けて、A Bの所を合せて、矢張り一分の深さに縫ふ。次に、底の白い部分の中の方に、他の布の縦の所をあて、縫ひ、C Dを合せて縫ふ。

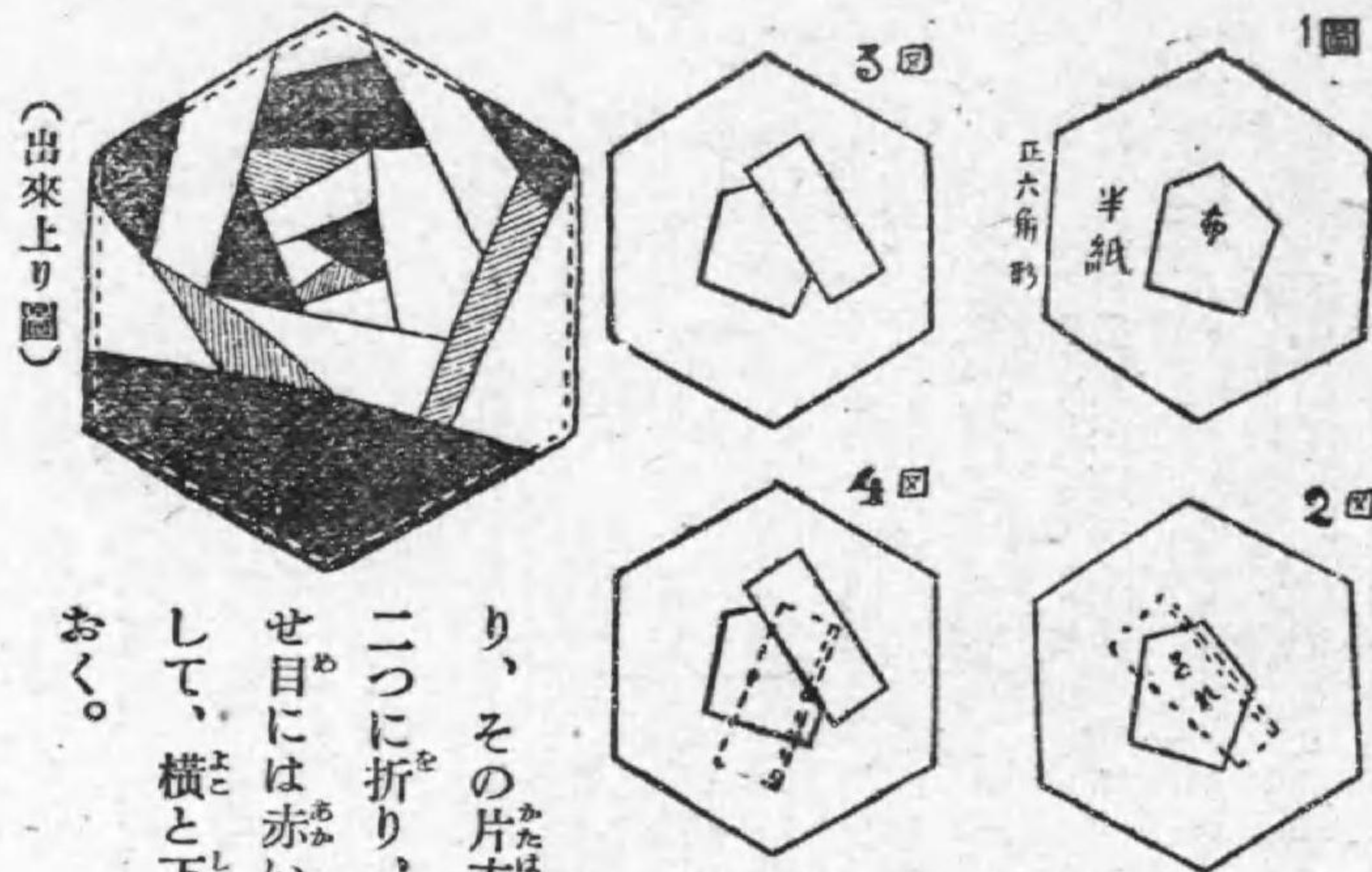


かうして、十二本の布を全部縫合せると、恰度、底は風車のやうになつて、十二本の布は斜になり、綺麗な丸い手提の形が出来る。

そしたら表に合せて、白い布で裏を縫ひ、口には同色または配色のよい布を、巾一寸に切つて二つ折にして裏通しをつける。簡単で、しかも中々美しい袋が出来るのである。

花模様の敷物 縮緬又は羽二重などの、極く小さくて仕方のないやうなものでも、丹念に集めると、大は布團から小は花瓶敷に至るまで、何にでも應用の出来、極めて美しいものが出来るのである。故に、假へ五分四角の小さな端布でも、決して無駄に棄てることなく、これを丁寧に集めておかなくてはならぬ。

圖は、これらの小布を利用して、バラの花形に集め、それを更に三枚、或は六枚集めて縫ひ合せて裏をつけたもので、小は花瓶敷になり、もつと澤山集めると、クツシヨン、座布團になり、更に

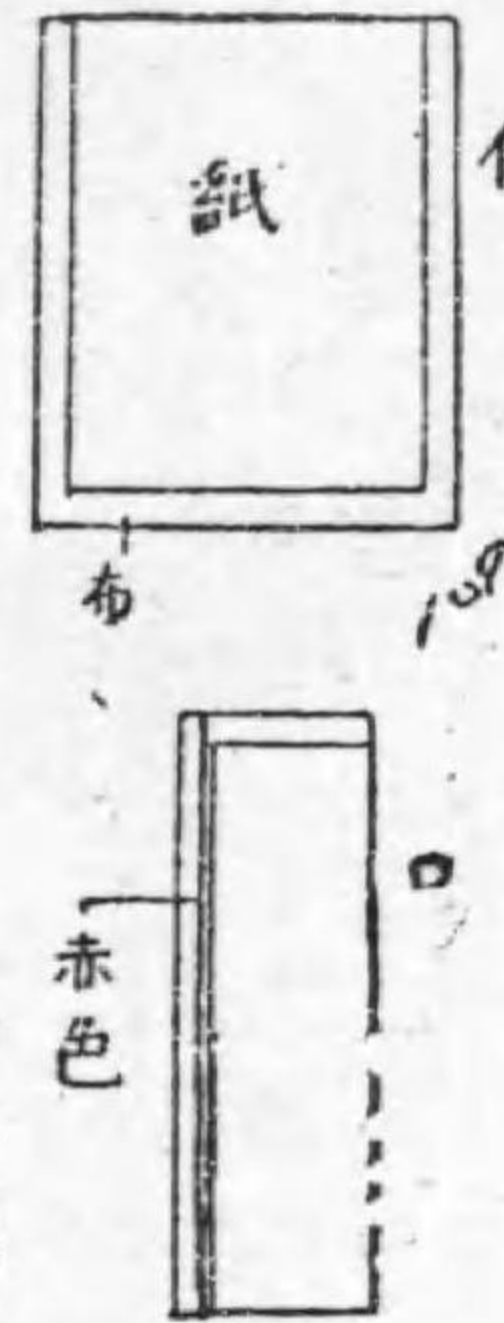


掛布團にする事も出来るのである。

作り方は、先づ半紙を二寸五分の六角形に切り、中心の芯として小さな布をおき、他の布切を二圖のやうにあて、点線のところを縫ひ、三圖のやうに布を表返す。次にまた四圖のやうに、別の布をあて、縫ひつけるといふ順序にして、ぐるぐると布を縫ひつけると、出来上り圖のやうなバラの花形が出来る。出来るだけ、配色よく布を合すべきである。

揚子さし

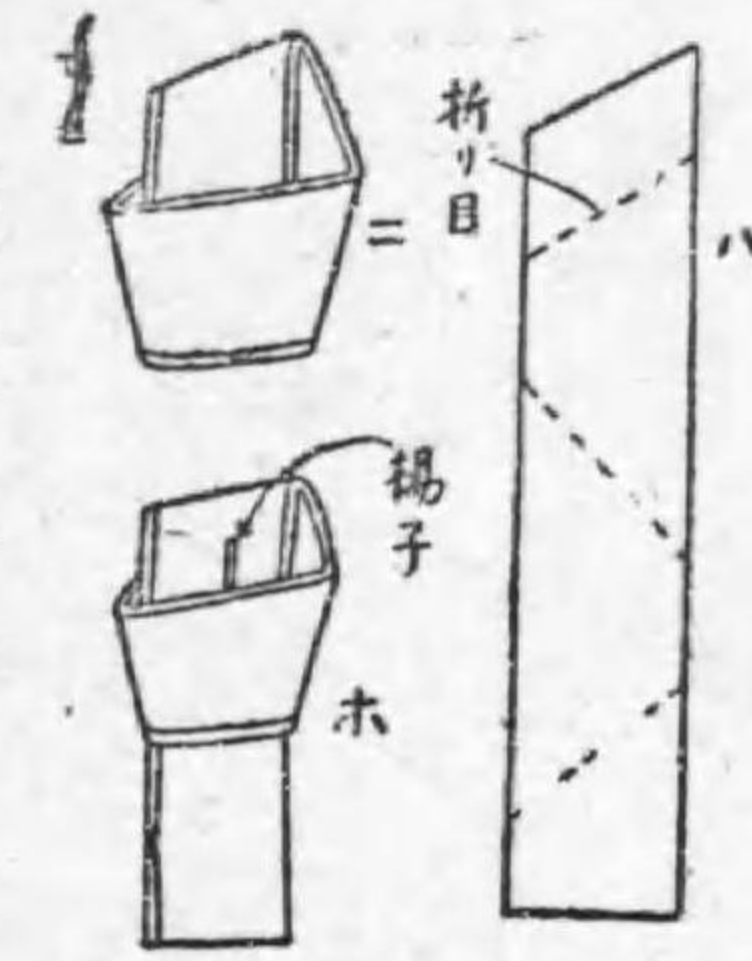
板目紙の薄いのを、巾八分丈一寸五分に切り、その片方に薄糊をひいて小布に貼りつける。布の周囲は中に折つて二つに折り、貼り合せる。恰度くけ紐の一端と同様な形である。折り合せ目には赤い小布を、圖のやうにして覗かせると、一層綺麗である。そして、横と下の二方ははり合せ、上だけ揚子さしの所となるから残しておく。



次に五分巾、丈二寸の厚紙を切り、丈の両端に赤い布を貼り、中央に胴と同じ布をはつて(ハ)圖のやうに點線様に折をつけて疊む。そして(ロ)の上部に(ニ)を貼りつけるると(ホ)圖のやうな愛らしい楊子さしが出来上がるのである。

これを大きく作れば、箸入にも應用することが出来る。

お箸入 板目紙を巾一寸、丈四寸八分に二枚切り、先づ、一枚の



板目紙の片方全部に薄色の布を貼り、周囲は丁寧に板目紙の後に折返して張りつける。次に板目紙の薄いもの、又は貼子紙をあやめの花びらの形に切つて、それに紫の布を被せて、さらに板目紙に貼り

つけ、前の布の上に貼りつける。

次に、板目紙を末廣の形に切つて、赤などの布をかぶせて、更に貼りつけ、青い布を葉の形に切つて、恰好よく貼りつける。それからまた、残りの板目紙に同色又は表と配色のいゝ布を選んでく、裏の周圍に糊をつけて貼り合せると、立派な箸入が出来上がる。

押繪の柱かけ 拵へ方は先づ適宜の大きさに繪を描いて、全體の外の輪廓通りに板目紙一枚を切る。次に例へば顔の形、手、エブロン、着物、足など、各部分の形に厚紙を切り、各々それに少しの薄綿をのせて、好みの色の布をかぶせて裏側に折つて貼りつける。そして前の板目紙に、各部分を綜合して張りつけ、打紐を手にもたせると出来上がる。

ハンカチ 洋服を裁つたあとに出る小さい切れ端は、手藝品などに利用されることは、屢々別項にも紹介したところであるが、バリーあたりでは、きつてそれを用ひて、小さなハンカチを作ることにしてゐる。ハンドバッグにも、ドレスとおそろひのハンカチを、ちよつと覗かせてゐるなどほんたうに好ましいものである。で、次にその作り方——端のかより方を述べておこう。

まづ適宜の大きさに、四角に布を切つたはら、端を一部分の中に、一つ折りながら、針を通して糸をよくひいてゆく。恰度、日本の薄物の袖口の巻縫のやうにするのであるが、大變早く手際もよくゆく。色もの、模様もの、縞、何のドレスの端布でも結構である。

新型の針箱 やはり僅かの端布を利用して出来る「變り型針箱」の製作法を公開しやう。材料としては、メリンスでも羽二重でも、または更紗のやうなものでも結構である。表用布として一尺

方形の布一枚、同じ大きさの芯布（金巾のやうなもの）一枚、裏用布として一尺幅一尺三寸ぐらゐの無地布一枚、他に好みの色のバイヤステープ六尺二三寸、ボール紙幅六寸丈一尺五寸ぐらゐ、綿少々、縫糸などである。

▲作り方……先づボール紙で六角型のも一枚と、花瓣のやうな形のもの六枚、裁つ。

次に、表、芯、裏布の三枚を、九寸四分ぐらゐの圓形に裁ち、表布と芯布とを外表に重ね、周圍を簇でおさへておき、圓の中心に六角型のボール紙を、心布の側に載せ更にボール紙の上に裏布を重ね、ボール紙の周圍に簇をかけて動かぬやうにしておき、裏布の方を見て（ミシン手縫なら返し針）をかける。つまりボール紙を芯にして裏表の布で挟むのである。この部分が箱の底となる。

六枚の花弁形のボール紙を裏布と芯布の簇に挟んで、簇で押へておき、底型についた一方の側を残し、ボール紙の際をミシン又は返し針で、ぐるつと縫ひ合せる。

次に裏表の布の縁を合せ、バイヤステープで包んで、ミシンか返し針でおさへ、ボール紙の心と心の間へ、二つづつ、紐通しの孔を明けて、孔かどりをする。紐は縁周圍に使つた、バイヤステープの残りを二つ折にして、ミシンをかける。（打紐でもよろしい）

別に裏用布の残り布から、針刺しとかくしの布を、花瓣形ボール紙の一つの中に、納まるやうに裁ち（かくし一枚、針刺し二枚）かくしは口をバイヤステープで包むか三つ折ぐけにし、針刺しは二枚を袋に縫つて、中に綿を入れ、口の一方を箱の内側（花瓣形ボール紙心の上）へ返し針またはミシンで縫ひつけ、それと見合つた一方にかくしをつける。

これで出来上つたから、紐通しの孔へ紐を通し、きゆつと引締めると、優美な、まことに恰好のいゝ針箱が出来上るのである。これは有合せの友禪布を使つて作つたものであるがいろ／＼の小布を接ぎ合せて作るのも面白いと思ふ。

最新手提袋

最近流行の手提袋で、何年前に大變流行した信玄袋にちよつと似寄りな、しかしづつと使ひよい、優美な袋である。これも店頭では、鹿の子絞や匹田絞などの布地で美しく飾られてあるが、主婦のちよつとした心がけ次第で、半襟や手柄などのやうな小布廢品を利用して、黒縞子や天鷲絨のやうな布と接ぎ合せて作られる。淺黄や、緋鹿の子絞と黒縞子などを配り合せたものは、なかく趣きの深いものである。

さて、材料としては前記小布の接ぎ合せたもの、表と裏布幅七寸五分、丈四寸五分のものが各二枚、底の布として直径三寸五分の丸形ものが、裏表各一枚。口紐（毛糸の太糸ぐらゐの縫糸）は、口廻りの凡そ一倍半。提紐は口廻りの二倍半ぐらゐ。色合はなるべく表の布地と似寄りものがよろしい。他に底にするボール紙と、布地と似寄りの縫糸などを取揃へる。

▲作り型……はまづ底の表にするボール紙を、直径三寸二分の丸形に裁ち、これに木綿綿を薄くあて、この上に底の表の布を載せ、返して、ボール紙の方を上に向け、ボール紙の周圍に、二分通りぐらゐに糊（やまと糊でよろしい）をつけ、布をこの上に折り伏せて、ぴつたりと貼りつける。これで綿をあてた、ふつくりとした底の表が出来た。裏の方はボール紙でなしに、針の通る程度の、反物の包紙でも利用して、綿は入れずに表と同様に丸形に作る。

次は袋の布をとり、表も裏も各二枚づゝを中表に合せて、幅を二分の縫代に、極く細針に縫合せ。縫代は、表の方は片返しに、裏の方は割つておく。口元は出来上つてから、心持裏が内身になるやうに縫ひ合せ、引き返して口廻りをとゝのへる。

次に底をつける。まづ、底をつける周圍に八つの襷を寄せるのであるが、襷の向はどちら向でも

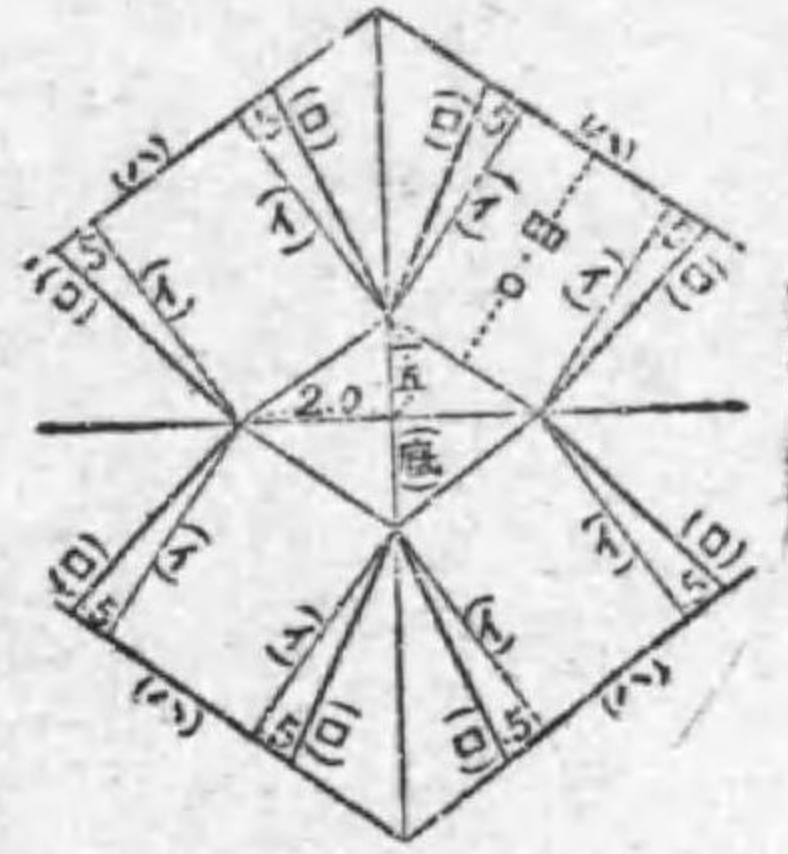
かまはぬから、追襷に凡そ二分五厘ぐらゐづゝに寄せて、縫代をできるだけ浅く縫つておく。つまり袋の周圍と底の周圍とが揃ふだけに、襷の深さを加減するのである。そして作つてある裏の底を先につけるのであるが、底の裏側へ袋の裏側をあて、二分通りに、べたに重ねて、ぐるつと一針ぬきに縫ひつける。これで裏の底がついたのであるが、表の底は表側を外側にして、裏底の裏から合せ、針目の表へ見えぬやう、ぐるつと緝け合せてつける。

以上で袋が出来上つた。最後に口紐をかゞりつけて提紐を通すのであるが、口元の兩側とも各十分分に、一分五厘の深さに目打で孔を通して置き、袋の脇の縫目からはじめてぐるつとかゞり用意してある提紐の文を二つに切り、孔に通して兩側でひき締める。これで立派な手提袋が完成したわけである。

屑入箱 古半襟利用の屑入箱である。手製の屑入箱を、机の側にでもちよつとおくと、重寶なだけけでなく、優雅な裝飾ともなる。しかも材料は、一尺四方ぐらゐのボール紙一枚と、四寸幅の古半襟一枚、裏用の色紙は、ボール紙と同寸ぐらゐに一枚、半襟と配色のよい太い絹打紐を一尺五寸、貼付用の糊などを取揃へればよい。尚ほ表布は、他の小布を集めて配合よく貼り合せても、千代紙

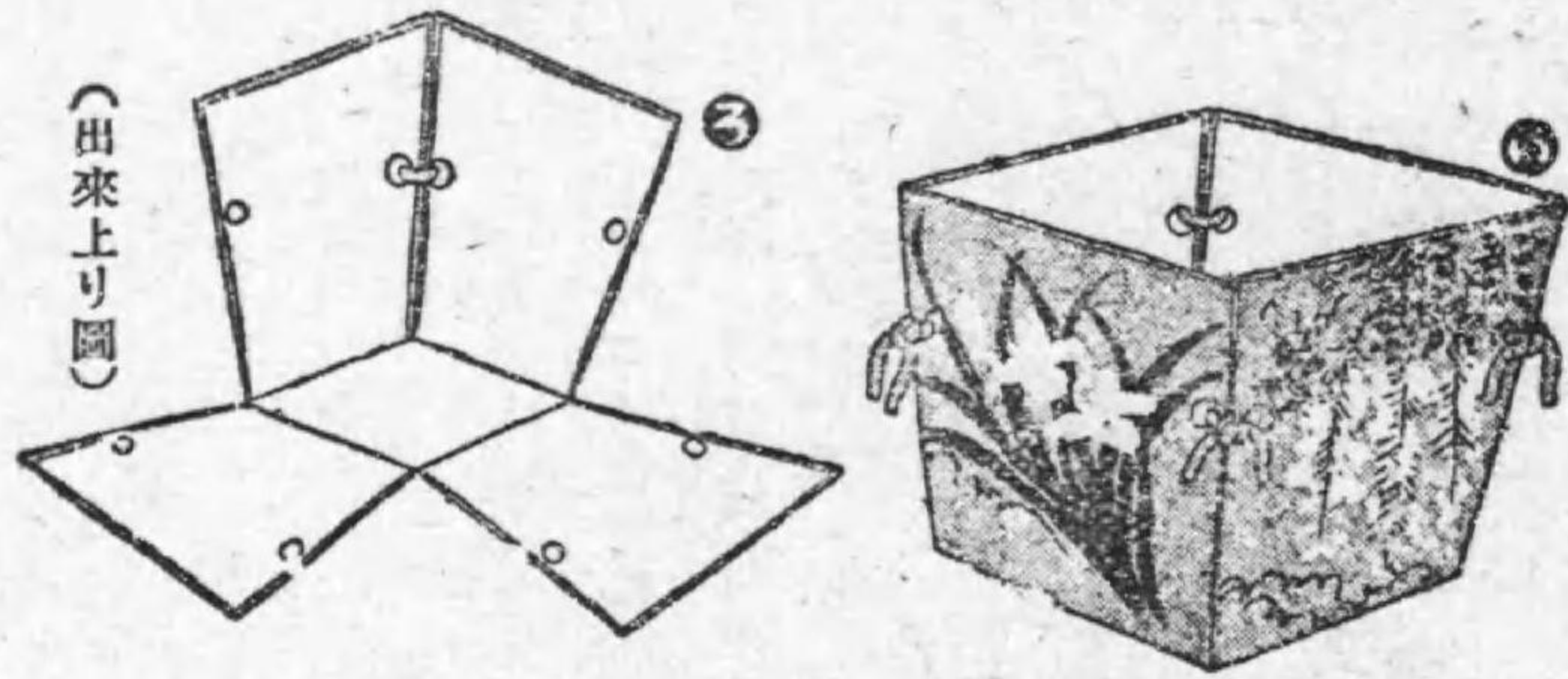
を使つても、優美なものが出来やうと思ふ。糊はトキワ糊でも、ヤマト糊でも結構、糊付用の篋があれば用ひてよい。

▲ボール紙の裁方……先づ、心となるボール紙の裁ち方は、圖のやうに、先に底の側を定めてしまつて、底につゞけて、周囲の四側を太線通りに裁つのである。ボール紙の真中へ十文字を描き、その中心から左右へ二寸づゝ、前後へ一寸五分づゝを標して、底の菱形の定める。四側は、底の菱を基礎線にして、三角定規をあて、四隅とも直角線(イ)を引き(三角定規の代りに正確な本かノートを使つてもよい)各(イ)線を四寸に定めて、こゝで圖のやうに(イ)線から外側へ五分づゝ開きに、



(ロ)線をひき、次に(ハ)を引いて、各太線通りに裁ち切る。切るときは裁板か別の厚紙に載せて定規をあて、尖のよく切れるナイフで裁つとよい。

▲布の裁方……裏と表の布の裁方は、ボール紙へ標した、菱の線通りにナイフか篋で折目をつけて、四側が内側へ折れるやうに折癖をつけておき、この心紙に合せて、底もつゞけに裏紙を裁つのであるが、裏は各縁



(出来上り圖)

で、心紙よりも一分づゝを控へておく。

別の底の表側を、やはり周囲で一分づゝを控へて、裏紙の残りで裁つておき、四側の表側は半襟の模様を上手に使つて、四枚とも、口も左右の側も同様に、各縁で心紙よりも、裏側へ三分づゝ折り返るやうに廣く裁つ。

▲貼り方 次に貼り方であるがまづ表布の周りに細く糊をひいて、四側ともびつたりと心紙へ貼りつけ(四方は三分折返る)裏紙は糊を心紙全體にひいて、まづ底をべたに貼り、四側は箱のやうに、一枚づゝを立て、底との境目で皺を作らぬやうに、順々に貼つてゆく。底の表側も裏同様に貼る。

こゝで『出来上り』圖(ろ)のやうになるから、四側とも口から一寸一二分下げて、兩側へ打紐の通るくらゐに孔を打ち貫き、打紐は四本に切つて、四ヶ所とも體裁よく結ぶと、(い)のやうに出来上る。この

作り方を應用して、六角形でもまた面白いものが出来る。

ピンクツシヨン

これも僅かの小布と綿とさへあれば、子供たちにも容易に出来るものである。たゞ、お人形さんや、動物に象つたピンクツシヨンは、たとひ作つたものにせよ、生物に針を刺すなどは酷い感じがし、子女の教育上にもなるべく避くべきである。茲では葉つきの枇杷を象つた直径一寸四分大のものを作ることにする。例によつて材料としては、古半襟でも、裁落しの小布でも結構、たゞ、厚地のものや伸縮のきかぬ布は作りにくいので、なるべく薄地の縮緬類か薄絹、ポイルなどの柔かで伸縮のきく小布を選び、鯨尺で、枇杷の實は一寸方形のもの七枚、葉は二寸方形三枚、ピンを刺す部分の臺は、直径三寸五分の丸形を一枚、臺の下につける襲取の縁布は、幅一寸に丈一尺一寸ぐらゐ、底は直径二寸の丸形を一枚、底の心はボール紙の空箱でも利用して、直径一寸四分の丸形を一枚、臺と枇杷の心に綿が少々必要である。この配色は各人の好みであるが、底と縁布を水色の薄絹、臺はとき色、枇杷は葉が草色で實が黄色といふ風なのが適色と信する。

▲作り方……は、まづ底の方から、上方へと順に拵へてゆく。底は底布の周圍を、丸形通りに細く縫つて、中へボール紙の心を入れ、縫糸を固く絞つて止める。襲取の縁布は、丈を輪に接いで割

り、外表に幅を二つに折つて輪を外側にして、一分ぐらゐの襲を片返しにぐるつと折り、襲で内側をおさへる。

こゝで(1)の形にできるから、底の裏側へヤマト糊をべたにひいて(縁から糊がはみ出ぬやうに)その上へ(い)の縁布を、縁廻りがぐるつと等分に出るやうに載せて貼りつけ、糊が乾くまで、そつと膝の下にでも敷いておく(ろ)は、底へ縁布を貼つた表側の圖である。

ソノンツクンピ
方リ化の



次に臺の布を(は)のやうに丸形の周圍をぐるつと縫ひ、綿を凸凹のないやうにあまり固くない程度に入れて絞る。そして絞つた口を底向に、縁布の上へ載せて周圍を底へ綴ぢつけるのであるが、底の表へ針目を出さぬやうに、軽く拵つて綴ぢるとよい。

枇杷の葉は、三枚とも、まづ外表に、

(に)のやうに三角に折り、次に點線のやうに、輪の側を中央から(イ)と順に下方へ折り重ねて丁度着物の前合せの形にし(ほ)のやうに下方を縫ひ縮めると、葉の形ができる。この葉は三枚とも、縫ひ縮めた方を中央にして、臺の上へ(へ)のやうに載せ、適宜に恰好をみて綴ぢる。

實は綿を心に入れて(と)のやうに七箇とも作るものであるが、多少の大小をつけて、小梅ぐらひに丸く作る。そして黒糸で中央を四五ヶ所、綴ぢを入れてちよつと引込ませ、枇杷の形にできたら、葉の上へ七箇とも載せて、恰好をつけ、體載よく綴ぢると(ち)のやうに出来るのである。

押繪風刺繡 雨に降りこめられたときや、避暑地先き、または汽車の中などで、簡単にやれてしかも興味の多い新しい刺繡がある。まだそれほど流行はしてゐないやうであるが、ロシアあたりでは盛んにやつてゐるとか聞いてゐる。それは洋服の裁屑を利用して出来る押繪風のもので、極めて美術的な廢物利用法である。

最初、鈴蘭なり、チュウリップなり、或は象、猫、鳥、何でも好みのものを型紙に合せて作る。この型紙には新聞や雑誌のカットに面白いものが澤山あるから、それからもとれるし、繪心のある人なら自分で繪を描いて型紙を作ればよい。かうして型紙に合せて色々のものが出来たら、それを

テーブル掛なら四隅に糊で貼りつけ、そのあとを糸でかざれば、美しい立派なものができる。この方法で、クツションでも、ピアノ掛でも、夏座蒲團でも、あるひは壁掛けでも何でも拵らへられる。フランス刺繡の出来る方なら、それでかざれば尙更複雑な面白いものが出来るわけである。また動物などを縫ひつける時は、眼玉にビーズなどをつけると、一層引き立つてくる。これをやり出すと、ちよつとした小布類も惜くて捨てられず、家庭經濟の上からいつても非常に悦しいことである。

竹馬雛 材料は僅かの小布、針金、ボール紙など、どこにもある有り合せのもの、廢物を利用して、嬉しい幼な心にたち返りながら、誰方も一つ試みるがい。

材料としては曲尺で針金一尺五寸(四五、四厘)の太さは二十六番線位のもの。筆軸一本、杉箸一本、白絹少々、その他人形の衣裳となる配合のよい小布少々づゝ。

▲作り方 使へなくなつた筆軸などの竹を細く削つて、長さ二寸五分(七、六厘)のを二本、一寸(三厘)のを二本つくり、長い方を青く塗つておく。
白絹に綿を包んで直径二分五厘(〇、九厘)の坊さんを作り、一寸(三厘)の方の竹を入れて、(1)圖

のやうに首形を二箇つくる。

針金に、日本紙を細く切つたもので、糊をつけながら紙摺のやうに巻いておく。杉箸と針金で、

(2) 圖のやうに胴をつくり、次に糊をつけて首を差し込む (3) 圖参照

次は着物である。赤い縮緬 (又は絹) 四寸 (二、二、二) 角ぐらゐ (女の子の着物と髪飾りの部)

男子用の地味な絹三寸 (九纏) 角ぐらゐ。別に帯と頭巾になる小さな布にも、それく薄い水糊を使

つて、日本紙で裏打ちをしておく。

女の子の着物になる布を (1) 圖 (い) (ろ) の寸法通り切り込みを入れ (い) の布の裏いちめん薄く糊

をつけて (2) 圖のやうに人形に着せ、次に (ろ) の布に腰揚の折目をつけて、これも一面に糊をつけて

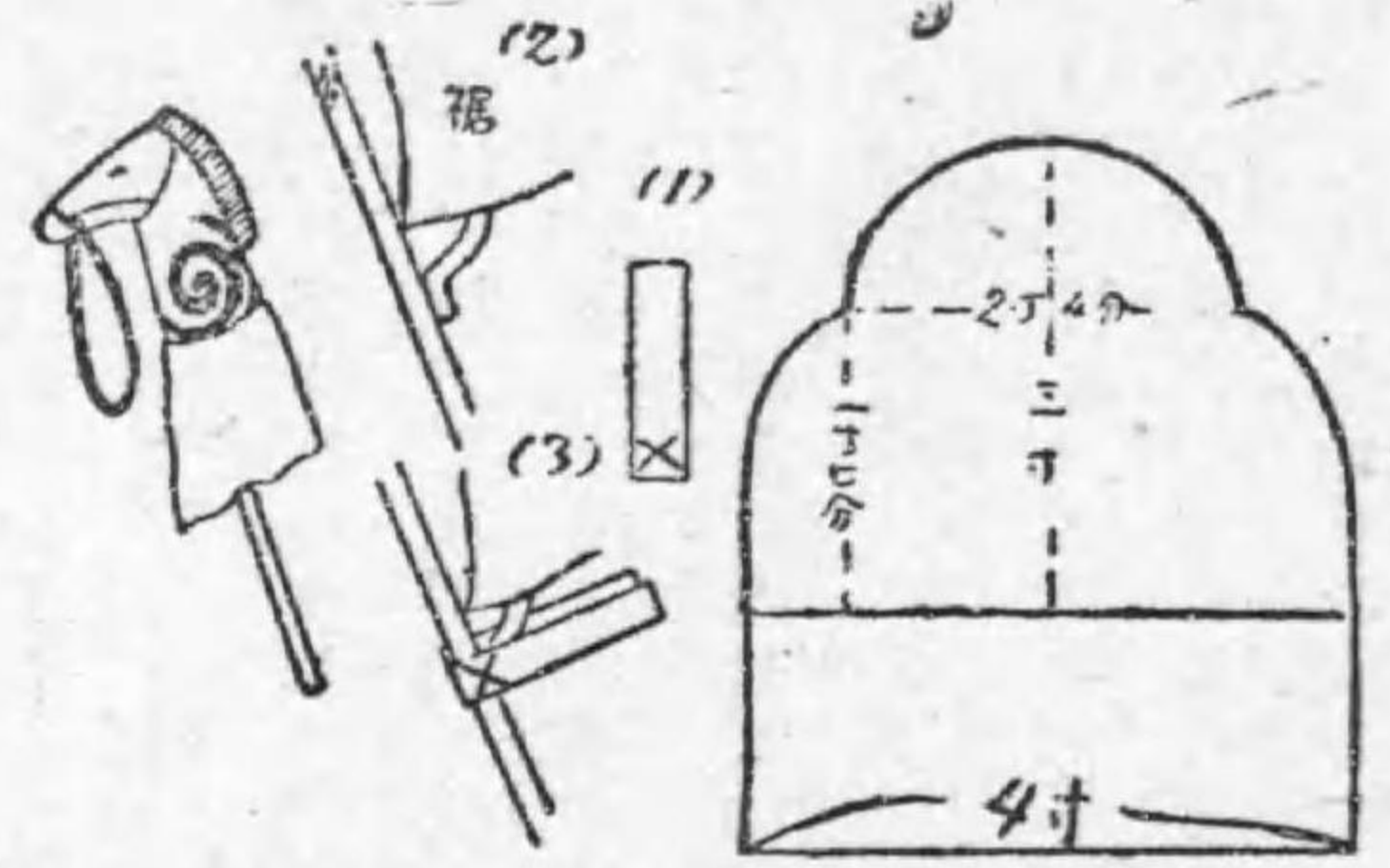
恰度帯の部分から下を巻いて貼り裾とする (3) 圖 次に帯の布を細く切り、その接續の部を一重巻

き、同じ布で帯を作り、後に貼りつけるのである。(4) (い) (ろ) (は) 圖参照

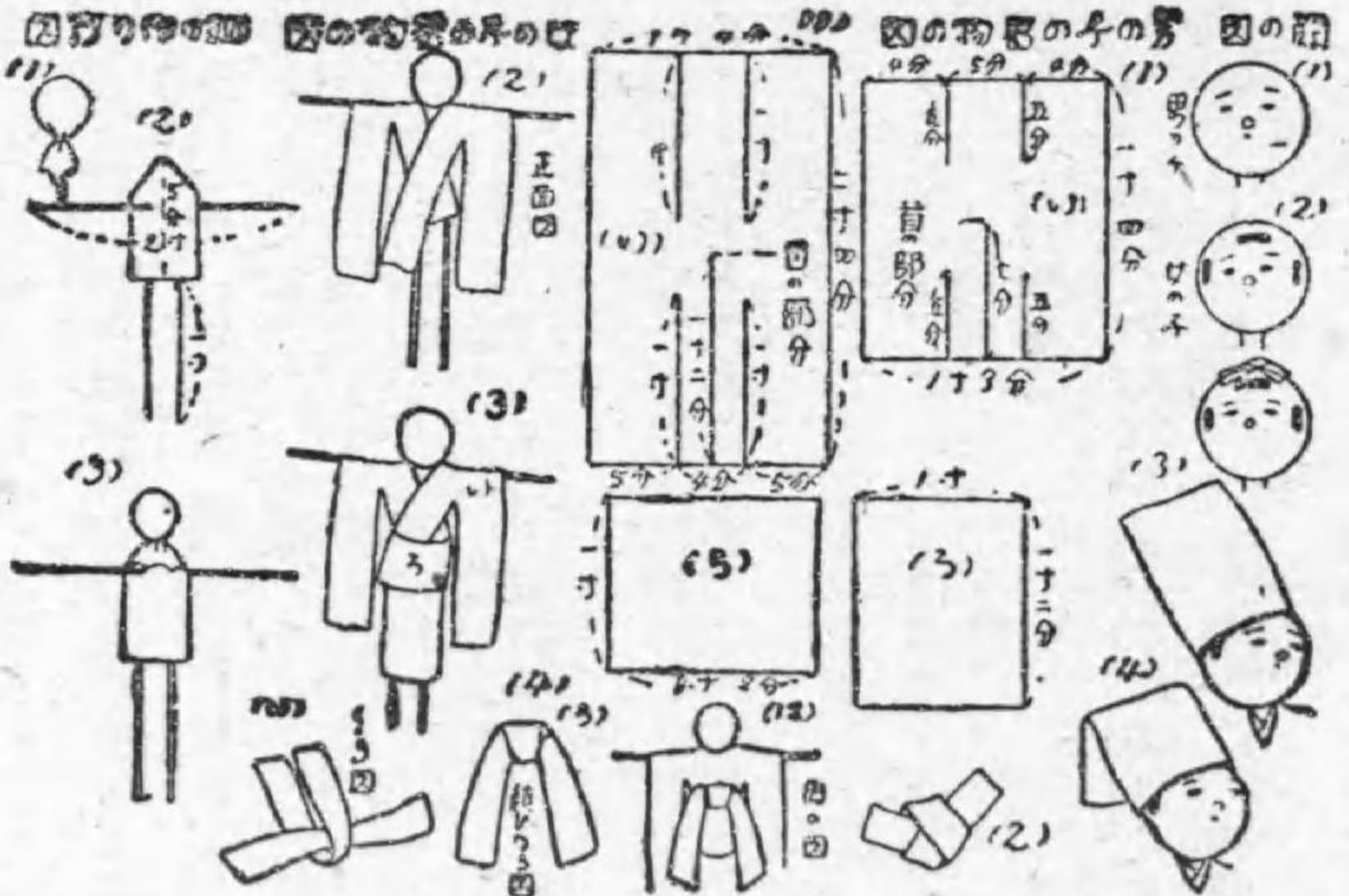
男の子は (1) 圖の (い) (ろ) の如く切り込みを入れた布を、女の子と同様にして着せ、巻帯として、

後へは腹合せ帯にしてかいのくち (結び文のやうにする) に結んだのを貼りつける。(2) 圖

頭巾は巾五分 (一、五纏) 長さ九分 (二、七纏) ぐらゐに切つて頭に巻き、後に垂らす。(3) (4) 圖 顔



(竹馬の作り方)



は男も女も殆ど同じやうに古風に描く。口は朱の繪具で点を打ち、鼻は白い繪具を盛り上げる。又女の子の前髪の上には、赤い布を二つに折つて貼りつける。

次に白繪具で女の子の袖や背に紋を描き、更に裾と袖裾に、古風な模様を描く男の子の頭巾にも、赤、黄などで簡単な模様を入れる今度は取付である。(1) 圖の寸法通り、ボール紙を四

枚切り、黄色でXを描いておき(2)(3)圖のごとく糊をつけて扶み合せる。次に手を竹にまきつける。手も足も長過ぎたら切りすてること。女の子はやゝ肩巾をせまくして、腕を前へ折り曲げる。

女の子の持つてゐる春駒は、全體の丈一寸五分(四、五種)位に、學校で用ふる粘土なり、または綿を入れて作るなりして、彩色して下に桃色などの布を貼りつけ、紫色の糸で手綱をつける。

臺は、板、又はボール紙を白く塗り、圖のやうな形に作つて薄墨でだるまの顔を描き入れる。全部出来上つたら、臺に錐で穴をあけ、竹馬の下の方を尖らかして、糊をつけ、差し込み、程よき位置に人形を立たせるのである。

小物入れ袋

ハンカチやカラーなどを入れる。小物入れの袋であるが、洋服の残り布でもあつたら、ちよつと手をかけて、單なる袋とせず、小さなワイシャツの形につくつて、居間の棚の脇にでも、鏡臺のうしろにでもかけておけば、なか／＼便利でもあり、面白い裝飾にもなる。物を入れるには、首からお腹の中へ詰めるわけである。

大體これはワイシャツの形になりさへすればよいのであるから、裁方も縫方も細いことはいらないが、縫方はまづ、胸あて布をのせて上から押へるやうにつけ、胸のポケットをつけ、後側の背中

にも大きなポケットをつける。(こゝにはブラシ其他を入れるため)

次に肩を縫ひ、袖をつけ、袖下から脇、裾とぐるつと袋にして、袖先を少しちよめてカフスをつけ、カラーをつけ、配合のよいネクタイを結んでとちつける。なほ胸に釦を二つ、袖口に一つ、但し袖につけるときは、袖を前に折り、それを下の一枚の布にとちつけながらボタンをつける。そしてカラーの後のところに、吊すための紐をつくれれば仕上るのである。

鼻緒

小布の中でも丈夫なのは下駄の鼻緒に仕立てるとよい。殊に朱珍とか琥珀とかいふ羽織裏の出布等を使ふと最上等の鼻緒が出来る。その造り方は、廢物の鼻緒で利用の出来るのはそのまゝ芯にして新ければよいが、新しく作るのだつたら、横鼻緒用として長さ一尺五六寸の、程よい大ききの麻紐二本と、前鼻緒用として少し小さい麻紐の長さ一尺二三寸のもの二本を用意し、横鼻緒の方は一尺許り、前鼻緒の方は二尺五寸許りを各中央部を残して、兩方丈を二つに分けて綯つておく。次に表に使ふ布を丈一尺、巾一寸乃至一寸二分程の寸法に裁ち、それを縦に二つ折りにして、一分許りの縫代で、ミシンで返し針に縫つて表返す。次に別に薄い布か強い日本紙を先の表より少し幅を狭く切り、その上に綿を薄く一面にのべ、それへ前に用意した横鼻緒の麻紐を載せ、巻き込

んで横鼻緒の芯とする。それを前の横鼻緒の布の中へ通すのだが、それには一五五六寸の針金を使つて、芯の十分の二か三位の邊へ引掛けて表の中を通して、靜かに引通す。巧く納つたら、長さ二寸五分、幅四分巾の布を前鼻緒として、前に用意した麻紐を芯に入れて紵け、横鼻緒を二つ折としそのまん中の所へ前鼻緒を挿込み、糸で括ればよいのである。

羽織の紐 縮緬や羽二重やお召の小布を羽織の紐にするには、先づ紐付を別に小さく拵へて、それを一端に縫付けて細く紐に紵ける丈の事故、さほど手数は掛らぬ。かうして拵へた紐は打紐より體裁がよい。

摘み細工 縮緬とか羽二重の様な小さい切屑は、摘み細工的に貼り重ね合せて、肘着又は床の間の置物敷、又は額用小蒲團等にする。いろ／＼の色の小布を巧くみに配合すると頗る美麗な花等が出来来る。之を作るには、最初布貼りの裏紙(ボール紙)に裏布を貼り、その上に糊付で細工をする、この細工に花等の時は布の内部に綿を少し含ませてふくらみを持たすと一層體裁がよくなる。

飾紐 又、前同様の方法で、縮緬やお召の小布は被布やサンマーカーコートに拵へる。無論その色合によつてだが、成可くその被布やコートと同じ品の小切で拵へるがよい。拵へ方は、その

布を五分幅程に裁ち、堅く小さく紵けて思ひのまゝの形に結ぶのであるから、結び方を手際よくやれば、一つや二つの織ぎ目は胡魔化せる。年老りの方は小さく結べば五六寸の長さで十分間に合ふ。

名刺入 セルか絹のやうな丈夫な小布は名刺入れになる。拵へ方は、二三寸位の表布二切と裏布二切があれば十分で、その幅は長さ程なくとも二つを織ぎ合はせれば十分間に合ふ。そして、名刺の大きさよりも二三分乃至四五分大きくボール紙を切つて、それを表芯とし、その表芯より一分位小さく切つたのを裏芯として、表二枚、裏二枚を夫々布で貼り、その表裏二枚の間に平たい紐ゴムを挟んで、固い糊で貼りつける。このゴムを貼るのには左の方の右につけたゴムの他の端は、左の方の右につけ、左の方の左につけたゴムは右の方の左につければよいので、そのゴムの貼方によつては、何方から明けても、名刺が挟まれるから、大層便利である。

ペン拭き ネル、羅紗、セル等の小布で五分四方位のものは、ハート形又は花形に切つて、ペン先拭きにすると便利である。

ハタキ 小布で他に使い途がなく、相当丈のあるものは、ハタキにすると丈夫で大へん保ちが良

い。それには木綿物やメリヤス類よりも絹類の方が宜しい。

長襦袢 平生心掛けて少しづつ貯めておいた小布を丹念に縫ぎ合はせて長襦袢を作ると、美事なものになる。又、小布を縫ぎ合せて、胴として帯の古布を裾と袖として長襦袢を仕立ててもよい。

帛紗 新しい小布で、絹物ならば、寸法や形を定め、色の配合に氣をつけて接ぎ合せば立派な帛紗が出来る。又、白縮緬等の小布は、四分幅もあれば、丸ぐけにして、糸を少し引しめれば菊の花片が出来る。そこでこの花片の長いものは二寸位、短いものは五分位にいろ／＼の長さに、四五十本も作れば大輪の菊花が出来る。三十本も合せれば半開きで十本位短い花片を集めれば蕾が出来る。そこで緑色の絹か縮緬の小布を菊の葉の形に切り、裏表二枚を一分位の縫代で袋に縫ひ、葉裏になる方の真ん中を四分か五分位切つて、此處から返せば葉が出来る。この葉の色もいろ／＼になる方が面白味がある。同じ緑色でも濃い色や淡い色の混つてゐる方が面白い。それから幹等も適宜の太さに縫ひ、又は縮けて作り組立て、四角な帛紗の地布に、枝振りよく縫ひつけば立派な帛紗となる。

上草履 これは小さい断ち布を利用して造るのである。先づ最初に、ボール紙で草履の型を四枚

裁つておく。表の用布は、必ず一枚の用布とは限らず、體裁よく接合せたものならば、却つて面白味のあるものが出来やう。

表用布が整つたならば、先きに裁つておいたボール紙の草履型各四枚に被せ、裏の方へ折り曲げて束縛で周囲を貼りつけるのである。そして、この場合には、布の四つ角を、丸味に切込み入れる(第一圖参照)

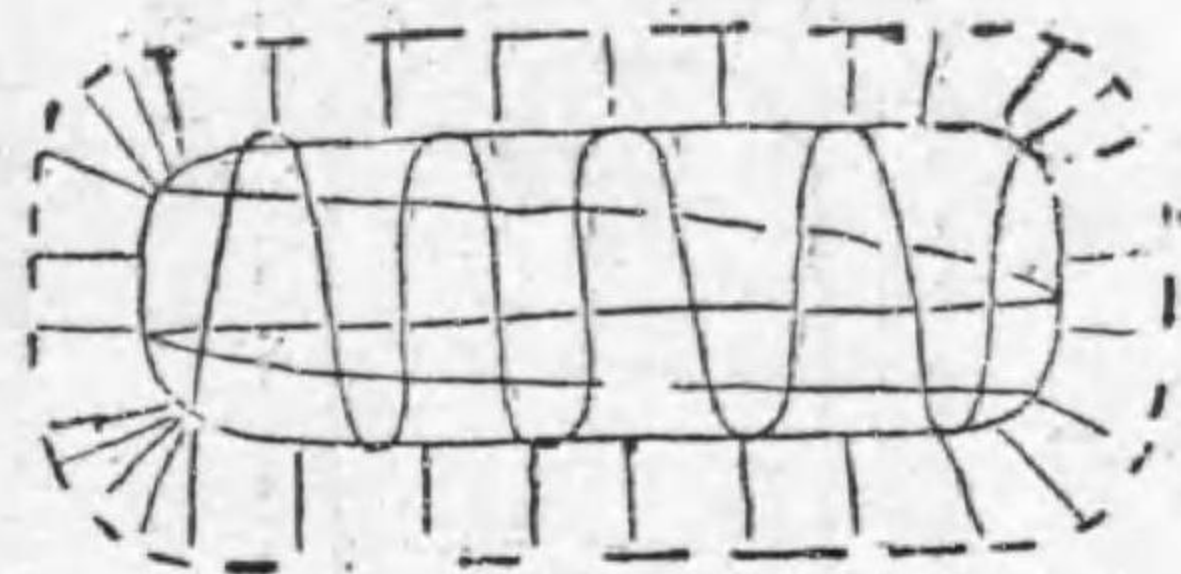


にして綿と生半紙とでくるみ、一方の端を丈夫な糸でくくり、洋傘の毀れた骨があれば結構である

第一圖

これが表臺となる。裏になる方の、二枚のボール紙には、唐米袋のクツシヨンの裁ち布を利用すると、至極丈夫でよろしい。やはり表と同様に貼りつけるのであつて、裏面を第二圖のやうに麻糸で綴ちつけておく次は鼻緒である。鼻緒もやはり、廢物の用布の中から適當なものを探し出して、これを細目に切り、初めにミシンで縫つて、次にそれを裏返しにし、麻繩を芯

第二圖



が、無ければ別に針金のちよつと太いものゝ先を曲げて、縫つた鼻緒に通し、針金を曲げた先に、前にくゝつた糸を結んで引つばると、全體に工合よく芯が入る。次に前鼻緒になる部分にきつねを拵らへ、前鼻緒を縫ひつければそれで鼻緒が出来上る。

さて、鼻緒が出来上つたなれば、先に作つた表臺に、第一圖のやうな寸法によつて鼻緒をすげる。ボール紙が破けぬやうに、鼻緒の結び目に布を横に通して豫防する。それから、表臺と裏臺とを合せるのであるが、このときに新聞紙を、巾二寸長さ四寸位に十枚ばかり折たゝんで、草履の膨らみをつくるために、表と裏の間に挟んで入れる。そしたら、表臺と裏臺とを、麻糸で體裁よく綴ち合せる。これで完成したのである。

織切端の利用法

しつけ糸

男物の襦袢の襟や袖口にする五日市は、耳の青い所を切取らず、縫込みにして置く

人があるが、之は切離して残しておき、絹物でも仕立てる時、一本づゝ糸に解いて簞け糸の代用にした方がよろしい。

布團 メリンスの帯を仕立てるのに、八寸五分位の幅にしても一寸餘りの縫込みが出来る。このまゝにして置いても縁から切れてしまふから、ズツト帯の文に搔いて取り、四本も五本も集つたら、一尺五六寸位づゝに切り、色の配合をよく考へて、裏打ちしてはぎ合せ、座布團の表にすると綺麗である。又、二尺二三寸位の丈けにして、赤ちやんの布團にすると、一層可愛らしい。

臺口 襦袢や縞子其他帯側を買ふと、一番端に僅か許り違ふ布がついてゐる。之を切取つて、臺口を拵へ、不用の臺口の金具を取りつけると、不斷用のものが出来る。

襷 絹物や縮緬の織出しがついてゐたら丁寧に保存しておいて、幾つも貯つたら、色々趣向を凝らして織ぎ合せ、襷をこしらへると着物の肩がすれ切らないで非常に工合がいゝ。

綴糸 縮緬の織出しを切離して取つて置き五つ六つ貯つたら、ほぐして横糸をとり、夜着等を綴ちると大へん美しい。

腰紐・帶留

縮緬の織端は上等の絹糸を太く纏めて織つてあるので大變丈夫である。そこでこ

れを適宜の幅に切り、小幅物なら五筋位、大幅物なら三筋位を縫ぎ、芯を入れて新けて腰紐にする
と、丈夫の點違も他に及ぶものはない。又、此布地を狭く新けて、帶止めにしても結構、更に之に
金具をつければ一層引立つ。

鼻緒 下駄の鼻緒にするには幅七八分、丈一尺二寸位の布を用ひればよい。

打紐 縮緬其他絹物の織切はほぐして打紐にすると、何に使つても糸の質がいゝので、光澤が
あつて綺麗でその上大へん丈夫だ。

節糸織 縮緬の端切を前と同じ様にほぐし分けて、長く縫ぎ合はせ毬にしておいて相當の量にな
つたら、之を横糸に使ひ、節糸織を織るとよい、之より寄せ集めの糸の事故、色糸の交るのは當然
この場合は無地に染めるがよい、又、白糸丈で織つたのは紋附になる。

古半襟の利用法

手綱帯締 古半襟を利用して、流行の手綱帯を作る。材料としては、この半襟、無地物でも
柄物でも、好みのまゝに、大きさは巾三寸六七分、丈二尺五六寸ぐらゐが普通である。帯、芯は、

何か有合せ物で結構だが、屑糸を利用して工合がいゝ。

▲作り方 作り方といつても、これは誰でも御承知の通り、たゞ二本の紐を作つておいて、手綱に
縫り合せるだけで、男女兒にも出来る極く簡単なものである。たゞ他少引き立つやうにするには、
その配色に工夫すればいゝのである。

まづ古半襟を、例の如く汚れてゐるものはきれいに洗濯し、損んでゐるところは取り除き、巾を
四つ割に裁ち切つて、二本づゝの紐に丈を接ぎ合せる。そして巾を二つ折にして、ぶつくと縫つ
て表に返し、芯は糸の太糸なら二本どりにして中へ通し、恰度、ちゃん／＼この附紐の先のやう
に両端を整へる。まづ、圖(ろ)のやうに両端とも、二分ほどを中へ折り込んで、折山の周圍を等分
に三ヶ所を小針に揃ひ、その糸をきゆつと引きしめて、こま結びに結んで糸端を三四分残して切る
と、(は)のやうな形になり、もう一本も、これと全く同様にして同丈に作る。

次にこの二本を、(い)圖のやうに、手綱に縫り合せるのであるが、まづ二本の紐を合せて、一方
の端を總の分に凡そ一寸残して(に)のやうに一つ輪に結んでから縫るのである。縫る方法は各自の
自由であるから、繩をなふやうにしてもよいであらうし、或は日本刺繍の細糸を縫る要領で、いま

結んだ結びめへ針を通して、裁縫臺の隅にでも、しつかりと止めておいて、一方の端をびんと張り（ほ）のやうに一本づつを別々に兩方の掌で、矢の向に二本とも縫を適宜にかけ、今度は二本を一（出来上り圖）



(作り方)

緒にして（へ）のやうに前とは反対の方向に縫り戻すと、圖のやうな手綱になる。終りはやはり始めと同様、一寸位を總に残して、しつかりと輪に結ばば、美しい手綱の帯ベが出来上り、簡単に、しかも非常に重寶するのである。

二度使用

半襟の使ひ古しはよく洗濯して真ん中から二つに切り、襟の下の方になつてゐる方を兩方縫ぎ合はせると、二度使ふ事が出来る。模様によつては、逆さになつたり或は合せ目がちぐはぐになる事はあるが、普斷用としては大して差支へない。

鼻緒

半襟の廢物を鼻緒にすると一つで立派なのが五六足分も出来る。殊に天鷲絨の半襟の古

くなつたのは、中に綿や麻を入れてくけ、下駄の鼻緒にすると、丈夫でもあり、且つ體裁もよい。

刷毛代用

又、入梅になると色々の織物に穢が生へて困る。この時は天鷲絨の小布で織物の糸なりに軽くこすると、綺麗になつて穢がとれる。なほ、中に綿屑を入れて、四角に縫ひ靴刷毛の代用にしてもよく、或は洋傘の塵をとるにも用ひられる。

ネクタイ

鼠地に上品な形のある夏襦袢の襟（りんす）を揮發油でよく洗ひ、真ん中から切つてはぎ合せ、後へ少々同じ様な色の布を足し、白ネルを芯に入れてネクタイを作ると、不斷用として上等である。

爪袋

襦袢の半衿はまん中は色がさめても兩端の見えない所は綺麗である。この部分を取つて小さな袋にこしらへ、琴の爪袋等にすると、子供達は大喜びである。

チャン／＼コ

半衿の古いのを幾つも集めて、襦袢の胴や、小供のチャン／＼コ等をこしらへる。

下紐

古い襦袢の衿は垢のついた所は、揮發油で拭き、よく洗濯して縦に二つに切り、真ん中でついで中に芯を入れてくけると下紐になる。

財布 襦絆の衿は縮緬にせよ、メリンスにせよ、何れ着色もあり、模様もあるから、そのいゝ所を取つて財布や楊子入れを作ると綺麗である。

付け紐 前同様縦に二つに切つて、両方とも紐にくけて置くと、子供の着物の付け紐となる。

袋物 半襟は傷む所は一定してゐて、下の方はきれいだから、よく洗濯して、破れた所や色の褪せた所を取去つて、暇に任せて名刺入れ、煙草入れ、楊子入其他の袋物をつくと仲々綺麗で上品な物が出る。縮緬等の上等物だつたらよい部分を縫ぎ合はせて、手提袋を作れば、立派なものである。

子供の襟 大人物の半襟をタテ二つに切り、又横二つに切ると、子供の襟が四つ取れる。その模様等も、一枚々々異つてゐるので尙更よい譯である。

帶留 半衿のあまり汚れてゐない耳の両方から一寸幅程に切取つて、普通の紐を拵へるやうに縫縫し、その両端を縫ひしめて飾り糸をつけると帶留が出来る。又、金具を附けるのだつたら、布の裏へ天具帳を貼り、芯紙を入れて新けてから、金具を嵌めればよい。

長襦袢 かけ古しの半衿をためておいて、よく洗張りし、縫ぎ合はせて長襦袢を作ると軽くて大

へん氣心地がよい、八本もあれば胴が出来るし。なほ一丈一尺位あれば袖と裾廻りは十分間に合ふ。

胴着、下着の胴 古半衿を胴着又は下着の胴に仕立てるには、前同様にして縫ぎ合はせる。輕くて温く、木綿物等とは違ひその着心地雲泥の差である。

染直し 古半衿でその儘用ひられなくなつたのは、先づ布海苔を濃く溶いた液で洗ひ、その油氣や垢を落し、十分乾いた後、元の模様を生かさうと思つたら、縫ひ絞り、豆絞り等にすれば再び結構用ゐられる。

又元の模様をそのまゝ生し、地色丈變へようとするならば、やはり布海苔の液でよく洗ひ、十分乾してから、張板に少し固い糊を引き、その上に半衿をあて、張りつけ、よく乾いたら、その模様と同じ形に切つた型紙をあて、左の一珍糊を引き、乾いた後、好みの染料を溶きこれに大豆のゴ、(大豆をすり潰して袋で絞つた汁)を少量加へ、刷毛で引き、蔭干しにして、よく乾いた後、一珍糊を軽く揉み落せばきれいになる。

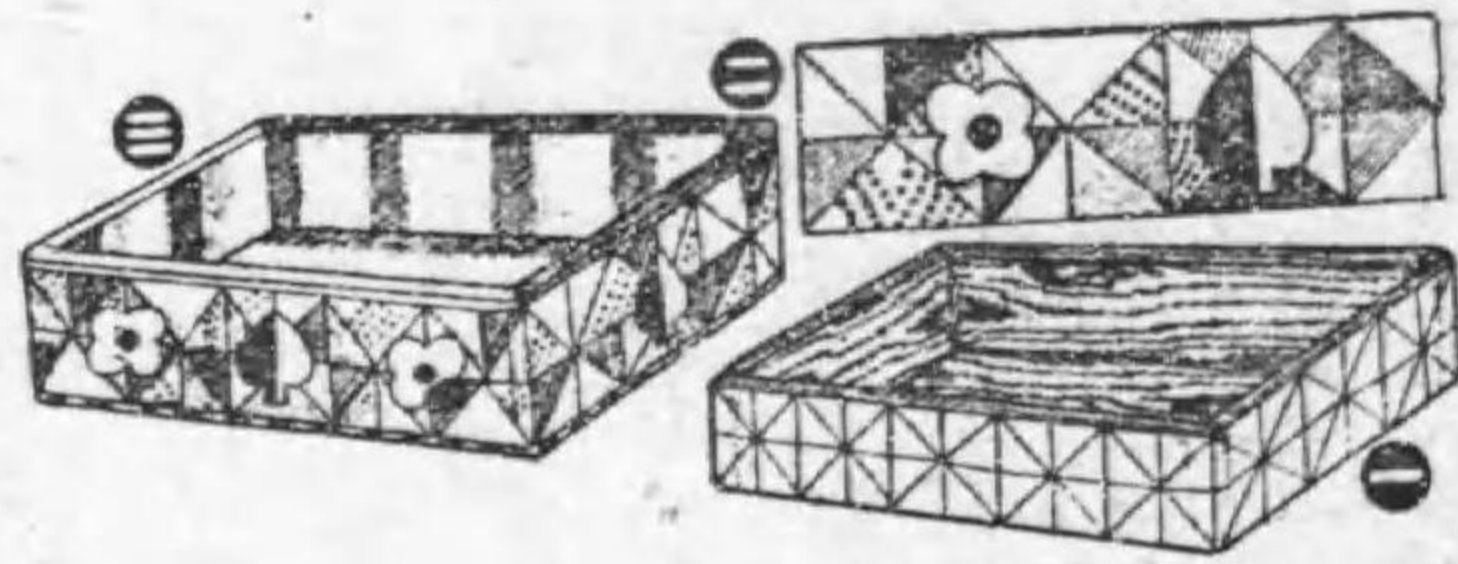
一珍糊はメリケン粉一匙、消石灰一匙、布海苔の液五匙の割合で調合する。初め、メンチン粉と

消石灰を混合し、布海苔の汁を加へて、よく練り合せるのである。
模様のまま染直すと、地の色ははつきりしても、その模様の所がぼんやりするから、その模様の所へ刺繍でも施せば新しくなつて晴着にも用ゐられる。刺繍にするには模様がそのまま下繪となるから、簡便である。

電燈カバー 夏の刺繍のない薄い古半衿を幅はそのまゝ、丈を凡そ一尺八九寸(普通の電燈笠の圍り寸法に縫代を加へたもの)に切り、わなに縫ひ合せ、幅の一方を細く縫ひ、その中に針金又は細紐を通し、一方もざつと縫ひ、有合せのり、アンでかざり編みをして二三寸の房を五分おき位につけると變つた電燈カバーが出来る。

古手絡の利用法

優雅な小箱 差當り役に立たない、といつて捨てるのも勿體ないといふやうな廢物、もしくは廢物に近いものが、どこの家庭にもある。古手柄、小布の類がそれである。それらを利用して立派に活用することが出来る。次に手柄を利用した優雅な小箱の作り方を紹介する。材料として手柄二



(出来上り圖)

三本、木の空箱一箇、千代紙二枚、裏打用の日本紙二三枚、生駄糊少々。
▲下貼り まづ箱の中と底裏は、千代紙を貼るから別に下貼りなしでいゝであらう。外周りへだけ

日本紙で下貼りをしておく。薄く溶いた生駄糊を、箱の周圍に合せて切つた紙面に貼つて、平に貼りつけ、袋ができたり皺の寄らぬやうに、刷毛でならして落ちつける。次にその上に切つた小布を貼るのであるが、まづ箱の方に模様の線を下描しておく。これは、市松でも麻の葉でも、或は手綱でも任意であるが、圖は大體箱の深さを標準とした正方形に區切り、それを更に横縦と左右からの斜線とで仕切つたもので、細い三角形が澤山集つた圖案である。

▲布の貼方 さて圖案の下描ができたなら次は小布の裏打であるが、それはどんな小さな小布でも差支へなく、手綱なら、一旦揮發油で油氣をよく脱いたものを、更に石鹼で洗つたものを用ひる。裏打に使ふ紙は、薄手の日本紙に限る厚い紙ですると、あとで剝れ易い。糊はやはり生駄がよく、やまと糊やその他の瓶詰の糊では、防腐劑が入つてゐるから、かういふ細工物に使用すると、布

の色が褪めることがある。で、生麩糊を描鉢に入れてよく描り、紙貼りをするときより、少し濃目に溶き、紙の方に一面に引いて、布の裏側へあて、刷毛で軽く叩くやうにしながら裏打をする。布の貼り方は、布の糊が、すつかり乾いたら、前に箱に描いた下繪の三角の寸法通りに細く切り一枚づつ丁寧に貼つてゆく。(切目は伏せず、切りつばなしでよい)別にむづかしいこともないが、たゞ色のとり合せに注意すべきである。さて、このやうにして一通り貼り上つたら、更にその上に配色のよい布で、ハートなりスピードなり、或は花菱なりの形を切抜いて貼ると(二)圖のやうにすつと調子が強くなつて引立つてくる。

最後に、箱の中と底表とに、千代紙を貼るのであるが、内周囲も底も、千代紙の方が、外周囲の縁(小布を貼つた上)へ五厘位の縁取になるやうに貼ると(三圖参照)全體がキチンと引締まる。これで、立派な手柄利の小箱ができ上るわけである。

涎掛 古い手絡がたまつたら、綺麗に洗つて色の配合をよく考へ、真ん中のは扇形に切り両側の二枚も同じ形に格好よく切る。その三枚を目立たぬやうにはぎ合はせて、中央を扇形に切抜き両端も同じ形に切り取り、白ネルか何かの裏をつけ、廻りにギヤダでも取ると綺麗なよだれ掛が出る。

来る。柄のじみなものは、はぎ合せて、下着の衿やその他、腰、紐、襷等に使用する。

針山 手絡の油染みたのは、そのまま毛髪か麩か糠を入れて、針山にすれば、針は錆びず大へん重寶だ。

お手玉 前同様、古手絡でお手玉を拵へて女の子に支へるととび立つばかり大喜びである。

長襦袢の胴、座布團 古い手絡で肘突を作るのは造作ないが、根氣がよかつたら平生心がけて澤山集めておき、長襦袢や座布團を作るがよい。

古足袋の利用法

修繕用 足袋の繕ひをするのに、白でも紺でも、新しい布を使ふと、そこ丈目立つて却つて見苦しいから、古足袋をとつておいて、その布を切つて繕ふやうにすると、経済的でもあり、且つ目立たないので好都合である。

遠足足袋 足袋は修理に修理を重ねてはき、いよく用をなさぬ時は、上はその儘とし、底にはメリヤス又は古羅紗の様な厚い布を幾通りも重ねて足袋を包む、その端はレース糸の丈夫なもの

でしつかり止めておく。かうすると、男の兒の遠足や運動會に穿かせるのに結構間に合ふ。

お手玉 足袋がよくく切れて使用出来なくなつたら、コハゼ丈を取つておき、赤や青や紫等の色とりどりのメリンスの小切れでお手玉を拵へ、その中へこのコハゼを入れると、チリン／＼と可愛らしい音がする。他所の子供にやつても大層喜ばれる。

古手拭・タオルの利用法

帯心 古手拭はためておいて帯芯にするがよろしい、これには四本位つき合せて、少し濃い糊で張る丈である。

腹掛、子供の單衣 古手拭の地質のいゝのゝ漂白して糊染めで無地又は絞染にし、腹掛か子供の單衣にしたり、或は袖なしに仕立てる。

ハタキ 又古手拭は四分位の幅に裂いてハタキを作る事が出来る。

敷布 古タオルや古手拭は之を丁寧に保存しておいて、後、曹達湯等でよく洗濯し、幾本も幾本も織ぎ合せ、穴のあるところは修理して、布團の敷布に作るのである。即ち二枚合せの敷布にす

るのであるが、比較的丈夫なものと弱いもの、薄いものと厚いもの、と言つた様に合はせる。そして所々を白木綿糸で刺綴る、敷布は他人に見せるものでないから之で充分である。殊にタオルの古等だと上等のシートが出来る。

枕覆ひ 古タオルは五寸四方位に切つて枕の上敷ひにすると、洗濯がきいて、且つ経済的で、又心持が大へんよい。

寝冷え知らず タオルのあまり古くなつたのは不可ないが、中古の内に子供の寝冷え知らずを作つたり、又は二つ折りにして一つ身の褌袴にして、赤やんに着せたりすると、汗をはちいて真に工合がよい。

古風呂敷・帛紗の利用法

色揚 風呂敷のまだ地の切れない中に色の褪せたり等したのは、染直すか新しい品をつくりになる。これを染直すには、先づ風呂敷をよく洗ひ、メリンス類だつたら必ずブラッシを用ひ、決して揉んではならぬ、かうして洗つた風呂敷の一隅を引き絞つたまゝ結び、次ぎに五寸許りの所を結

び、更に二寸位の所を結んで染めると一寸いゝ絞り染めが出来る。もし、一隅に模様のあるのは、他の模様のない所を又前の様に染めれば、先の模様も見へて一層面白いものが出る。其他いろいろに工夫して染めてもよい。又、無地のものにするには、石鹼と曹達水を加へた熱湯に浸し、その模様を出来る丈抜いて染めると薄色の無地染が出来る。言ふ迄もなく紺か紫紺か黒ならば大抵の模様は消えてしまう。

布圍皮 使ひ古しの風呂敷を貯めておいて縫ぎ合はせると、布圍類の表皮を作る事が出来る。メリンスの風呂敷等は軽く暖くて大へん工合がいゝ。若し染色が褪せて見すばらしい時は、前同様にして絞り染めにすれば再び新しいものになる。又表の布には丈が十分なくても額縁にすると左程手數もかゝらず、且つ上品になる。額縁といふのは、例へば一尺六寸四方の袱紗ならば裏布一二尺四方位の布を用ゐて、裏布が表の方へ一寸位づゝ四方へ返る様にするのである。然し、之は色の配合に注意しないと一向引立たない。又、この風呂敷を座布圍にすると、平生生として申分なしである。少し位の穴等は手際よく綴つておけば差支へない。布地の傷まないのは染直して來客用になる。絹の袱紗の恰好なのは、色の配合に注意して、額縁座布圍にするるとよろしい。

長襦袢 風呂敷又は袱紗をよく洗濯し、縫ぎ合せて長襦袢にするには、その儘用ゐては見苦しいので、縦に三つか四つに裂いて縫ぎ合はせ、色合や模様を巧みに取合はせるとよくなる。縮緬の袱紗等で出来上つたのは、友仙としか見えない程品がいゝ。

袋物 袱紗のあまり傷まないのは袋物に拵へると都合がよい。その作り方は小布や帯の利用法の項で詳しく述べておいたから御参照あれ。

紐類の利用法

雑用 被布の飾紐等の古びて二度と使へないのは解して束髪やお下髪を結ぶ時、元結の代用としたり、又何か包み物の中結へや其他日常いづらも使ひ途がある。

ハタキ 商店で買物をする時結へてくれる源氏紐がたまつたら、長いのは小包其他の結へ物にする事は言ふ迄もないが、その極く短いのは、五六寸位に切揃へて、ハタキに拵へると仲々綺麗である。出来上つたら手でよく揉んで糊を落してから使ふ。

糸類の利用法

織物材料 糸屑は衣類の解物をする時に出来るのを初めとして凡て何に限らずしてしまはず糸を卷へまいておくなり、針箱の抽斗へためておくなりして、暇々に任かせて繋ぎ合はせ、凡そ百五十匁程になつたり、之を横糸に使ひ堅糸には新しい二子糸のお納戸等に染めたのを使ふと、一寸した夜具や掻卷や座布團や雨合羽に相應はしい織物が出来る。その織り方は材料の色合によるので、一々定めて言ふ事は出来ぬが、解糸ばかりでなく、いろ／＼の色糸の交る様に繋ぎ合せたのは、一色のものより美しくなる。初めに屑糸を白とか黒とか赤とかに色分けして繋ぎ合せ、堅糸にも白と赤又は白と海老茶等を同じ幅の縞にして市松等にする等、何れにしろ堅に好みの色さへ用ゐれば好きのまゝに織れる。然し織物にする等大へん臆怯の様であるが、材料さへ纏れば、僅かの織賃でどこでも織つてくれる。出来上ると永らくの丹精の籠つた品丈に一層愛著が籠つて自然大切にするやうになる。

又、反物の飾り糸は丁寧にはぐして織いで、之を横糸に、縦糸を紫紺と、白の絹にして織らせる

と、體裁のいゝやたら縞が出来ると。

紐類 前の様に屑糸を織ぎ足したのを、五六本づゝ二筋に別々に強く捻り合せ、次にこの二本を合せ、前と反對に捻り合はせて捻紐に拵へておくと、強いから調法で、小包其他何彼と使途がある。

又、前同様にして大きく捻り合せるか、或は打紐にして蚊帳の釣手にする事も出来る。この場合は蚊帳と合せて釣手の端に一寸許りの竹の管(古筆を利用)を結びつけておくと、その都度手数も省ける。この外、襷や前掛の打紐を拵へてもよい。又、反物の飾り糸を巧みに色を取合せて打紐にする時、羽織の紐や時計の紐等が出来ると。

雑巾さし 裁縫箱には必ず一枚の雑巾を備へておき、衣服その他の裁縫をし乍ら、針に少しでも糸が残つたら、たとへ一針でもそれで雑巾を刺す、かうして一寸二寸の糸でも無駄にせず縫つておくと、知らず／＼の間に立派な雑巾が出来ると。

皿敷 ボール紙を一厘錢のやうに切つて、これに赤青各種の糸を巻いて、小さい釜敷きのやうなものを作り、之をいくつもつぎつらねて皿敷に作ると一寸面白い。恰もボタン等に使ふリンクを

連ねた様なものになる。

帯側 前に言つた様に色糸を繋ぎ合はせて鞠のやうにして根氣よく貯めておき、これを緯につかひ、経に絹糸を使つて織ると、立派な博多風の織物が出来る。それに、これらの糸の赤を青にしたり、白を赤にしたりする等は染物屋へ頼めば、造作なく出来るから、自分の好みの帯側が得られる譯である。

古毛糸の再生法

毛糸やスコッチで編んだ靴下や、手袋、シャツ等の古くなつて破れたのを綺麗に洗つてから解き、御飯蒸しに入れて蒸すと、フツクリした新しい毛糸となる。

毛糸のよだれ掛け、手袋、肩掛其他何でも最早使へなくなつたのは、丁寧にほぐして球に巻いて保存しておき、秋の夜長等に腹巻とか上蒲團の下に使ふ肩包みなどを閑に任せて編むが宜しい。但し、古毛糸は弱つてゐるから二本糸にして編んだ方がよい。

花模様のクッション

僅かづゝの残り糸を取り合せて、花模様のクッションを作つてみよう。容易くできて、しかも廢物利用とは思はれぬ美しい氣の利いたものとなる。

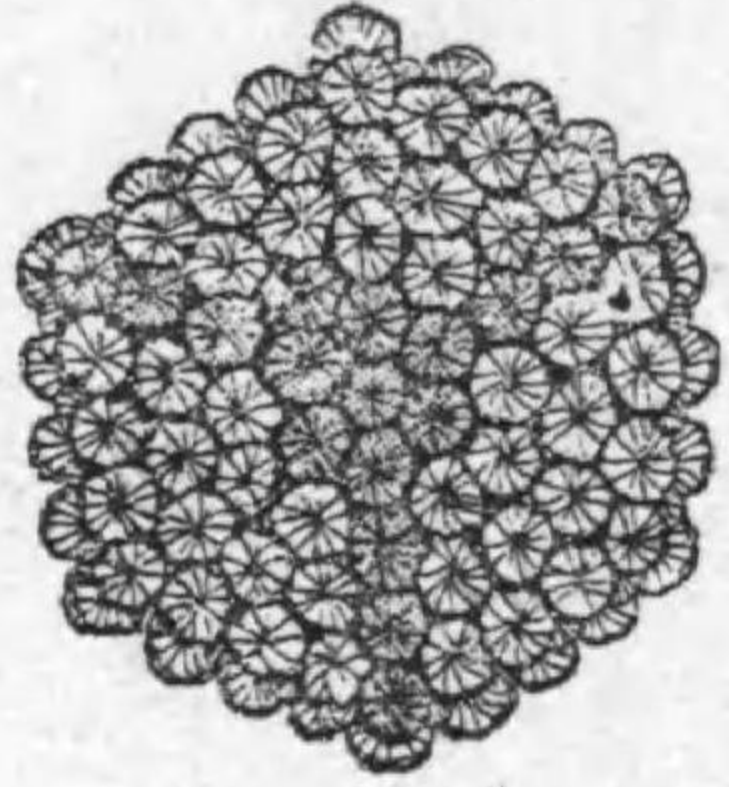
糸は毛糸、リリーヤーン、又はフランス刺繡の糸なり、各好みのもの自由である。また、この方

法の花模様は、テーブルかけ座布團、春のセーターなど、いろ／＼のものに應用することが出来るのである。

材料—極細毛糸の綠色一オンス、薄茶色少々、フランス刺繡糸三把。
用具—鉤針、とち針。

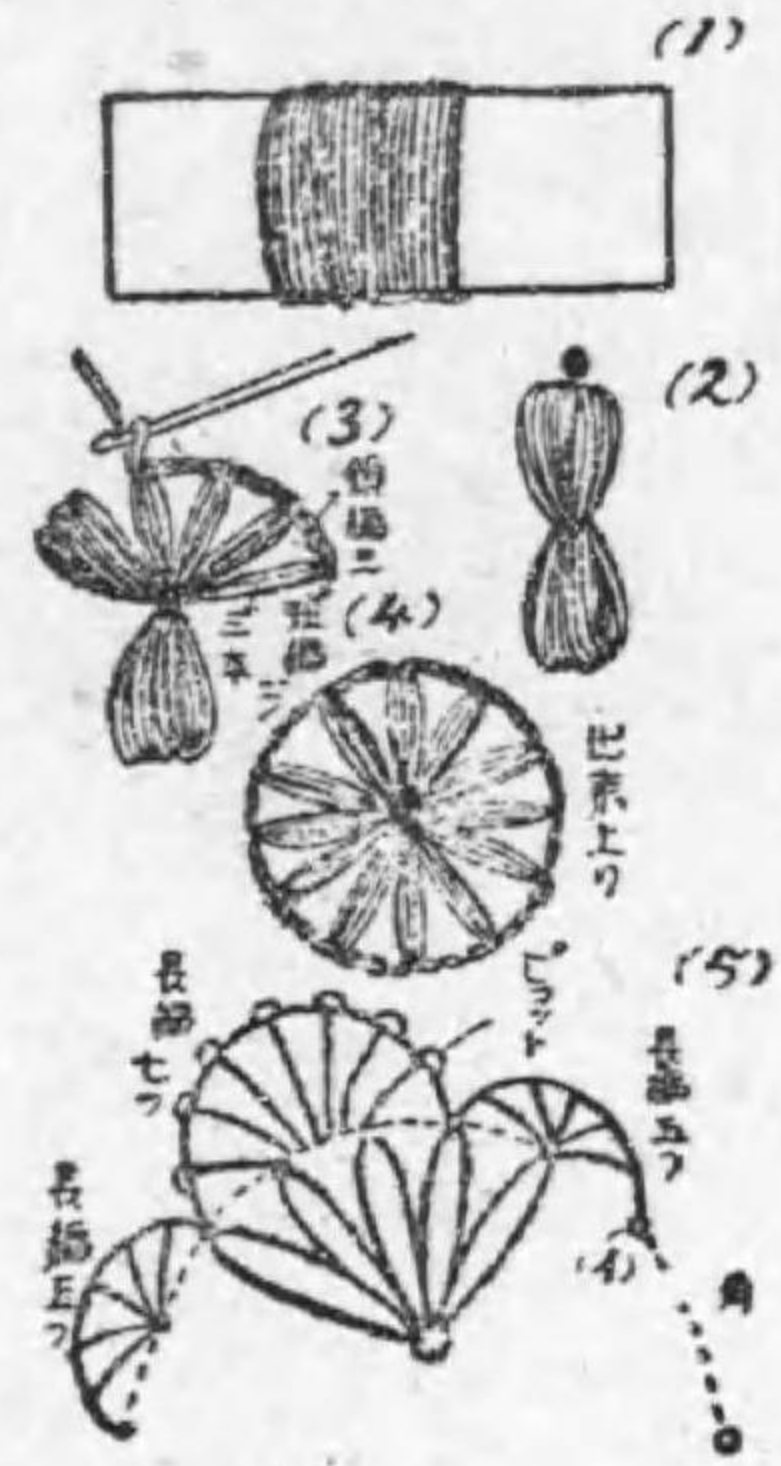
作り方 鯨尺一寸五分(五、八種)巾の厚紙を用意して、これに毛糸を十八回巻き、(1圖)厚紙から外して真中をくゞる。(2圖)輪になつてゐるのを三本一緒にとつて、刺繡糸で短編一つ編み、次に銷編を三つしてから、次の輪を三本とり、短編を一つしてまた鎖を三つ編む。(3圖)これを繰返して、花の周りが編めたら止める。すると菊の花のやうな形のものが出るから、その芯の括つて

図の二 出



あるところを、周りを編んだ刺繡糸を針に通して、縦横十文字にかけ芯を確乎と止めると、4圖のやうに出来る。

この花を綠色で四十五箇、薄茶色で十六箇作る。花が全部出来上つたら、出来上り圖のやうに並べて、とち針で花と花との周りの鎖編をまつりつける。



にも、ピコットつきの長編七つ入れるのを三つ、以上の合ひ間へは、長編五つをいれてゆく。

この周りの飾編みを詳しく述べると、5圖の右端の點線の處を角とすると、最初これにピコットつきの長編九つを入れ、それから鎖り三つとんで先に短編みをした處(イ)を短編みで止めて、その次の鎖三つ飛んで長編み五つ入れ、また鎖三つとんで短編みで止め、次の鎖三つとんで次の鎖三つあたり(花の真中)になるところ)にピコット付の長編みを七つ入れるのである。

斯して編んでゆくと、菊の花のところへ、ピコット付の長編みがきて、その合ひ間へにピコットなしの長編みがゆくわけになる。この順序を繰返して、周圍全部に飾編みが出来たら、編み上り

今度は全體の周りである。先づ緑の毛糸で、さきに花の周圍を編んだのと同じ仕方、花瓣のところ短編み一つ、次に鎖編み三つして移り、また短編み一つして長編み三つといふやうに、續けて全體の周圍を一巡す。周りの飾編みは出来上り圖のやうに、六角の角々には、ピコットつきの長編九つを入れ、角と角との中間

となる。

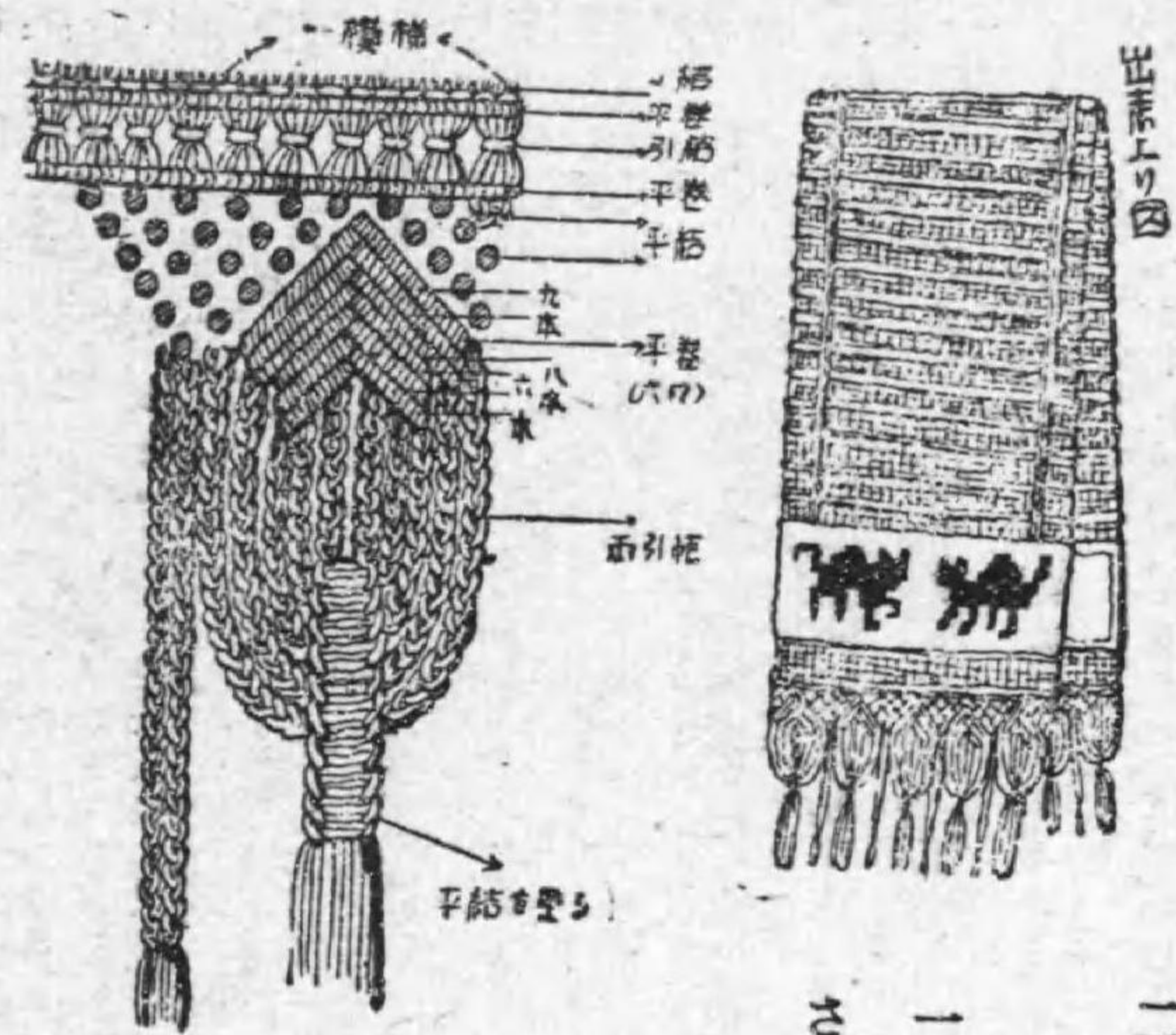
ピコットの作り方は、長編み一つしてから、鎖四つして長編みの目の處で止め、又次の長編みをしたら鎖四つして止めてゆく。

クッションの仕上げは、表の色に配合のよい布地を、花模様と同様六角に裁ち、袋に縫ひ合せて表にとちつけるのである。

卓子センター 次に紹介するのは、クリーム色のラッシーに、白茶と濃茶の配色で、毛糸刺繍をした上品で新味のあるテーブルセンターであるが、材料は、例によつて家庭で育り合せの端布や編物残りの毛糸を利用して作ることが出来る。刺し方も至つて簡単なものである。テーブル掛や、カーテンに應用するのも興味あることである。それに、毛糸のもつやはらかい感じがよく現はれてゐて、殊に初夏の室内裝飾用としてふさはしいものである。

材料 ラッシーのクリーム色(鯨尺)巾七寸(二六、六種)長さ三尺(一米一四種)並太毛糸白茶一オンス、濃茶少々、房リリーヤン。用具として毛糸織針。

作り方 こゝに用ひてゐるのは、一目おきダンニングステッチ、五目おきダンニングステッチの



二種だけである。

一目置きダニンダグステツチ、ラツシーの目を逐つて、一目おさへて一目揃ふのくり返し、二段目は反對に、おさへた目を揃ひ、揃つた目をおさへて、三段四段と交互に刺してゆく。(1圖)

五目置きダニンダグステツチは、一段目は五目おさへて一目揃ふ。二段目も同様。三段目は一、二段の五目おさへた真中の一目を揃つて五目をおさへる四段も同様。五、六、七、八段と交互に刺してゆく。(2圖)

以上の二種を、3圖に示すやうに、それぞれのところへ應用してゆくのである。

▲刺し方 (い)先づラツシーの丈の兩端を四寸(一五種)宛残して、その間の二尺二寸(八三、六種)

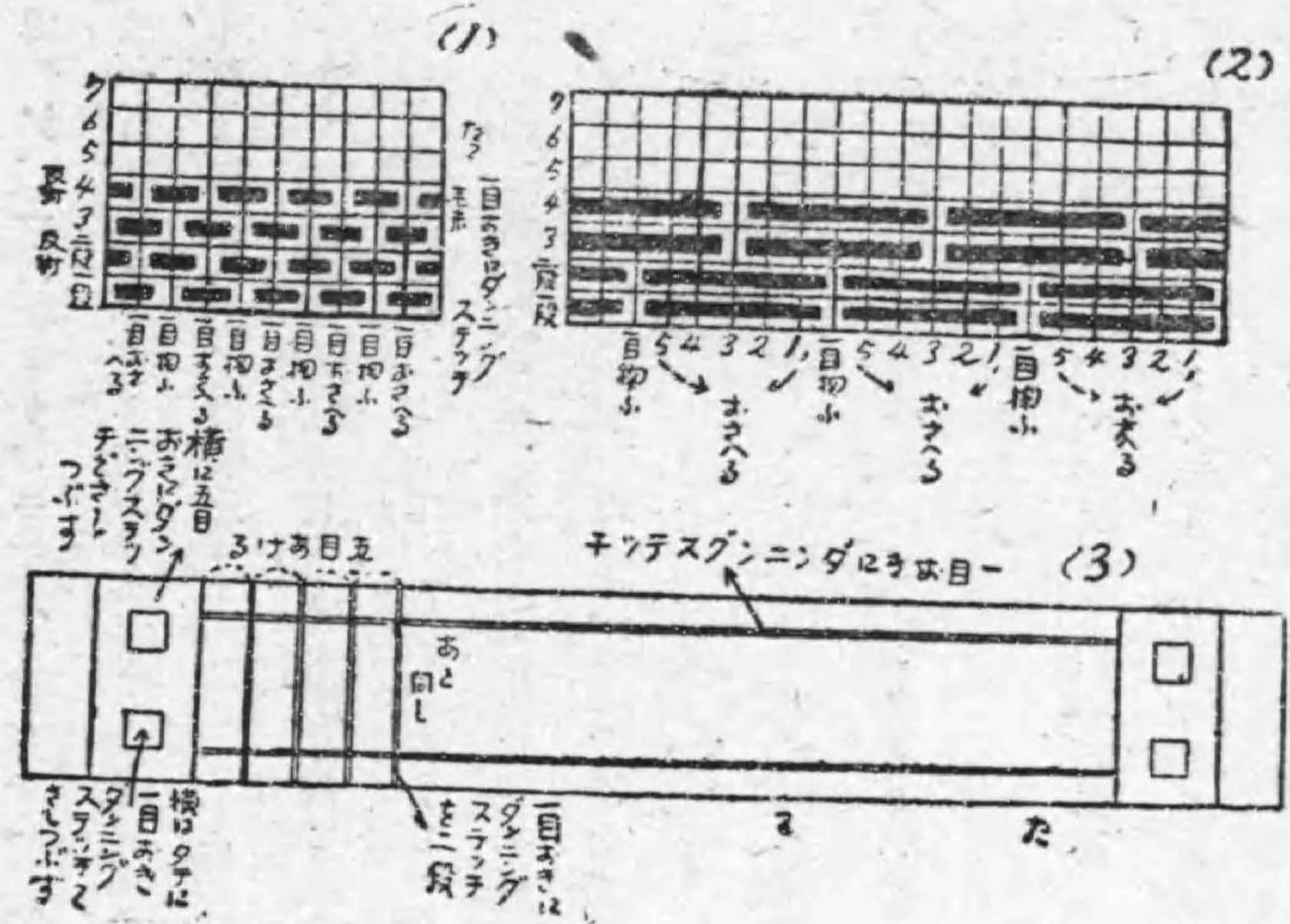
程の處へは、一目置きダニンダグステツチを二段刺して糸を切る。次五段は刺さずにあけて、また二段は一目置きダニンダグステツチをするのをくり返す。

(ろ)丈二寸(七、六種)横二寸三分(八、七種)位の大きさに猫の圖案を紙に描き、ラツシーの丈の兩端一寸(三、八種)位を残し、巾も十二目残したところの中へ猫を二匹向き合せて圖案を下にしきラツシーに鉛筆でうつしとり、猫は濃茶の糸で縦に一目置きダニンダグステツチで刺しつづす。

猫を中心しに周圍二寸五分(九、五種)ほどの間は、猫の刺し方と反對に、横に五目置きダニンダグステツチで刺しつづす。(上下端の二段は、端をきれいにひきしめるため、一目置きダニンダグステツチでする)

(は)七寸巾の兩端を、七目だけ裏に折り返し、最初に(い)のとき刺した部分の方だけ、端から五目あけた處を、縦に一目置きダニンダグステツチで二段刺しする。これで縦の縁がとれて刺すのは、全部済んだわけである。

房 この圖の房は、マクラメでだいぶこみ入つたものであるが、もつと簡單にしてシヨールの房のやうにリリーヤーンを結んで下げたのも結構である。圖はマクラメをする方の参考にまで、一模



様の結び方を描いたもので、このテーブルセンターには、一巾にこの模様が五つできることになる。

房が出来たら、刺繍との間を七分程あけて、マクラメの方を上にあて、縫ぎ合せる。

▲仕上げ 猫の縫ひ出してある處の裏に、巾六寸(二一、八厘)長さ二寸五分(九、五厘)位の布を裁つて裏づけにする。全部出来たら、刺繍した部分に霧を吹いてアイロンをかけると、毛糸が落ちついて奇麗に仕上るのである。

古綿の利用法

中綿 着物や布團に入れた綿の屑は新聞紙

を二つ折り、又は四つ折にし、或は本の間等へ綺麗にのばして上から押しをして、澤山たまたら他の綿の中に包んで、座布團又は敷布團の中へ入れると、結構新しい綿同様の感じがする。

糸代用 真綿の使ひ古したのは、どんな小さいのでも大切に取つておいて、シャツやズボン下のボタンをつける時、之を細く延して糸の様に針に通してボタンにつけると、糸でつけるより餘程丈夫である。

古蚊帳の利用法

幌蚊帳、食器覆 古蚊帳と言つても、地の破れぬものは染直して再使用する事が出来るがもし地の破れたものなら、その中の満足の所を切取つて、子供の幌蚊帳に作る事が出来る。なほ、小さい部分で食器覆ひにする事も出来る。この食器覆ひを作るには、蚊帳布をよく洗濯し、之を青竹といふ染料で染め、なほ一度水ですすぎ、それから細竹又は細木で飯臺の大きさ又は適宜の大きさに組立て、それに右の蚊帳布を張るのである。

障子用 又勝手口の障子を張る際にこの蚊帳を下張りに張ると、雨が當つても手が觸れても容易

に破れず大へんによい。又、敷紙の芯に用ゐてもよし、包み紙の芯にしても丈夫である。
風呂敷 古蚊帳を二枚合せて大風呂敷を作ると、轉居の際や、震火災等で避難する時等、蒲團を包むに此上なし便利である。そして、平生は蒲團その他の上に乗ひとしてかりておく。又、夏襦袢の胴にもならぬことはあるまい。

螢籠、魚捕網 以上の他、昆虫採集の捕虫網を作るとか、或は魚捕サデを作るとか、又は不用の味噌漉しに張つて螢籠又は虫籠にするとか、種々に利用出来る。

穀袋類の利用法

クツシヨン 唐米袋を綺麗に洗濯して、最初に造らうとするクツシヨンの寸法を定める。先づ決定したら寸法通りにチヨークか鉛筆で輪廓を描く。そうしたら各自の嗜好に依り、適宜な圖案を描き、それによつて糸でクロスステッチを施し、又はその他の布等により、如何やうの加工をすれば、立派なクツシヨンが出来上るのである。次に左の作り方實例によつて解説しやう。

▲作り方 第一圖の寸法により、黒の糸をとお針に通して、スロースステッチを一段つくり、そ

れを中の輪廓とする。次に、赤の糸で漸次に外側へと、クロスステッチをなし、兩側は各七段上下各十段を作る。そして最後の外側は、周圍を裏の内側に折り曲げて、少し端に糸をかけ、同様にクロスステッチをする。

中央の圖案草花の鉢は、同じく糸でクロスステッチをするのであるが、草花の部分にだけは、

女兒服地の裁布を利用して、葉、花、幹の部分に應用する。それ／＼の布の整つたならば、圖のやうに鉢の上に工合よく配置し、糸で假とちをしておく。

次に、外れぬ程度に端の方へ、ミシンをかけておさへるのであるが、ミシンがないときは手縫でも結構である。葉の周りは黒の糸でアウトラインステッチをする。花の周りは黄色い糸で、ミシンの下糸刺繍をなし、花のシベは黄色い絹でフレンチ



ナットをする。これで、クツシヨンの表皮が出来上つたのである。なほ、クロスステッチをする時には、よく注意して、何時も布目をさす順序と、糸の力向とを

同一定にしなければ、出来上つた糸目が、完全に揃はない。例へば糸目四ツを一角として、クロースステッチをするのである。

表皮が出来上つたら、表皮より巾一寸、長さ二寸程小さく作つた天然木綿の布團に、それを丈夫な糸で手際よく綴ちつけるのである。これで唐米袋利用の立派なクツションができて上つたわけであるが、大體こんな工合にして、色々の屑切れを利用し、單に花を限らず、他のいろく模様の細工することによつて、一層興趣あるものを作り出せるのである。

テーブル掛 粗雑な麻布で出来たメリケン袋、米袋などはよく洗濯をして、簡単な毛糸刺繡をすると、立派なテーブル掛が出来る。何枚か接ぎ合せて、接ぎ目を毛糸刺繡で被ひ、その他にも刺繡をほどこして絨氈を拵へても結構である。

古敷布の利用法

カバー 不況の際は、一層諸事に注意して、凡ゆる利用の途を考へなければならぬ。蒲團の敷布は、長く使つてゐると、足やお尻の部分が破れてくる。しかし他の部分は割合に傷まないもので

ある。それで、破れた部分を切り棄て、丈の長く残つた上部を掛蒲團の袴覆ひにして使はれる。掛蒲團はカバーをかけてゐても、一番汚れるのは袴であるから、かうすると、度々カバーを取替へることはいらぬ。この敷布の残布利用の袴カバーは、縫ひつけないで、恰度胸に當る邊から、くるつと上に返して袴を覆つてしまふのである。縫ひつけてもゐないし、カバーの三分の一にもあたらぬ大きさであるから、洗濯も極く簡便で、従つて度々洗濯するから、手敷の上からは勿論衛生の上からもよいことと思ふ。

またかうした残り布が澤山溜ると、綴ぎ合して、毛布の丈に合せて袋に縫ひ、毛布のカバーにして夏の掛蒲團にする。まことに肌ざはりがよく、また麻は體を冷すといふが、その心配もなくて、本當に氣持がよらしい。

敷布の残布で、右のやうに用ひられない、隅々の地のいたんでゐないところは、小さいハンカチの大きさに切り、縁にミシンをかけて、便所の手拭にすることが出来る。これなども又經濟的で重寶である。

敷布の若返り法 敷布は肩と踵の當る所が特別早く痛む。他はまだ十分丈夫なのに、その爲め

に用ゐられなくなる。もしも破れた箇所へ大きく當布等をして用ゐるなら、成可く次の方法によるがよい。中央の地が相當に薄くなつて來たらまだ破れて終はない中にタテに眞二つに折り、鉸を入れて二枚に切離す。そして、切り口は各々裏へ三つ折りとし、細くくけるか、或ひはミシンをかける。次に兩端の耳は十分鏝で伸ばしておき、中表に合はせて、二枚一緒にして極く浅く細く、針を運ばせてマツリ縫ひとするか、又はヘムステッチする。この際、糸は丈夫な白糸を用ひる、終つたら縫目を開いてアイロンをかける。この様にするとまた相當の期間使用に堪へる。勿論お客用等には出來ないが、普段家族が用ゐるのには、左程不體裁ではない。

其他

古帯止めて羽織の紐 羽二重や縮緬で新けた帯止めが古くなつたら、裏返しの出來るものは裏を返して新け直し、不斷着の羽織の紐をこしらへると、一つの帯止めで羽織の紐が二つ出來る。

染色應用の物資更生法

染色法とその種類

染色は、安い材料を上手に利用したり、少しの手數で古いものを一新することの出來るものである。家庭の主婦としては是非とも心得てゐなければならぬものであり、又、趣味としても藝術的でも實用的で興味の多いものである。順序として古いものを新たに染色するための参考にまづ色抜きの方法から述べる事にする。

色抜の仕方 染返しなどの場合にはどうしても一旦色抜きをしなければならぬ。その方法は木綿一反分に、苛性曹達三匁、湯四斗位の割にして、その中で約三十分乃至一時間ぐらゐ煮て水洗ひする。この方法でも充分色が落ちなかつたらば、木綿一反につき漂白粉十匁を入れ、四升ほどの水

の中にて水洗ひをする。絹布は、洗曹達一―二匁、マルセル石鹼五―六匁の割合にし、これを四升ほどの湯に溶かして三十分ほど煮立てた後で水洗ひすると、大抵綺麗に色が落ちる。毛織物はアンモニアを小盃に一杯を四升ぐらゐの湯に溶かし、これに入れて二三十分煮立て、後水洗ひする。

直接染料の使用法 木綿一反に對する、助劑と染粉の割合は左の通りである。

洗曹達	一 匁	(淡色)	(普通の色合)	(紺及黒)
洗粉	五、分			
食鹽	二―三匁			
水	約四升			

直接染料で絹や毛のやうな動物性のものを染める場合には、左の割合である。

染料	五分以内	(淡色)	(普通の色合)	(黒及紺)
醋酸	一匁内外			

水 四 升

酸性染料の使用 これは毛や絹物だけを染める染料である。従つてその外の植物性のものには絶対に染着かぬ。その分量は絹又は毛百匁に對し左の如き割合である。

染料	五分以内	(淡色)	(中色)	(黒及紺)
氷醋酸	二 匁			

以上で染料の説明をしたから、愈々染方の方へ説明を進める。

クレオン染の仕方 布地をピンで板へ張り、その上から薄く洗張りに用ひる程度に溶いた布海苔を刷き、なま乾きのうちに任意のクレオン模様をおいてゆく。簡単な色止法としては、描き上つたものを新聞紙に挟み、上からアイロンをかけるか、または水二合に一匁の焼明礬を溶かした液中に入れて乾かすが、最も手軽の方法である。

クレオン新染の仕方 小学校で使用する畫用クレオンを用ひる。先づ布をピンで板へ張り、それへ最初に、白色クレオンをもつて、思ひ／＼の模様を描き、布地を板から外して火鉢で炙る。こ

のとき線描きをしたクレオンの中に少量含まれてゐる蠟が、火力のために溶けると同時に、白色の方は、しつとりと布地に落着いてくる。次に、これを豫め用意しておいた染料で刷染にすると、白色クレオンで描いたところだけが、白く抜けてくる。同様にして、その他の色をも應用出来るのである。例へば自由畫風に、模様などを描いて、火に炙り、その地色だけを染料で染めても面白い。

姫糊染の仕方 これは卓子掛などに應用すると面白い染方だ。用布はキャラコが最も好適だ。まづ姫糊を作つておき、これに、目的の色よりも少々濃目の色を入れて、ちやうどすき油ぐらゐの硬さにしておく。この染料をもつて、思ひ／＼の模様を描いてゆくのである。色を數種使はうと思へば、かうして煉合せた色を、入用なだけ用意しなければならぬ。染料は糊が混つてゐることと少しもにじむことなく、ちやうど、油繪でも描くやうに、自由に描ける。また、花瓣とか葉脈などの、細いところを現さうとする場合には、一旦染料を塗つた上を、筆の軸でも引搔いておいて、乾かせば、そこだけが、白く抜けて来る。地色を塗る場合には、別に染料を用意する。これはやはり染料に少量の糊を入れて、こん度はどろ／＼に溶いてしまひ、模様の部分避けて刷染にしてしまふのである。かうして一度蒸じにかけて色止めをしでから、水洗ひをする。出來上りは油繪のや

うな感じのまことに綺麗なものである。

蠟染の仕方 藥屋で賣つてゐる「さらし蠟」を茶碗に入れて弱火にかけ、どろ／＼に溶いて、繪を描くの用に用ひる筆に、これをたつぷり含ませて、思ひ／＼の模様を描いてゆく。用布は麻布でも綿布でも羽二重でも結構。次に地染は染料を刷染にする。かうして乾いたら、新聞紙を一枚載せて、上からアイロンをかけ、蠟を抜いてしまふ。もし多少まだ蠟の氣が残つてゐるやうだつたならば、脱脂綿に揮發油を浸して拭ひ取る。蠟染は筆觸の鮮やかに出る所に特色があるので、瀟洒な夏の着物等に相應し。

霧噴染の仕方 これは家庭染料では困難とされてゐる帯、又はそれ以上大きいものにする。これには模様となるべき木の葉又は、形のいゝ草などを用意しなければならぬ。そして先づ縁側か、土間の平らな所へ布を敷いて、その上へ之等の植物を適宜に配置し、その上から、熱湯で溶いて冷した染色液を霧吹きで萬遍なく吹きかける。かうして出來上つたものは、地色が如何にも霧がかゝつたやうにぼかしてある中に、くつきりと草の葉の形が浮き出て、まことに品のいゝものである。色止めには、明礬二つかみを大きいバケツに溶き、それを鹽にあけて、その中へ染めた布を入れ三

四分して引き上げ、濡れたまゝで乾かし、後でアイロンか火熨斗をかけるのである。

刷毛目染の仕方 先づ用布をピンで板へ留め、次に新聞紙の一面へ糊を塗つて乾かし、これに思ひ思ひの模様を描いて切り、豫め型紙を作つて置く。この糊のついた一面へ、水刷をして、これをべつたりと布地へ張つて置く。かうして張つて置いた上から紺屋で使ふ八寸の引刷毛を用ひ、たつぷりと生漉を含ませて刷染めをする。柿漉のことだから刷いだ直ぐ後は何の色も出ないが、これに三匁の明礬又は緑礬を水一升に溶き、この液の中に一分間ばかり布地を浸しておくと、丹礬に浸したものは刷毛目が茶褐色に變り、緑礬に浸けたものは、鼠色に變つてくる。かうしてやがて乾かしたならば貼つた紙を取り、蒸しにかけて水洗をする。

植物染の仕方 水二合に長さ一尺五六寸に切つた蓬を三本ぐらゐを、手頃の鍋に入れ、一時間ばかり火にかけておくと、どろりとした液になる。それへ、所用の布を浸し、一旦乾いたものを、明礬水か灰汁に浸すと、ぐつと染色が冴えてくる。一度染めただけで、色が薄かつたならば、幾度も幾度も乾かした上へ更に色をかけて仕上げる。

▲べにばな染 べにばなは農家の庭などによく見る花である。高さ四尺ぐらゐまで伸び莖や葉に野

薔のやうな刺をもつてゐる。この花だけをとつて煮染めに行くと、艶麗な桃色染が出来上がる。

▲煎茶染 いゝ煎茶を濃く煮出した汁で布地を染めると、すつきりした緑が得られる。

▲小豆染 小豆一合に反物半反の割にして一緒に鍋に入れて、ぐらぐら煮ると、美しいローズに染まる。

▲黒大豆染 黒大豆一合を二合ほどの中に浸け、その煮出汁で染めると、落着いた薄紫が染まる。色出しは蓬と同様。

▲かりやす染 野生のかりやすを刈つてきて、大釜に入れ、色の出たところでこれに布地を浸け、灰汁で色出しすると、目覚めるやうな萌黄が染る。これは古くから麻蚊帳などの染めに用ひられてゐる。

以上の五種の色出しには、すべて明礬水か灰汁を用ひるが、茶染の場合だけは例外で、これには灰汁は禁物である。

新絞染の仕方 これは小さいもの、例へば半襟や風呂敷に適してゐる。用布を四つ折にして、それに圖案をおいて、その上をなるべく堅く縫つてゆく。そして縫上つたのを煮染めにして乾いた

ところで、糸を抜くとその跡だけが、恰度絞り染の如く白く抜けて来る。縫數が多ければ多い程模様は複雑になつて来るし又折方の工夫に依つていろいろ變つた模様も出来て面白ものだ。尙この絞染はたれにでも容易に出来るが、以下の各心得をのみ込んで居ると一層便利に出来ると思われる。

(イ) 絞方は充分きつくすること。

(ロ) 染色は、いつも希望の色より色を濃く溶くこと。

(ハ) 染めてゐる間に色が薄いと思つたら布地を一旦引上げて色を濃くすること。慣れないうちは初めから濃くすると失敗すること。

(ニ) 絞りは乾いてから解くこと。

(ホ) 一反ぐらゐの染物をするときには、少くとも石油罐ぐらゐの大きい器を用意しなければならぬこと。

墨流し染の仕方

この染方は、先づ生地を染着をよくして置かなければならぬ。それには姫糊を薄く煮て、その中に食酢をほんの少したしてよく混ぜたものを、生地の上へ刷毛で引き、その

まゝ乾かして置く。次になるべく上等の墨を磨つて、これにテレピン油を一滴加へ、筆の尖に浸して、豫め用意して置いた浅い鹽の水面に落す。そして筆の尖にピンツケ油を塗り、これで墨の雫の真中をちよいと突くと、やがて環状に廣がるから、また筆に墨をつけては、この輪の中心に落し、前の箸でついで輪を擴げる。かやうにして、多くの輪が水の表面に出来たところで靜かに吹くと環状のものは、恰度木目のやうな形に變つて来るから、その時、前のやうに布地を平に水面につけて引上ぐれば、それだけで綺麗に木目が染着するのである。これにはアイロン仕上げだけで、別に蒸しをかけなくとも、色の落ちるやうな心配はない。

ほかし染の仕方

布地は縮緬でも、羽二重でもメリンスでもよい。先づ大豆を一晩水につけて置き、よく播り潰し、これに少しづつ水を加へて、牛乳の濃さに薄める。二尺位の布地だつたならば、大豆五六粒で充分。これを布地に塗つて蔭干にして置く。次に圖案は、圓や半圓を自由に描いて、それをほかしたのも面白い。それで大體の下繪を鉛筆で布地の上に描き、その上をざつと水刷毛で刷いてしばらくおき、生乾きのところへ、思ひくの染料をもつて、その上を描いてゆく。單にこれに限らず、どんな模様でも差支ない。何れにしても自分の趣味を其處へ現はすのが一番だ。

これは蒸器にかけた上、水洗ひをしなければ充分な色止めは出来ない。

レース染の仕方 これは型紙の代りに、カーテン用のレースを用ひる方法である。レースは半ヤールもあれば充分。まづこれを手頃の枠に張つて二三度澁柿をひき、充分糸を固めてしまふ。次に生地だが、これは木綿でも絹物でも結構。まづ張板を用意し、これに少し硬目に作つた姫糊を塗つて乾かしておく。これへ用布を張り、またその上に布海苔を塗つておく。染料は好みものを、熱湯で溶き、その分量が茶呑茶碗に一杯ぐらゐであつたらば、その中へ布海苔を茶匙で一杯ぐらゐの割に入れてよく混ぜ合す。これを刷毛(なるべく染色用の丸刷毛)で、レースの上から刷り込んでゆく。するとレースの目を通して、染料が布の上に染めつき、レースの模様の部分だけ白く残る。色止めは、大きいものならば、家庭では蒸しが困難だから、紺屋へ頼む方が安全だ。また明礬水を用ひても結構。

モス友禪の染方 モス友禪の染方には、先づ特種な糊が必要である。即ち糯米糊を作り、これに型付屋から小紋糠を買つてきて、半々に混ぜておく。次に、望みの染料を少々濃目に溶いておいて、これを糊とよく煉合せてとつておき、一方に、布を用意する。布地はやはり、畫紙をもつて充

分に張つておく。次に模様だが、これは一例として實物を應用することにする。即ちかへでや櫻の葉の類をとつて、これの裏面に、豫め作つておいた色糊を塗つて、これを布地に貼付ける。かうして一夜もおくと、よく染付くから、やがてこれを蒸しにかけ、その後で水洗ひをする。葉脈や、葉の形など、細い點までがはつきりと染上るし、また染色も自由に用ひることのできるところにこの染方の特長がある。

蒸しの仕方 染色は仕上の色止め等に蒸しをするが、これを家庭用として、最も簡単にするには、石油の空罐を利用することが一番である。即ち空罐の底に孔をあけ、そこに簀の子を渡し、その上に一枚、厚布を敷く。そして上の方の兩側に棧をとりつけ、その棧に風絲を並行に張り、布地をかける。時間は凡そ三十分ぐらゐで充分。勿論、上には蒸氣のもれないやうな蓋をおかねばならぬ。

廢物の衣類を優美な流行の絞染に

何處の家庭でも、永い間戸棚や箆筒の底に藏ひこんである、色の褪せた、流行おくれの衣服や窓

掛や袖裏などがあるものである。かうした廢物を利用して、上手に家庭で染色すれば、夜具の表側や、子供の兵兒帶などに若返らせることが出来、いつでも役に立つ、經濟の上なしである。左にその二三を紹介することにする。

古い窓掛を立派な夜具に

廢物として、何年も藏ひ込んであつた、白富士絹の窓掛を利用して、古物などは思へぬほどの立派なものに再生することが出来る。地を黄色に染めて汚れを消し柳染に絞つて濃い納戸色に染めると、年輩向の胴拔などにも欲しいやうなものになる。また、汚れた白地を消すために、極く薄りとき色に染め、板縮にして、とき色と燃ゆるやうな緋とに染める美しい色彩と、大まかな板縮の柄は、夜具としてもこの上なしであり、若い方々の長襦袢や、赤ちやんのおちやん／＼などにも適當なものである。同じ板縮でも、配色を藤色と紫紺などにすれば、粹向な長襦袢に、桃色と若紫などであれば、若い奥様などに向くものとなる。左に、いろ／＼と應用の利く、極く簡單な染方の、板縮絞りの染方を述べやう。

▲板縮絞 材料は古物の窓掛のことであるから、まづよく洗濯をして、染めの邪魔にならぬやうに石鹼の氣をすつかり濯ぎ落し、地を薄いとき色に染めて、よく乾かす。乾いたならば、次のやうに

して板縮にし、濃いとき色に染める。次には板縮の板をあてかへて締め、板で押へた以外に見えてゐるとき色を色脱劑によつて色を脱き、そのまゝ緋色に染め、よく水濯をして板縮をほどき、乾して仕上げのアイロンを掛けるのである。

染料は、こゝでは絹物を染めるのであるから、酸性染料である。色はとき、緋の二色であるが、これは、前述の如く、各自の好みである。

また色脱劑は、極く簡單に脱けるハイドロサルファイト、媒染劑は硫酸を使ふのであるが、家庭では食酢を代用しても、結構間に合ふのである。

用具としては、板縮をする板片と、染める器、染料を溶くものなどである。板片を鯨尺で幅一寸五六分、丈六七寸の、布を挟んで堅く糸で括つても折れぬ程度の、なるべく薄手の板を二枚。染める器は、瀬戸引の洗面器かバケツ、染料を溶くには茶吞茶碗で結構である。

▲地の染方 新しい白布地であれば、地を染めずに、そのまゝ板縮に絞つて染められるのであるがこれは古い白布地なのであるから、ちよつととき色に染めて地の汚れを消すのである。

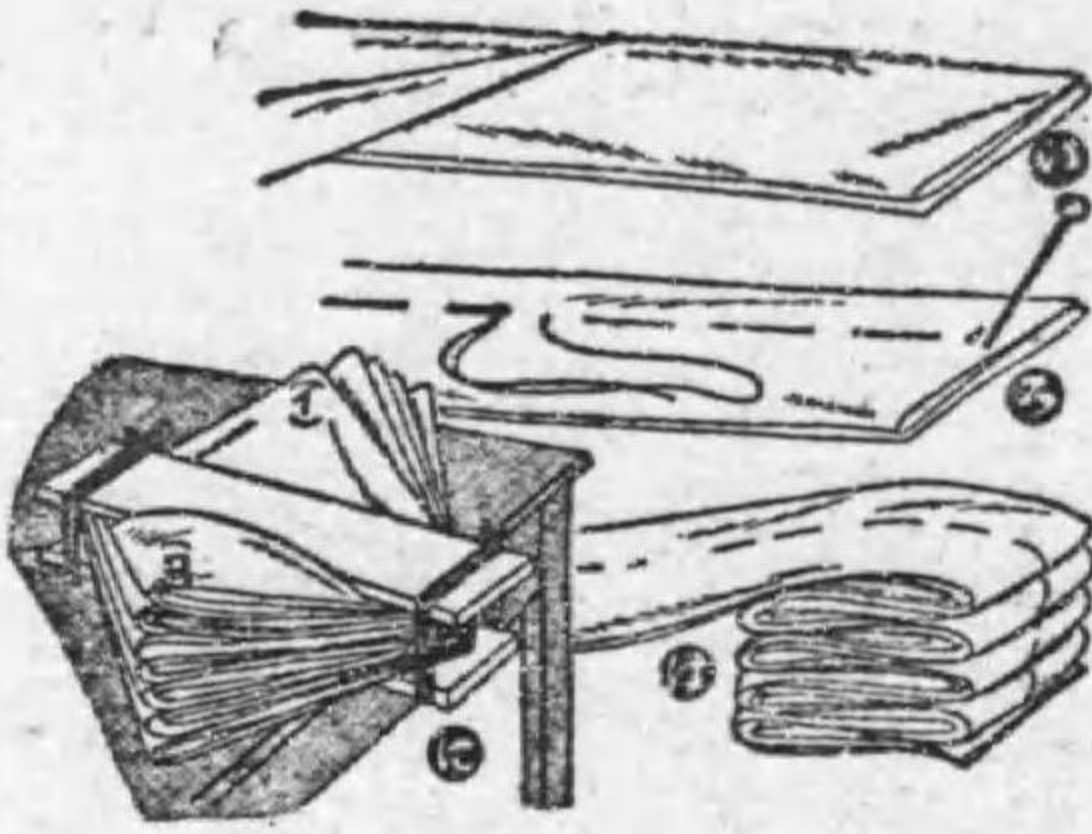
まづ、よく洗濯をした富士絹の窓掛を水に浸けておき、とき色の染料を、ほんの少々茶吞茶碗に

取り出して、熱湯を入れてよく溶かす。

洗面器に布のたつぷり浸るほどの水を入れて火にかけ（瓦斯ならば理想的）これに染料を入れて攪拌し、水に浸してある布を、軽くしぼつて繰込み、布を萬遍なく繰廻しながら染めるのである。そして、だん／＼染液が熱くなつて来て、染めつきが好みの色に染つたところで、ちよつと引揚げ、媒染劑のお酢を、茶呑茶碗に一つばいぐらゐ入れて攪拌し、再び布を繰入れて前の要領で染めるのであるが、酢が入ると、急によく染めつく。好みの色よりも少々濃い目に染つたところで引揚げ、水にさぶ／＼と濯いで日陰に干す。そしてすつかり乾き切らぬうちに、アイロンをかけてよく伸ばし次のやうにして絞るのである。

▲板縮の絞り方「絞り方の順序」(イ)圖のやうに、布幅をきちんと三つ折にして(ろ)のやうに假縫ひをし、すれぬやうに押へておく。次は(は)のやうに、巾よりも六七分位長目に折たゝみ(に)のやうに二枚の板片を、上下とも眞斜にあてゝ布を挟み、卓子の上にも載せて、左手でぐつと壓しながら、できるだけ固く紐で括りつける。

▲板縮の染方 板縮にしたまゝを、こんどは極く濃いつき色に染める。まづ、とき色の染料を、前



(絞り方の順序)

よりも多く茶呑茶碗に溶き、地を染めたやうに、洗面器には染物のたつぷり浸るほどの水を入れて火にかけ、地染と全く同じ要領で染めるのであるが、ちよつと注意しなければならぬことは、板で縮てある際まで染料のよくつくやうに、布の疊目を開きながら染めなければならぬ。助劑を入れることも同じ加減である。そしてよく染つたならば水濯を充分にして、布の崩れぬやうに括紐をほどき(イ)(ロ)の向に板をあて替へて前のやうに固く紐で括る。

次は洗面器へ新に水を入れて火にかけ、色脱劑入イドロサルファイトの白い粉末を、茶匙で山盛り一杯入れて、溶けたならば、板縮の染物をとつぷりに入れ、染めるときに、布の疊目を開きながら浸けてゐると、だん／＼熱くなるにつれて色が薄らんできて、煮沸つて十分もすると、とき色の板縮以外に現はれてゐる分は、色が脱けて、すつかり白くなつてしまふ。引揚げて水に濯ぎ、そのまゝで、こんどは緋色に染める。

緋は、燃ゆるやうな緋に染めると宜しい。地はとき色の薄色。次は濃いつき色であるから、緋は

出来るだけ濃く染めたい。染める要領は、濃いとき色を染めたやうに、まづ、洗面器に水をたつぶり入れて火にかけ、緋の染料を充分に溶いて入れ、布の畳目をよく開きながら染め、助剤の食酢も前のやうに入れる。よく染つたならば、引揚げて水濯をなし、括紐をほどいて、いま一度ざぶくと水に濯いで、軽く水を切り（決してしぼらずに）日蔭に干す。

▲仕上げ。よく乾き切らないうちに、アイロンをかけて伸ばすのであるが、もし糊氣がほしいと思ふならば、布海苔を極く薄く煮て溶かし、布で漉しておいて、この中へ暫く浸け、軽く水氣を切つて干し、アイロンをかけると、布に光澤が出て柔かになる。これですつかり、優美な柄に染上り、上品な夜具の表側が製作されたわけである。

▲染方について。かうした染方は、染める器にある染料、たとへばこの場合の緋でも、とき色でも同じだが、煮沸つて五分でも十分でも、或は二十分でも、布と染料とで一樣にはゆかないが、煮沸つてすつかり液の色がなくなるやうでなければおもしろくない。だから、一時に多くの染料を溶いて入れずに、二度でも三度にも染料を足し加へ、染料を用ひすぎてはいけない。
なほ、こゝでは窓掛の古物の無地布であつたが、もし柄物を染替へるのであれば、まづよく洗濯

をしてにおいて、それからマルセル石鹼を溶かした湯で煮出し、次に、前のやうに、ハイドロサルアイトの液で煮沸すると、大抵のものは脱色する。しかし、染料の性質で、どうして素人には脱色し難いものもあることを承知されたい。

古い袖裏で新柄の兵児帯

別段これといつての使ひ途もなく、藏つてあつた白羽二重の古い袖裏で、立派な子供の兵児帯が出来る。誰にも簡単にできる。縫絞の男女児用のものである。こつくりとしたエンジ色の縫絞か、とき色と緑色の配色をした、板縮絞など、至極優美なものである。さて、こゝでは、板縮絞の方は、前述の夜其表と殆ど同じ染方で、たゞ、前のは板縮をするときに、折たゝんだ布へ、板を斜にあてゝ縮めたのを、これは、縦も横も真直に板をあてゝ、縮めたまでの相違であるから、省略することに、縫絞の染方を紹介することにしよう。

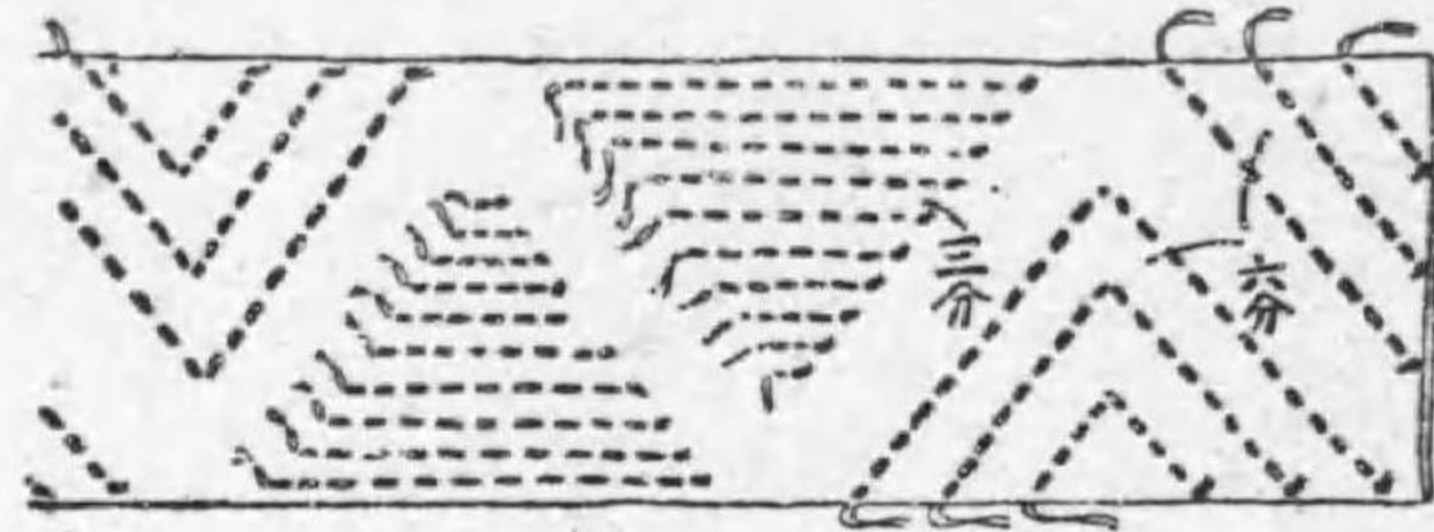
▲材料と用具。材料としては古い白羽二重。用具としては絞るのに、丈夫な白木綿の縫糸と、並の縫針、下繪を描く青花紙と古い小筆、染料は絹物であるから酸性染料で、色合は好みものを選び媒染材として食酢を用意する。また、染めるのには、瀬戸引の洗面器かバケツ、染料を溶く茶吞茶碗などを揃へることは、前同様である。

なほ、こゝでは純絹であるから、酸性染料を用ひるが、もし、少しでも綿入りであるときは、この染料では綿の分が染らないものであるから、直接染料を使用する。直接染料は綿、麻、絹、毛のいづれにも染めつく、重寶な染料である。染方は酸性染料と同じ要領である。

▲縫絞 『縫絞の縫方』圖のやうに、布巾を眞二つに折り、青花紙をちぎつて小皿に入れ、ほつちり水をたらして、出た汗を小筆につけて、圖のやうな山形を描く。山形の線は、六分ぐらゐの間隔に縦線の方は、三分ぐらゐづゝはなして描く。

描けたならば、圖のやうに縫ふのであるが、縫針に、縫糸を二本どりにつけて、糸端を大きな止玉にし、線描の通りに、ぶつくと普通の針目で、一線づゝを布二枚のまゝ縫つて、糸端をとめずに二寸ぐらゐ残して切る。

この通りに、布丈の全部を縫つては、糸を切つておくと、少しのことであるが不経済であるから針を十本ぐらゐ使つて、十本を縫つたならば、最初一本を引締めてしまつて、糸を切り、この針で、また先の線を縫ひ、前に縫つた二本目を引締める。かうして先へと縫つては、前に縫つた分を引締めるながら、終りまでを絞ると、糸の無駄を少しもせず、絞ることが出来る。一本縫つては、



すぐ引締めて絞ると、次の線を縫ふことが出来ないから、この方法が一番宜しいのである。なほ、この絞は、糸の引締め方がゆるくては、染てから判然しない。引締の絞は、出来るだけ固い方が、染上りもいゝのである。

▲染色法 絞つた布を染める前に、必ず暫く水に浸けておく。水浸けをしないですぐに染料に染めると、あとで折角の絞が現れないで失敗することがある。

で、染める要領は、前の夜具の表側を染めたやうに、まづ染料を茶不茶碗に出して、熱湯を注いでよく溶かす。染める器には、染物の充分に浸るほどの水を入れて火にかけ、最初から染料を多くしないで、二三度に分けて染める方が斑なく上る。まだ水のうちから染料を入れてよく攪拌し、染物を繰入れて、染料が絞り際までよくつくやうに、両手で繰廻しながら染める。だんぐらゐ染料が熱くなり、染めついで来たなら、布を引揚げて、染料を足して染め、好みの色に染つたところで、お酢を入れて再び染めると、すつと濃くなるが、これは乾くと、程よい色になる。すべて濡色は、濃く見えるものであるから、この加減を注意するが宜しい。

引揚げるときは、染液が煮沸つてゐて、殆ど染色が吸ひとられて失くなつてゐれば、それは上手な染方なのである。液に染色がまだまだあるうちに、布の方が充分に染つてゐるやうでは、染料の用ひ過ぎで、完全な染方とはいはれない。

▲仕上げ方 さて、いよ／＼染上つたら引揚げてよく水濯をなし、そのまゝ光澤をよりよくするため、なめてみて、幾分酢味を感じる程度の水へ、三十分浸けておき、別に濯がすに、そのまゝ絞糸を解かすに水を押し切つて、日蔭に干す。

乾いてから、好みの色であれば、絞糸をほどいてしまふのであるが、もし濃かつたり、薄かつたりした場合は、染直すのであるから、必ず乾いた色を見てから絞糸をほごすやうにする。

兵児帯は、絞つたまゝの方がよいのであるから、このまゝで用ひるが、もし伸した方がよければ霧をふいて、アイロンをかけて仕上げよう。

なほ、この絞りは極く簡単であるが、割に榮えるから、色合を變へて、片側帯などにもよろしいと思ふ。地の餘り汚れたものは、さきに地染をして、汚れを消してから絞つて染めると、ぐつと引立つてくる。

簡単な家庭染色で着古しも若返る

ちよつとした主婦の心掛ひとつで、これも家庭的に非常に便利でもあり經濟でもある、そして誰にでも出来る簡易染色法である。着古して色が焼けたり、褪げたりしたものを、そのまゝ棄て、しまふことが、どんなに不經濟なことであるかは、申すまでもないことである。それかといつて、これを染物屋さんに頼んだのでは、相當な染賃をとられて、物價の安くなりつゝある今日では、新品を買ふ方が増だといふやうなことになる場合が多い。そこでこんな時には、ひとつ奮發して自分で染直し、或は別な物に仕立直してみるのも、當節柄結構なことかと思ふ。で、先づ順序として、染料のことから説明することにしよう。

染料について 染料には種々あるが、家庭で誰にでも用へるものとしては(一)直接染料(二)酸性染料(三)鹽基性染料の三種がある。別に交織物用染料が賣られてゐるが、これは餘り用ひる事がない。そして、これまで家庭染料として販賣されてゐる。都染、豆奴印、ヤコブス、星印實用染料などには、何れもこの一、二、三の三種が出来てゐる。

直接染料は、木綿でも絹でも毛でも、麻、人絹、何でも染色することができ、至極重寶なものであるが、缺點として、染上りがどうしても餘り美麗でない憾みがある。

酸性染料は、絹と毛にしか染まらないものである。が、染上りの色澤は、相當によいものである。鹽基性染料は、やはり直接に染まるのは、絹と毛だけであつて、これは染上りが大變美しく仕上

るのである。しかし、只缺點としては、日焼することである。で、結局、木綿や麻、人絹のやうな植物性の中には、直接染料を絹や毛には酸性染料を、特別に色を美しく出したためには鹽基性染料を用ひ、交織物を染めるには、交織物用染料を使へばよいといふことになる。

そこで、染める品物が、植物性が動物性かといふことがわかれば、次に最寄りの染料店（地方では薬店）へ行つて、例へば白キヤラコのワイシャツ一枚を茶に染めやうと思ひますが染料を下さいとか、又は緑色のサージのスカートを紺に染めかへたいから、よさそうな染料を下さいと云へば、前の場合には直接染料の茶を、後の場合には酸性染料の紫（青味の多い紫、即ち桔梗紫）をくれる。分量は云はなくとも、ワイシャツとかスカートとか云へば、それで凡その見當は先方できつてゐるが、大體小罐一箇で、色揚の場合なら一反、白地で染める場合には半反ぐらゐ染まるので、

値段は二十錢から二十五錢位である。

染色の用具

家庭で染物に使ふ器としては、前項にも述べておいた通り、何でも有合せの物を代用すればいゝのである。即ち、例へば半襟、手柄のやうな小物には金盥、鍋などで充分間に合ふし、スカート、ワイシャツなど中位のものには、バケツなどが丁度恰好なものであらう。また、着物など一反物には大釜があれば好都合であるが、石油の空罐に手をつけて、臭味をぬいたものが宜しい。

要するに、煮ることの出来る器でなければならぬ。何故なれば、前記の三染料は、煮なければ充分に染らないからで、殊にモスリンのやうな毛織物では、少くも十分か二十分以上は煮立たせなければ染めつかない。

染色前の用意

古いものを色揚げする場合には、温湯で汚れを浮き立たせ、マルセル石鹼を刷毛につけて洗ひおとし、次に清水でよく濯いでおくことが必要である。さうでない、様に染め上らない。また、洗濯さへすれば、乾かすことは要らないので、もし前に洗濯したもので、乾いてゐるものならば、豫め水に浸して、充分しめしておく、むらなく染め上げるのである。殊にこの濡

らしておくことは、毛織物には是非必要なことである。以下實例について染め方を述べやう。
青磁色のスカート紺色に 色が褪めてしまつて、そのまゝではどうにも仕方のない、子供の青磁色のサイズのスカートを、紺に色揚げすると、また結構な新しい通學用のスカートが再生される。

▲準備 まづ、準備として、染料は酸性染料の桔梗紫小一罐(二十錢位)助劑として酢茶碗一杯、(一合たらず)用具はバケツ又は石油罐(煮染め出来る物)七輪か瓦斯。染粉を溶くための茶碗、竹製の長箸(丈一尺二三寸、五〇纏のもの)を用意する。

▲染め方 染粉(桔梗紫)を茶碗の中に入れ湯で溶かし、布ごししてバケツ(又は石油罐)に入れ酢を茶碗に一杯ほど入れて、湯又は水をスカートが被る程度に入れ、初めにしめしておいたスカートを入れて加熱する。酢は染めつけをよくするためで、これを入れないと絹や毛はよく染らない。また熱もぜひ必要なのである。

加熱するときは、絶えず攪拌して、一部分だけが先に熱くならないやうにしないと、斑になる。かうして二十分ばかり煮沸つてから、取出して水で洗ひ、絞らずに乾かし、アイロンで仕上げると

こゝに新品が出来上るのである。女學生の袴地、洋服地も之と同様に色揚げ出来る。

▲注意 これは純毛のサイズであるから、酸性染料を用つたのであるが、もし交織物の場合なら一旦酸性染料で染めた後、直接染料で染める。また始めから、交織物用染料を使へば一層簡便である。

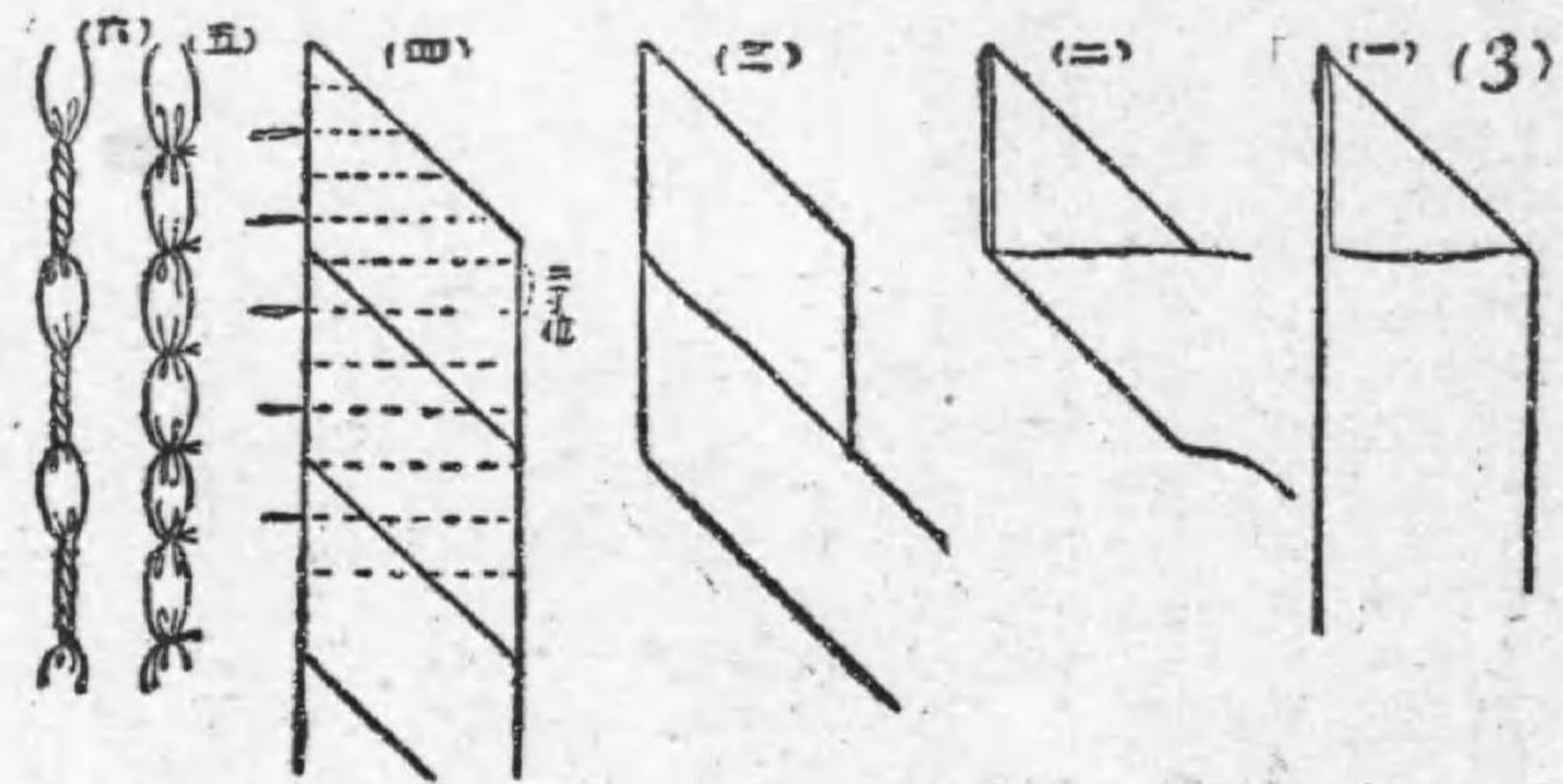
色は緑から紺にするのであるから、ちよつと考へたよけでは、何色を持つていつたら紺になるかわからないかも知れないが、次のやうに考へればすぐ了解することが出来る。

つまり紺といふ色は、青が濃く重つた色で、青がくすんだ色と考へて大差がない。それで地の緑色を消すためには、赤色を用ひる。緑色は黄と青との混合した色であるから、これに赤が加はつて赤、黄、青の三色が適當な割合になると、淡ければ灰色、濃ければ黒となるのが原則である。故にこの原則はよく記憶しておいて、地の緑色を消して灰色にするためには、赤が入り、紺にするためには濃い青が入り、結局赤と青の二色を混合して使ふか、又は赤と青とが交れば紫であるから、青味の多い紫、即ち「桔梗紫」を使へばよいといふことが解るのである。

男物を派手な女物に例へば、四の字崩しの地味な男物、絹の茶縞物があるとす。これを縫

絞にしてみると、中半婦人向のちよつと變つた面白い着物ができる。例によつて、準備としては染料(酸性染料の黒小一罐)助劑(酢を茶碗一杯半、一合餘り)用具(前項と同様)
▲染め方 は、これは簡單な絞染めであるから、染める前に縫絞りをする。その縫方は、二寸(七、六厘)巾置きに、縫糸を二本にして細く手縫ひ、つまりぐしぬひにする。全部をそれぐしに縫つてから、固くひきしめて、そのまゝ水につけてしめしておく。そして、いよく染めにかゝるのであるが、その染め方は、みな前項と同じ要領なのである。
充分に乾いてから糸をとく。このとき、早く見たいと思つて、濡れてゐる時に解くと、折角よくできたものが滲んだりしてみられなくなるから注意することである。出来上つてほどいて見ると、黒地に茶色の絞り縞が現はれて、意外に面白いものとなるのである。

メリンス單衣を斜段に絞つて 色が褪めて着られなくなつた、縦縞模様のある青磁色のメリンス單衣があるとする。これを斜段絞りにして、蒲團皮にする。染め方の準備としては、前項同様酸性染料の黒小一罐、助劑として酢を茶碗一杯半、其他前項参照。
▲絞り方 まづ、これは單衣を解き洗ひして乾かし、元の反物の形に縫合せてしまふ。これを一圖



の様に端から三角形に折り、二圖のやうに右に折り曲げ、又三圖のやうに折り目に合せて、段々と斜めに巻くやうに折つてゆくと、袋の形になる。合せ目はくづれないやうに、ざつと簇でとめておく。

次に、折つたまま、端から二寸(七、六厘)おき位に二本糸で横段で縫ひ、一つおきに二三寸糸を長く残して切る。(四圖)全部かうして縫ひ終つたら、五圖のやうに糸をひきしめて、それから六圖のやうに一つ置きにのこして置いた長い糸で、圖のやうにできるだけ固く巻きしめて、前の絞染の時のやうに、これを水につけておいて、それから染めにかゝるのである。

▲染め方 やはりだいたい前と同じである。よく乾いだから糸を解くと、三寸位の斜段に一つ置きに柳絞りが出来、元の青磁の型染めが地模様となつて、うす緑と黒の氣の利いた蒲團柄と

なる。

なほ黒の染料は純黒のものが少く、幾分赤味がかつたものが多いやうであるが、これには緑色を交ぜると赤味が消える。この色直しは、染色をする場合には大層大切なことであるから、見え易いやうに圓を描いて適宜六つに切り、一つ置きに赤、青、黄と配置し、次にその間には、混合によつて出来る色の名を記入しておくことと便利である。

裏地類の色揚 裏地は着たり洗濯すると、色はげやすいものであるが、これは簡単に色揚が出来る。絹やモスリンなどは、今まで述べた方法で、酸性染料又は鹽基性染料を使つて容易に色揚ができるが、木綿の裏地は、直接染料を使つただけではあまり見栄えがしないのである。それで直接染料に、ソーダを茶匙三杯（一反に對し約三匁見當）位入れて養染めし、取出して水洗ひすると紺、花色、淺黄等の青色系統の裏地には、別に極くうすい鹽基性染料メチル、ヴァイオレット（紫粉）又はメチレンブルーウの冷たい溶液の中へ入れて、十分間ばかり経ると、色を全部吸つて、水は透明になるから取出して一旦水洗ひし、日陰干しにすると、大變美しい色に上る。これを鹽基性染料の上掛御化粧といつて、當業者仲間では木綿物色揚の秘訣としてある方法である。たゞ注意し

て、厚化粧にならぬやうにしなければならぬ。

人造絹糸製品の色揚

近頃は人絹が重寶がられてきて、羽織の紐、ネクタイ、リボン、ショール其他色々のものに使はれてゐるが、今日の人絹の九割まではヴィスコース製人造絹糸であつて、たゞ取扱ひさへ注意すれば、木綿と同様に、直接染料で容易に染めることができる。

注意すべき事柄としては、温度は攝氏六十度以下（手を入れられぬ位の熱さ）でなるべく時間を短く染めること、水を切るには捻ぢらないで、別の布の間に挿んで押しつけるやうにすること、乾燥は竿にかけないで、金網または板張りの上に載せて乾かすことである。

色褪せた半襟に山形紋り

古い半襟は紐にするとか、襷にするとか、または別項小布類の用法で述べたやうな、いろいろの活用法もあり、それら結構なことであるが、それらは最後の利用にして、生命のある限り若返らせて役立たせることは、趣味、經濟からいつてもよいことである。刺繍のある半襟は、地色に近い色でうすく染め上げれば、また新しいやうになる。無地のものはそのまゝ色揚げをして使ふ場合もよいが、やはりやけた部分が目立つので、次のやうに山形紋りにでもすると、色のやけたのも目立たず、たいへん美しくなる。

準備としては、やはり前同様で、酸性染料と直接染料の黄、青、臘脂の少々。助劑として酢又は醋酸少々。用具は小金盥又は小鍋。

▲絞り方。うすみどりの縮緬の半衿であるならば、染めにかゝる前に、揮發油でふいて、よく汚れを落し、更に布海苔のうすい液で洗つて、全體の汚れをおとして、下洗ひをしておく。

これを、三寸五分(一三、三種)位おきに、山形に左手で細かく布をつまみまとめ、二分(八耗)位の布テープか、色のついてゐない麻紐で固く括り、黄色の薄い色で染める。

▲染め方。しばつてある半衿を、一番はじめに黄色のうすい色で染めて、次にその間をやはり前と同じく山形につまみまとめ括り、今度は薄青の色で染める。更にまたその間を同様に括り、エンヂ色で染める。間隔の大小にもよるが、いつばいになつたら最後に黒で染め上げて乾かし、初めて全部を解くと、エンヂ、青、黄と種々の色が山形に美しく現はれる。

これは括るテープや、糸の太い細いにより、太く細く變化のある線が現はれて、頗る面白い半襟が出来るものである。

友禪帶地の若返り法 帶地も、羽二重、友禪のものは、前になるところと、お太鼓に結んで出

るところと、それらが色がさめやすく、困るものである。そんなとき、うすい地色で色の褪めたものなれば、地色だけ色をかけると、再び新しく更生する。

まづ、模様部分は染料のつかないやうに、蠟をとかして筆につけ、丹念に模様のところを伏せるのである。この蠟は、木蠟か白蠟、又はローソクの蠟を用ひるが、代りに防染糊をおいてもよしい。次に、無地の時は、水に直接染料の酸性染料を好みの色に溶かし、醋酸か酢を少し入れて、よく攪拌し、この中に布を平らに繰入れて、染め上げ、水にさつと通して乾かす。

これを新聞紙の間に挟んで、上から熱いアイロンをかけて、蠟を紙に吸ひとらせる。今度は、布と布がつかぬやうに、ハトロン紙をあてゝ包み、御飯蒸しの中へ入れて蒸すのであるが、このときは、下に茶碗をおき、その上に前の紙包を、周圍につかないやうにおき、更に晒布二枚か、ネルの布をおいて蓋をし、蒸気が上つてから三十分位蒸して、ザット水洗ひして乾かし、残りの蠟は揮發油で取る。

模様の色合ひにもよるが、地色を濃くした方が、模様がういて引き立つものである。注意として、蠟で模様を伏せる時は、餘分の所へたらしたり、つけたりしないやうに氣をつける

ことゝ、蠟が平らに平均につけて行くことが大切である。
最後に、染色について、全體的に注意したいことは、家庭染料の選び方である。家庭染料にも、随分種類が多く、従つてその品質の見分け方などにも、非常に困難を感じるものであるが、先づ一般的に信用のあるものを選ぶことが肝要で、星印實用家庭染料などは、割合に眞面目で、しかも仕事の手軽に出来るものであらう。

新案のナフテン染を應用して

前述のやうに、家庭染色の方法には、絞染や板締など、いろいろの仕方があるが、次には新案のナフテン染の方法を紹介しやう。これはたゞ、ナフテン防染液で模様をおき、あとの染方は、絞染や無地染など、全く同様な方法で染めたもので、極く簡單なものである。その前に、まづナフテン防染液について解説する。

▲ナフテン防染液 これは模様を染める専門の液である。白脱するのには、白液、赤でも青でも、好みの色模様をおくにはその色液がある。色の種類は白、とき、赤、黄、緑、青、紫、茶、鼠、

黒などであるが、これを混ぜ合せて濃い色、派手な色、其他何色でも好みのまゝにできる。

好きな模様を、好きな色に染められる家庭染色は、いろいろあるが、このナフテン染のやうに、何の道具立も要らず、古い毛筆と、煮染をする洗面器かバケツがあれば間に合ひ、どんな初心の方にも手取り早く出来、それに廢物利用が利くから重寶である。そして又、手のかゝらぬことは、絞染以上である。

この液は、筆の運ばれる程度に粘氣があるが、先づ毛筆につけて模様を描き染めにする。描き染めて乾いてから絞染のやうに煮染をすると、地が染つても模様は染らない。例へば、赤の液で描いて、地を紫の染料で煮染めをしたりすると、紫色の地に、赤の模様が現はれて来るのである。防染液であるから、煮染めしても模様染の上には、地染が染めつかぬのである。

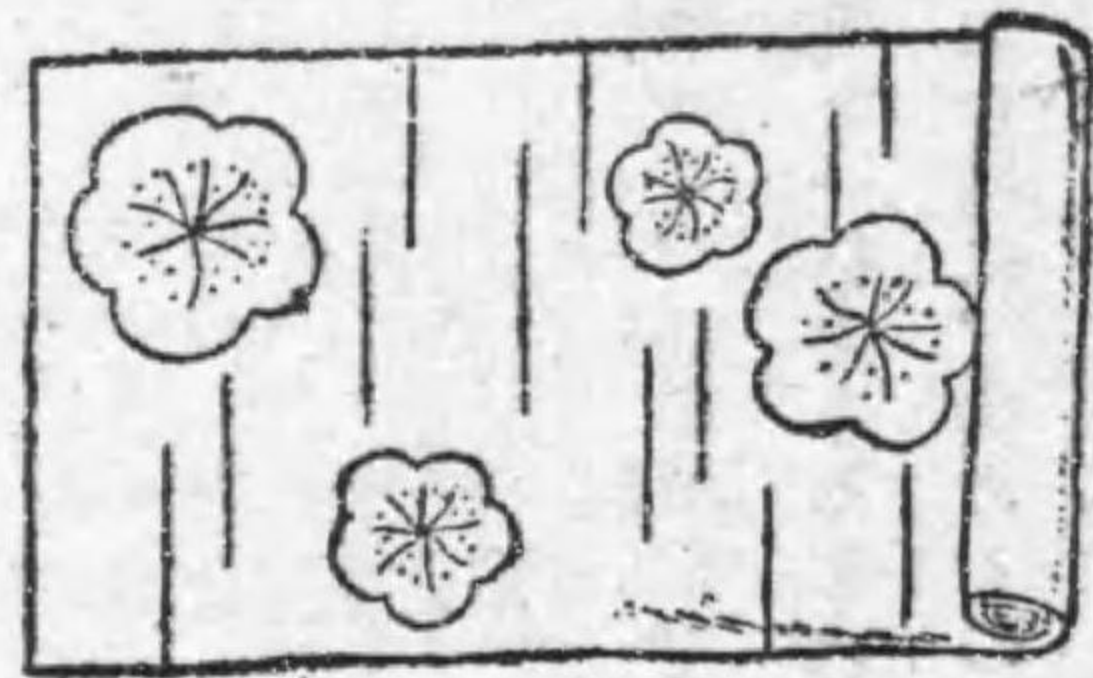
▲白液は蠟染用に 白液で、白布地に模様を描いて、何か色物に地を染める。すると、恰度蠟染のやうな感じになるが、蠟染はナフテン染のやうに、煮染には勿論できないし、それに蠟を脱ぐ手數も要らない。毛筆で描き染めにするのであるから、筆致も充分に出されて極く簡單に蠟染風に染められるのである。

▲白地の模様染 もし白地に、いろ／＼な模様を出さうとするには、前のやうな要領で、白布地に色液で模様を描き染めにし、染料なしで、たゞ湯煮にする。すると染料で煮染をしたと同じわけで煮る熱によつて模様が染めつき、布地は依然として、元の白地であるから、好みのまゝに白地模様が染まるのである。

古い胴裏絹を子供の被布に 布地は古くなつて白ちやけた胴裏絹、所謂廢物利用の染物で、胴裏は約半反であるから、六七歳位の子供用被布には恰度よろしい。廢物を利用したものとは思へぬ新しさである。

▲材料と用具 模様染としてナフテン防染液の白、黄、赤の三色。地染用として酸性染料のエンジ色。地染用の洗面器、他に下繪を描く青花、または鉛筆。醋酸又は酢。アンモニア少々。新聞紙止紙、毛筆などを用意する。

▲下繪の描き方 胴裏をほどいて、端縫をしてから洗濯をしてから乾かし、アイロンをかけてよく伸ばしておく。次は「下繪の描き方」圖のやうに、模様の輪廓だけを出来るだけ軽く、青花か（青花紙をちぎつて小皿に入れ、少々の水を入れて出た青い汁）を小筆につけて描くか、鉛筆で描く。繪



(下繪の描き方)

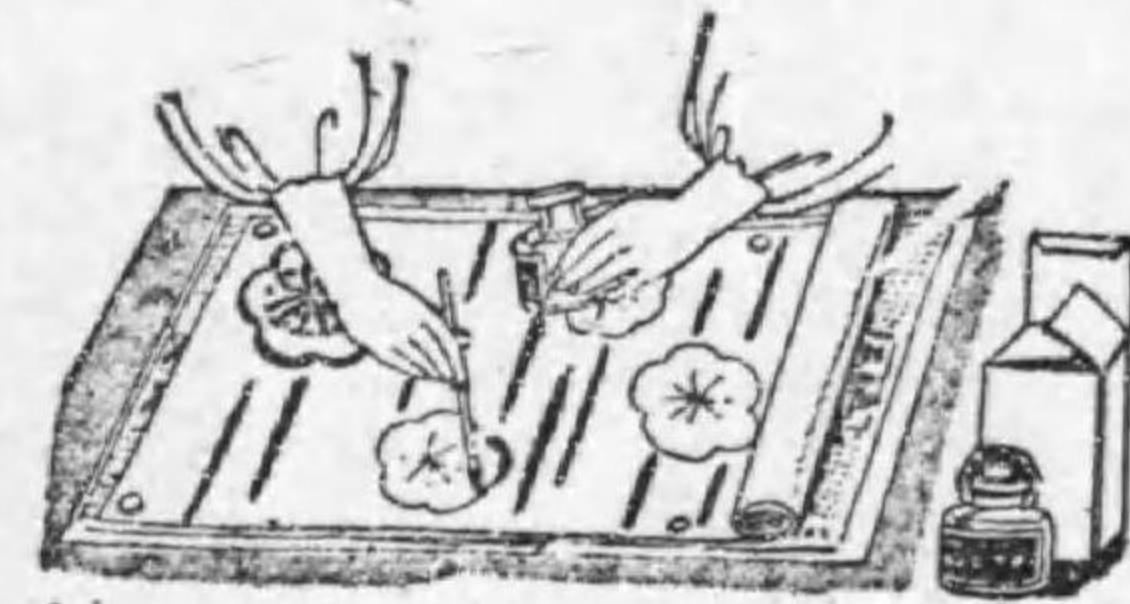
模様は何なりと各自の好みである。かうして片端から下繪を描き、全體におよぶ。

▲液の描き染め方 このナフテン液は、筆につけたならば、手早く描かないと、恰度蠟描をするのと同じで、蠟が固まるやうになるから、そのつもりで描方に注意を要する。

先づ「模様の描き染め圖」のやうに、裁板かテーブルのやうな平らな板の上に、新聞紙を敷き、その上に布をのせて、紙ですらぬやうに止めておく。そして最初に横線だけを白の液で描き、線をみな描き上げたならば、次に花を描く。

花は、この模様ではまづ、とき色と黄色の二色が適當であらう。大きい方の花をとき色に、小さい方の花を黄色に、半々ぐらひに分ける。また、花の蕊は、黄か白で描くと、すつと生きてくる。

なほ、これは圖のやうに、液の瓶を左手に持つて、筆に液を滴らぬ程につけたならば、無造作に大膽に描く。自然に出る筆のかすれは、この場合却つて味があるものである。そして液は、描いて



(模様の描き染め圖)

あるそばからすんぐ、乾いてゆくから、順送りにして描きつけ、すつかり描き終へて乾いたならば、いつたん水によく浸けておいて、それから地染めに取りかゝる。

▲地染の染め方 絞染や無地染を、煮染めするのと全く同じである。布の浸る程の水を洗面器に入れ、用意してある酸性染料のエンジ色を、茶呑茶碗にでも取出したならば、熱湯を注いで溶解し、小布で漉しながら、約三分の一を水に入れて、よく攪拌し、これを七輪か瓦斯火にかけ、水浸けしてある布を引揚げて、水を軽く切り、手早く布を入れ、萬遍なく繰り廻しながら染める。染液が熱くなつて来て、染まつたならば布を引揚げ、再び染料を足し加へて、前の要領で染色するのであるが、好みの色になつたならばまた布を引揚げて、酢を茶呑茶碗で一杯ぐらゐを入れ、もう一度染める。恰度染液は、煮えたゝぬ程度で、ちよつと手の入れられぬ加減に、染めるのがよろしく、絞染のときのやうに、ぐらぐら煮沸つてはいけないのである。なほ、此際繰返して言ふまでもないが、濡れ色は濃く、乾いてうすくなるものであるから、その

つもりで好みの色を濃目にする。

引揚げたならば、再三水洗ひをして、次に洗面器に布のたつぷり浸る程の水を入れ、これにアンモニア水を、茶呑茶碗で一杯を入れて攪拌せ、この中へ水洗した布を二三分ほど浸けておく。すると、描いた模様が次第に柔かになつて、防染液の餘分なものが取り除かれて、こゝに完全な染色ができ上る。なほよく振り出し、引揚げて、充分に水濯ぎをなし、最後に、光澤出しのために、ちよつと酢味を感じる程度に酢を入れた水に、暫時浸しておき、水濯ぎをしないで、そのまゝ水を搾り(布を振り絞らずに固く押し搾る)日蔭に自然干をする。乾いたならば、布裏からアイロンをかけて押し、これで染上つたのであるから、次にはこれを仕立てればよいのである。

▲注意 ナフテン色液を薄くするためには、白液を混ぜて用ひ、色と色とを混ぜて、他の色を出すときは、瓶の中へ混ぜて振り、よく混じつたところで用ひ、栓は固くしておくこと。液を筆につけたまゝ永くおくと、固まりついてしまふから、そんな時にはアンモニア水の薄い溶液に、暫く浸けておくとすぐとれる。手についたのも同様に綺麗になる。アンモニアは、どんな田舎の薬店にもある。極く安價なものである。

色の褪せたモスリンを美しい花村雲染に

モスリン着物の流行は、近年すばらしい勢いで普及され、従つて色合も柄合も、相當進歩したものを
のを見受けるのであるが、本染物はともかく、捺染物となると、割合に安價に出来てゐるせいか、
色の褪せ易いことも驚くほどである。で、布地はまだ丈夫でも、色が褪せたため、そのまゝ藏ひ込
んであつて、用途に困つてゐる、とは屬々主婦の方々からも聞く言葉である。

家庭の染色などは、前言にも述べた通り、主にかうした古物を染め替へたり、色揚げをしたりし
て若返らせ、再び用ひるところに眞の價値があるのである。殊にモスリンなどの類であつたら、染
上りもよく、染方なども簡單で、用途なども他の布地に比べて随分廣いのである。

茲には、モスリンの着られなくなつた着物を脱色して、美しい模様染めかへる「花村雲染」の
新染方を記述しやう。

尙ほこれは他の絞染などのやうに、むづかしい下繪を描いたり、絞つたりする世話のない、新考
案の方法なのであつて、かうした古物を染めかへる染方としては、最も好適な染色法である。また

この染方で、新しい白絹とかモスリンとかを、薄い淺黄や鴉色などに染めて、長襦袢などになると
夏物としていかに涼しさうなものが出来るのである。

▲脱色の仕方 染方は古い物でも新しい物でも同じであるが、たゞ古い物を染める場合には、元の
染め色を脱いてしまつてから、染めなければならぬ。しかし、薄色の無地物などであれば、こんど
新たに染める色合によつては、脱かずにそのまゝ染められる。例へば鴉色の古いものなどは、紫、
臙脂、緑、赤などに、黄とかクリーム色には、赤、臙脂、茶、緑、青などが、そのまゝ色脱をしな
いで綺麗に染められる。また黒に染替へるものは、元はどんな色合のもので、大抵の場合、脱か
ずに染めても結構染まるのである。

さて、その脱色の仕方であるが、同じ脱色法と言つても一樣にはゆかない。布地の質によつて脱
色劑と方法とが、それ／＼違つてゐる。もしそれを誤れば、布をいためる虞れがあるのである。

それにまた、如何に優れた方法であつても、家庭で容易く得難い藥品類を使用するとなれば、そ
れは家庭染色として餘り望ましいことではない。こゝに述べる方法ならば、すでに御承知のものを
選んであるし、方法も極く簡單なのであるから、何人も容易に實行し得らるゝものである。

▲材料と準備 色を脱くにも、染める時と同様煮沸するから、七輪か瓦斯を準備する。用器は布の充分浸るほどの、大きな瀬戸引の洗面器か鍋の類。(石油の空罐の蓋を抜きとり、油氣をよく脱いたものなど好適)

脱色剤としては、色の褪せた着尺モスリン一枚分として、左のものを揃へる。

ハイドロサルファイト

一瓶(約八匁五分入)

アムモニア水

小盃に一杯

マルセル石鹼

七八匁

洗濯曹達

少量

▲脱色の順序 まづ着物を解いて端縫し、元の反物のやうに長くしてしまふ。そしてよく日光にあて、乾かし、ブラツシで塵埃を拂ひ去り、水に浸して充分に振り洗ひをし、更に水に漬けておく。七八匁のマルセル石鹼を、鯉節を削るやうに削つておき、これと小盃一杯のアムモニア水とを火にかけて、布の充分浸るだけの湯(約四升位)に溶かす。

これがよく溶けたところで、さきに水に漬けてある布を引き上げ、軽く水を切つて、この中へ入

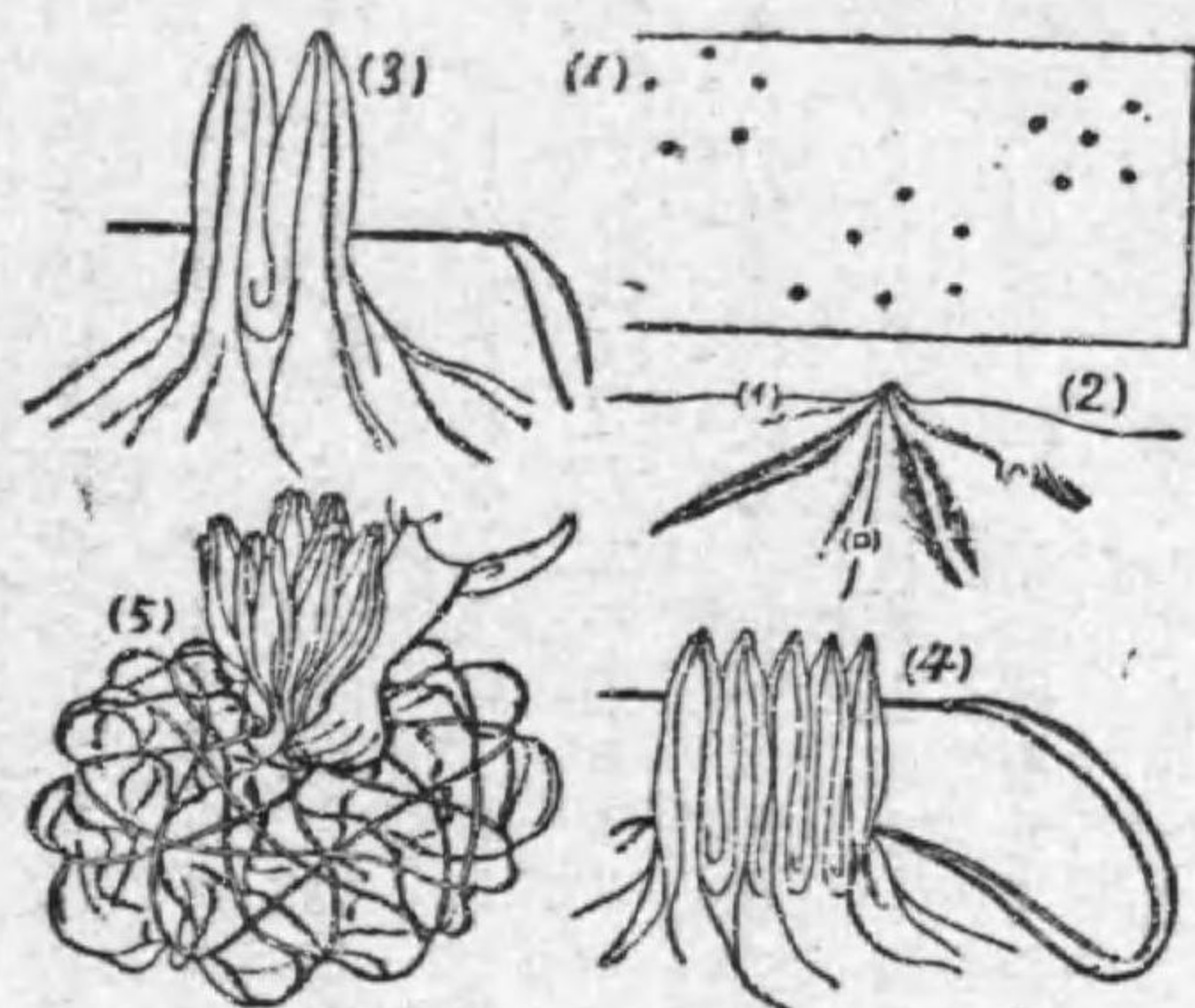
れ、上下左右に繰り廻しながら、三十分ほど煮沸する。そして引き上げ、洗濯曹達を溶いた温湯で洗ひ、更に水で充分濯ぐ。

これだけでももう、今度染めやうとする色合(たとへば紺、海老茶などの濃い無地物)によつては、染めに差支へのないだけに脱けてゐるが、花村雲染のやうに、花を白く染め出した場合には出来るだけ白く脱色したのであるから、更に今一度の脱色操作をやる。

ハイドロサルファイトを前のやうに、布の充分浸るだけの湯に入れて火にかけ、よく溶けたところで布を入れ、三十分位繰り廻しながら煮沸してゐると、面白いほどだんぐりと白くなつて了ふ。

そしたらこれを引上げ、初めは温湯で濯ぎ出し、次に清水で充分振り洗ひをして乾かす。この脱色法であれば、大抵の染モスリンは、完全に脱色することが出来るのである。

▲花村雲染の染方 例へば模様の花が、五つか六つづゝ一塊りとなつてゐるものとすれば、その位置は、布巾の左右に交互においてゆくと、染め上つてからの工合がよろしい。そこで「紋り方順序」の圖(1)のやうに、布へ標をしておく。標と標の間は三寸位にして、約一尺おきにしておく。(下繪描用の青花紙で描くのである)



(絞り方順序)

ら、(5)のやうに絞る前に下染をし、それから絞つて二度目を染める。

▲下染 まづ布を水につけておき、鴉色の染料の茶匙半分位を茶碗に分け、熱湯を注いでよく溶かす。

▲絞り方 點のしるしを山にして、布を二重に折り(2)のやうに(イ)(ロ)(ハ)と五枚に折りたゝむ。そして、針に丈夫な糸を二重につけて、いま折りたゝんだ布の尖端から一寸位入れて、巾の中央に針を通す。次にまたとなりの標點も同様に折りたゝんでは(3)のやうに針を通す。

かうして次々に五つなり六つなりを折りたゝんでは通して(4)のやうに、尖端へ寄せたところへ反對に針を刺し、ぐつと引き締めて、出来るだけ固く糸を結んでしまふ。

次に一塊づゝの花を絞つて、布全體をして了つたならば(5)のやうに一まとめにして絞る、こゝでは二重染にするのであるか

染器に布の充分浸るだけの水を入れて火にかけ、まだ熱くならぬうちに、溶いてある染料を半分ほど入れて、よく攪き混ぜる。

そして水に浸けてある布を引き上げ、水を軽く搾り切つて、この液の中に入れる。布をよく繰り廻しながら染めるのであるが、液がだんぐ熱くなつて来て、色も着いてくる。

程経つて布を引きあげ、残りの染料を足し、前のやうにして染め、また引上げて助劑の酢を茶碗一杯入れ、再び攪拌して布を入れると、ぐつと色が濃くなつてくる。

かうして染液が煮え沸ち、色がついてきて、好む色よりもやゝ濃い目になつたところで引上げ、ざつと水に濯ぎ、水は、出来るだけ搾つてしまふ。

これで下染の鴉色が染まつたわけである。今度はこれを(5)圖のやうに一まとめにして絞るのである。まづ全部とも一塊づゝの絞模様を集めて左手に掴み、圖のやうに絞模様を上につかせ、残りの分を、くるく糸を捲いて固く絞る。そしてこれを臙脂色に再び染めるのであるから、水につけておく。

▲二度染 臙脂色の染料を、茶匙に山盛り一杯、茶碗に取り分けて熱湯で溶かす。そして鴉色を染

めたやうに、二度なり三度なりを染料を足し加へ乍ら煮染をするのである。

酢は茶呑茶碗二杯ぐらゐを入れる。かうして好む色よりも濃い加減に染つたところで、引上げて水によく濯ぎ、くるくろ捲いた糸をほどき、更によく水濯ぎをして、バケツか鹽に布の浸るだけの水を入れ、これに酢を(幾分酢味を感じる程度に)混ぜて、この中へ約四十分程布を漬けておく。そして引き上げ、水に濯がずに、また搾らずに、日陰干しにして乾かすのである。

望む色に、また村雲の工合もよく出来てゐれば、このまゝでもう絞り糸を解き、アイロンなり湯伸なりをかけるのである。

尙ほもし、村雲の工合など面白くゆかね場合には、花の絞りを解かないうちに、いま一度(5)のやうに糸を捲いて、同様に染めるのである。だから乾くまでは、花の絞りを解かぬことである。

以上で美しい村雲染めが完成したわけであつて、其他の染方に於ける注意は、だいたい他の染色法と同様である。

服飾品の洗濯利用法

多くの人が、古くなつて色が變つたり、汚れたりした帽子や洋傘や履物などを、もうそのまゝ使へないものゝやうに廢物として、棄て、構はないものである。高價な冬物などは、洗濯屋などに出して手入れをする人もあるが、割合に簡単な夏物などになると、そのまゝもうそれを棄て、願ないこれなどは、最も不經濟な、又製産物質に對する貴重觀念の足りないものである。それらは、ちよつとした心得ひとつで、再た新しいものゝやうに若返らせ、再使用の便に供することができるのである。次にはその簡易な洗濯利用法を述べることにしやう。

衣類の洗濯法

先づ洗濯には水が一番肝心である。硬水と言つて井戸から湧く水はどうも鐵物質を含んでるから、白いものが薄赤くなつたりして洗濯にはよくないものが多い。川の水の清いのは流れる中に揉まれて鐵物質を洗ませてしまふから、軟水となつてゐて洗濯に好適だ、水道の水も軟水だからよいけれども、成可く波み置きにして上の方を使ふともつとも柔らになつてゐる。一番上等なのは雨水をきれいに取つて置いたのだ。

井戸の水を使ふなら例へて澄んだ水でも砂で濾して、日の當る處へ置いてから使ふがよい。それからお米の磨水、即ち白水の二番目三番目をとつておくと洗濯には極く重寶だ。

白い物の洗濯

同じ白い物でも木綿、絹物、毛織物はその洗ひ方も漂白法も違ふ。

▲木綿物 白い木綿物は水が悪いと白くならない、浴衣地等は白水へ洗濯曹達を少し入れて洗ふとよい。ざつと水洗ひして表面の汚れを落し、石鹼の溶液（粉末石鹼）の中に浸し、特に汚れの甚だしい部分へは洗濯石鹼をなすりつけて、洗濯器があればその中へ石鹼の溶液と共に入れて洗ふ。鹽ならば板の上に洗濯物を擡げて、ブラシに洗濯液を含ませてさつさとし洗ひをする。特に汚れた所や汚點のある部分は石鹼をつけて手で揉み洗ひをする。そしてすつかり洗つたならば水を取替

へて水の澄むまで丁寧に濯ぎ洗ひをする。洗濯物はこの濯ぎ洗ひが一番大切だ。折角綺麗に洗濯をしても、濯ぎが不充分だと、直ぐ汚れがついたり、また生地を害める。濯ぎ上げたら一つ一つ見分けて綺麗なものはそのまゝでよいが、汚點のあるものや、黒ずんだ物などは、漂白をしなければならぬ。（漂白の仕方は後節を参照のこと）そして糊付をして乾かし、アイロンで仕上をする。石鹼の分量は、水五升に對し粉末石鹼を普通の煎茶碗に一杯位とする。

卓子掛の様なものは、白水や曹達で洗つてもよし、アンモニヤを水へ滴して洗つてもよい。それへ硼砂を混ぜるとなほよい、大抵なものはアンモニヤを少し水へ滴して洗ふときれいになる。洗ふ物に譯の分らない汚點がついてゐたら、先づ卵の黄味をその汚點へ塗つておいて、それから洗ふと大抵おちる。

▲絹物及毛織物 絹物を洗ふには、一反の物だつたら卵二つ位をよく溶かして水に混ぜて洗ふと大層きれいになる。これも汚點があつたら先へ卵の黄味を塗るとよい。色模様のもものは色が褪めるから日向へ干してはならぬ。普通の洗濯石鹼を使ふと、アルカリのために白は黄ばみ、地質は硬くなつて光澤も弾力もなくなつてしまふ。故にラックスといふ舶來の石鹼（値段は少々高いが）を使